

太山寺経田遺跡

— 1～5次調査 —

1999

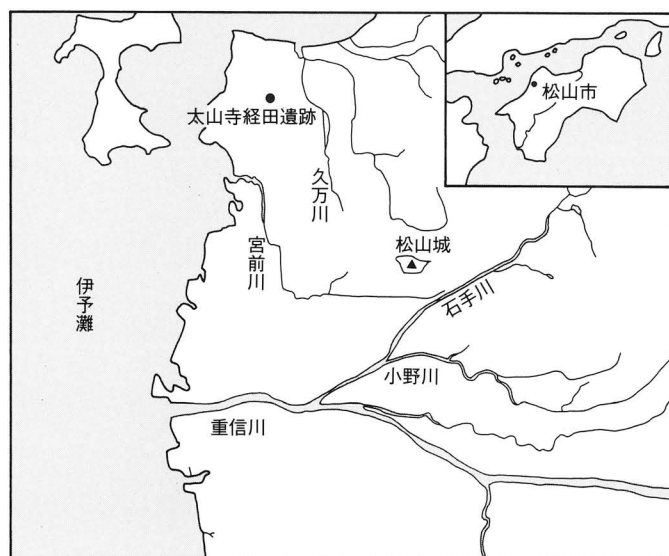
松山市教育委員会

(財)松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

たいさんじきょうでんいせき
太山寺経田遺跡

— 1～5次調査 —



1999

松山市教育委員会

(財)松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



巻頭図版1 太山寺経田遺跡（1～4次調査）の垂直写真

序

この報告書は、平成5年度から同9年度にかけて、松山市の北西部、和気地区の太山寺山塊における農道整備工事に伴う「太山寺経田遺跡」の発掘調査をまとめたものであります。

太山寺山塊上には、勝岡古墳群、太山寺古墳群、片廻古墳群、高月山古墳群、船ヶ谷古墳群など数多くの古墳群が密集する地域で、今までに高月山古墳、船ヶ谷向山古墳、船ヶ谷三ツ石古墳、鶴ヶ峠古墳群が調査されています。また、四国霊場52番札所「太山寺」があり、同寺の本堂は愛媛県下でも最大の木造建築物として国宝に指定されています。さらに、東の低地には、愛媛県下を代表する縄文時代晩期の「船ヶ谷遺跡」・「大淵遺跡」があります。このように、和気地区には貴重な文化遺産が残っております。

太山寺経田遺跡は、数次にわたる調査によって、弥生時代前期の土坑や古墳時代中期の竪穴住居址をはじめ、中近世の石列状遺構を確認し、当該期の遺物が多数出土しました。これらによって、当地域の丘陵における土地利用のあり方を明らかにすることができました。

このような成果をあげることができたのも、関係各位の方々の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のたまものであり、心から感謝申し上げる次第です。

なお、この本書が今後各方面にわたってご活用いただければ幸いです。

平成11年9月30日

財団法人 松山市生涯学習振興財団

理事長 中村時広

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会及び財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成5年度から平成9年度にかけて実施した、松山市太山寺町甲1459外における太山寺経田遺跡1～5次調査の報告書である。
2. 遺構の略号は、住居址：SB、土坑：SK、溝：SD、柱穴：SP、不明遺構：SXとし、各調査地ごとに通し番号を1から付記した。
3. 本書で示した方位は、1～4次調査は磁北、5次調査及び付図は平面直角座標Ⅳ系にしたがった。
4. 遺構の測量は、調査担当者及び担当者の指示のもと補助員が実施した。
5. 遺物の実測及び掲載図の製図は、各調査担当者の指示のもと、波多野恭久、山邊進也、堀内哲也、大西正規、阿部研三、関正子、田崎真理、萩野ちよみ、吉井信枝、池田学、岡崎政信、後藤公克、酒井直哉、木下奈緒美、岩本美保、村上真由美、森脇信介、水木慎也、永木俊彦、猪野美喜子、渡部大介、大森一成、矢野久子、丹生谷道代、多知川富美子が行った。
6. 掲載の遺構図・遺物図は、スケール下に縮尺を表記した。
7. 写真図版は、遺構の撮影は担当者で大西朋子が、遺物の撮影は大西朋子が担当し、図版作成は担当者で協議のうえ大西朋子が行った。
8. 本書の執筆は、栗田正芳・小笠原善治・山本健一・武正良弘・水本完児・加島次郎が行い、編集は栗田正芳が担当した。資料収集には、白石治徳氏の協力を得た。
9. 調査中、鷓久森賢夫氏、渡部集氏、芳野内直幸氏、太山寺建設、(株)ワキタ、(株)松山スギウエ、(株)セットアップ、(株)パスコに便宜を計って頂き、記して感謝申し上げます。
11. 本報告書に関する資料は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。

本文目次

第I章 はじめに	〔栗田〕	
1. 調査に至る経緯		1
2. 刊行組織		
3. 環境		3
第II章 1次調査	〔小笠原〕	
1. 調査の経緯		11
2. 層位		13
3. 遺構と遺物		19
4. 小結		39
第III章 2次調査	〔山本〕	
1. 調査の経緯		45
2. 層位		45
3. 遺構と遺物		50
4. 小結		68
第IV章 3次調査	〔武正〕	
1. 調査の経緯		83
2. 層位		85
3. 遺構と遺物		85
4. 小結		91
第V章 4次調査	〔水本〕	
1. 調査の経緯		97
2. 層位		99
3. 遺構と遺物		99
4. 小結		103
第VI章 5次調査	〔加島〕	
1. 調査の経緯		109
2. 層位		111
3. 遺構と遺物		111
4. 小結		118
第VII章 まとめ	〔栗田〕	119

挿 図 目 次

第 I 章 はじめに

第 1 図	太山寺経田遺跡位置図 (縮尺 1 / 5000)	2
第 2 図	松山平野の地形図 (縮尺 1 / 100000)	3
第 3 図	太山寺の地質図 (縮尺 1 / 50000)	4
第 4 図	周辺の遺跡 (縮尺 1 / 50000)	6

第 II 章 1 次調査

第 1 図	調査地位置図 (縮尺 1 / 500)	14
第 2 図	試掘トレンチ土層図 (T21) (縮尺 1 / 40)	15
第 3 図	試掘トレンチ土層図 (T16・17) (縮尺 1 / 50)	15
第 4 図	試掘トレンチ土層図 (T14・13・25) (縮尺 1 / 50)	16
第 5 図	各区土層図 (縮尺 1 / 50)	18
第 6 図	A 区遺構配置図 (縮尺 1 / 50)	20
第 7 図	S D 1・S D 2 測量図 (縮尺 1 / 50)	21
第 8 図	S D 1・S D 2 遺物出土状況図 (縮尺 1 / 40)	22
第 9 図	石列測量図 (縮尺 1 / 40)	23
第 10 図	出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4・1 / 2・1 / 3)	24
第 11 図	B 区遺構配置図 (縮尺 1 / 50)	26
第 12 図	東南壁土層図 (縮尺 1 / 40)	27
第 13 図	S B 1 測量図 (縮尺 1 / 40)	28
第 14 図	S B 1 遺物出土状況図 (縮尺 1 / 40)	29
第 15 図	S D 1・S D 2 測量図 (縮尺 1 / 40)	30
第 16 図	出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4・1 / 3)	31
第 17 図	C 区遺構配置図 (縮尺 1 / 50)	32
第 18 図	土層図 (縮尺 1 / 50)	33
第 19 図	S D 1 測量図 (縮尺 1 / 40)	34
第 20 図	D 区遺構配置図 (縮尺 1 / 50)	36
第 21 図	石列測量図 (縮尺 1 / 50)	37
第 22 図	石列交差部測量図 (縮尺 1 / 20)	38
第 23 図	出土銭拓影 (縮尺 1 / 1)	38

第 III 章 2 次調査

第 1 図	調査地測量図・トレンチ、調査区位置図 (縮尺 1 / 500)	47
第 2 図	トレンチ土層図 (T 2・8・14) (縮尺 1 / 50)	49

第3図	T20土層図 (縮尺 1/50)	50
第4図	A区測量図 (縮尺 1/80)	51
第5図	A区礫石密集部測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/80・1/4)	52
第6図	B区測量図 (縮尺 1/50)	54
第7図	B区南壁土層図 (縮尺 1/50)	55
第8図	B区遺構配置図 (縮尺 1/50)	56
第9図	B区SD1測量図 (縮尺 1/30)	57
第10図	B区3①層出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/4・2/3)	57
第11図	B区3②層出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/4)	57
第12図	B区SK1測量図 (縮尺 1/30)	58
第13図	B区SK1出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	59
第14図	B区4①層出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	60
第15図	B区4②層出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	61
第16図	B区4③層出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	62
第17図	B区4⑤層出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	62
第18図	B区4⑥・4⑦層出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	62
第19図	B区層位不明遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)	63
第20図	C区測量図・遺構配置図 (縮尺 1/100)	64
第21図	C区土層図 (縮尺 1/50)	65
第22図	C区SK1測量図 (縮尺 1/30)	66
第23図	C区SK1出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/2)	67
第24図	C区SK2測量図 (縮尺 1/30)	68
第25図	C区SK2出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	69
第26図	C区SD1・2・3測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・2/3)	70
第27図	トレンチ出土遺物実測図 (T1・11) (縮尺 1/4・1/3)	71

第IV章 3次調査

第1図	調査地位置図 (縮尺 1/1000)	84
第2図	A区調査区壁土層図 (縮尺 1/60)	86
第3図	A区遺構配置図 (縮尺 1/80)	87
第4図	B区調査区壁土層図 (縮尺 1/60)	88
第5図	B区遺構配置図 (縮尺 1/80)	89
第6図	出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・2/3)	92

第V章 4次調査

第1図	調査地位置図 (縮尺 1/500)	98
第2図	T3・T15西壁土層図 (縮尺 1/40)	100
第3図	A区測量図 (縮尺 1/80)	101

第4図	A区列石測量図 (縮尺1/40)	102
第5図	B区測量図 (縮尺1/80)	103
第6図	B区集石測量図 (縮尺1/40)	103
第7図	C区測量図 (縮尺1/80)	104
第8図	C区集石測量図 (縮尺1/40)	104
第9図	D区測量図 (縮尺1/80)	105
第10図	D区集石測量図 (縮尺1/40)	105
第11図	E区測量図 (縮尺1/80)	106
第12図	E区集石測量図 (縮尺1/40)	106

第VI章 5次調査

第1図	地形測量図 (縮尺1/900)	110
第2図	A区位置図 (縮尺1/200)	111
第3図	A区測量図 (縮尺1/60)	112
第4図	B区位置図 (縮尺1/200)	113
第5図	T4測量図 (縮尺1/60)	114
第6図	B区測量図 (縮尺1/60)	115
第7図	C区位置図 (縮尺1/200)	116
第8図	C区測量図 (縮尺1/60)	116
第9図	出土遺物実測図 (縮尺1/3)	117

付図1 調査地全測図(1)

付図2 調査地全測図(2)

表 目 次

第I章 はじめに

表1	調査地一覧	2
----	-------	---

第II章 1次調査

表1	竪穴住居址一覧	41
表2	溝一覧	
表3	石列一覧	
表4	A区出土遺物観察表(土製品)	42
表5	出土遺物観察表(銭貨)	

第III章 2次調査

表1	A区礫石密集部観察表	72
----	------------	----

表 2	B区溝一覽	
表 3	B区土坑一覽	
表 4	C区土坑一覽	
表 5	C区溝一覽	73
表 6	A区礫石密集部出土遺物觀察表(土製品)	
表 7	B区 3 ①層出土遺物觀察表 (土製品)	
表 8	B区 3 ①層出土遺物觀察表 (石製品)	
表 9	B区 3 ②層出土遺物觀察表 (土製品)	
表10	B区 S K 1 出土遺物觀察表 (土製品)	74
表11	B区 4 ①層出土遺物觀察表 (土製品)	
表12	B区 4 ②層出土遺物觀察表 (土製品)	75
表13	B区 4 ③層出土遺物觀察表 (土製品)	76
表14	B区 4 ⑤層出土遺物觀察表 (土製品)	77
表15	B区 4 ⑥・⑦層出土遺物觀察表 (土製品)	
表16	B区層位不明遺物觀察表 (土製品)	78
表17	C区 S K 1 出土遺物觀察表 (土製品)	
表18	C区 S K 1 出土遺物觀察表 (礫石)	
表19	C区 S K 2 出土遺物觀察表 (土製品)	
表20	C区 S D 1 出土遺物觀察表 (石製品)	79
表21	T 1・11出土遺物觀察表 (土製品)	

第IV章 3次調査

表 1	溝一覽	93
表 2	土坑一覽	94
表 3	性格不明遺構一覽	
表 4	出土遺物觀察表 (土製品)	
表 5	出土遺物觀察表 (石製品)	

第VI章 5次調査

表 1	出土遺物觀察表 土製品	118
表 2	出土遺物觀察表 鉄製品	

写真図版目次

巻頭図版 1 太山寺経田遺跡（1～4次調査）の垂直写真

第Ⅱ章 1次調査

- 図版 1. 1. 調査地遠景（東より）
2. 調査前全景（南東より）
- 図版 2. 1. A区遺構検出状況（北より）
2. A区SD1遺物出土状況（東より）
- 図版 3. 1. A区遺構完掘状況（北より）
2. B区遺構検出状況（南東より）
- 図版 4. 1. B区北部拡張後、遺構検出状況（北東より）
2. B区SB1遺物出土状況（北東より）
- 図版 5. 1. B区SD1・2礫出土状況（北東より）
2. B区遺構完掘状況（南東より）
- 図版 6. 1. C区遺構完掘状況（北より）
2. D区遺構検出状況（北西より）
- 図版 7. 1. D区石列交差部礫配置状況（北より）
2. D区遺構完掘状況（北西より）
- 図版 8. 1. A区SD1・2、B区SB1、石列出土遺物

第Ⅲ章 2次調査

- 図版 9 1. 調査地全景（北より）
2. 調査前風景〔北部〕（南より）
3. 調査地南部伐採状況（南より）
4. 調査地南部伐採状況（南東より）
5. 調査地中央部伐採状況（南より）
- 図版10 1. T2土層（東より）
2. T8土層（北西より）
3. T14土層（北東より）
4. T20土層（北西より）
- 図版11 1. A区完掘状況（北より）
2. A区西壁土層（東より）
- 図版12 1. A区礫石密集部検出状況（北より）
2. A区礫石密集部堀削状況（東より）
- 図版13 1. A区礫石密集部断面（東より）
2. A区礫石密集部断面（北東より）

- 3. A区礫石密集部遺物出土状況(東より)
- 図版14 1. B区完掘状況(東より)
- 2. B区SD1(北より)
- 図版15 1. B区SK1(北より)
- 2. B区SK1遺物出土状況(北東より)
- 3. B区SK1遺物出土状況(北より)
- 図版16 1. C区全景(北西より)
- 2. C区北部完掘状況(西より)
- 図版17 1. C区南部完掘状況(北東より)
- 2. C区土層(北東より)
- 図版18 1. C区SK1(東より)
- 2. C区SK1土層(北東より)
- 3. C区SK1遺物出土状況(東より)
- 図版19 1. C区SK2(北東より)
- 2. C区SK2土層(南東より)
- 図版20 1. C区SK2遺物出土状況(北東より)
- 2. C区SK2遺物出土状況(北東より)
- 3. C区SK2遺物出土状況(南東より)
- 図版21 1. C区SD1(南東より)
- 2. C区SD1土層(北東より)
- 3. C区SD2(北東より)
- 4. C区SD2礫石出土状況(北東より)
- 図版22 1. C区SD3(東より)
- 2. C区SD3土層(東より)
- 3. 作業風景B区にて(北西より)
- 図版23 1. A区・B区・C区出土遺物

第IV章 3次調査

- 図版24 1. A区遠景(北より)
- 2. B区完掘状況(西より)
- 3. B区包含層出土遺物
- 4. 表採遺物(T10付近)

第V章 4次調査

- 図版25 1. 調査前全景(南より)
- 2. A区石列出土状況(西より)
- 図版26 1. C区集石出土状況(北西より)
- 2. D区集石出土状況(南より)

- 図版27 1. E区集石出土状況（南より）
2. E区集石出土状況（西より）

第VI章 5次調査

- 図版28 1. 調査前（北西より）
2. 調査前〔近景〕（北西より）
- 図版29 1. 調査前〔近景〕（南より）
2. 調査前〔近景〕（南より）
- 図版30 1. A区完掘状況（南より）
2. B区〔遠景〕（南西より）
- 図版31 1. B区石列検出状況（南西より）
2. B区北壁（南より）
- 図版32 1. B区完掘状況（南より）
2. B区東壁実測風景（南より）
- 図版33 1. T6・T7完掘状況（南より）
2. C区石列検出状況（南西より）

第 I 章 はじめに

1. 調査に至る経緯

1992（平成4）年12月、松山市農林水産部農林土木課（以下、農林土木課）より、農道整備事業に伴う松山市太山寺町甲1459番地先における埋蔵文化財確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

申請地は、松山市の指定する『片廻遺跡（弥生時代）、太山寺古墳群、片廻古墳群、素鷲神社』内にあり周知の遺跡として知られている。

農林土木課と文化教育課並びに（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は、工事区間が長く、また多年度にわたる工事であるため調査方法について協議を行う。農道整備事業計画は、平成5年度から平成9年度にかけて5ヶ年計画工事のため、単年度ごとに工事対象地内で試掘調査を実施し、遺跡が発見された場合には記録保存のために本格調査を実施することとする。

平成5年度から文化教育課指導のもと埋文センターが各年度毎に試掘調査を行った。その結果、遺跡が発見されたため、その発見された遺跡の周辺地域について埋文センターが発掘調査を実施した。平成5年度調査を1次調査とし、平成9年度の5次調査まで実施する。

2. 刊行組織（平成11年9月30日現在）

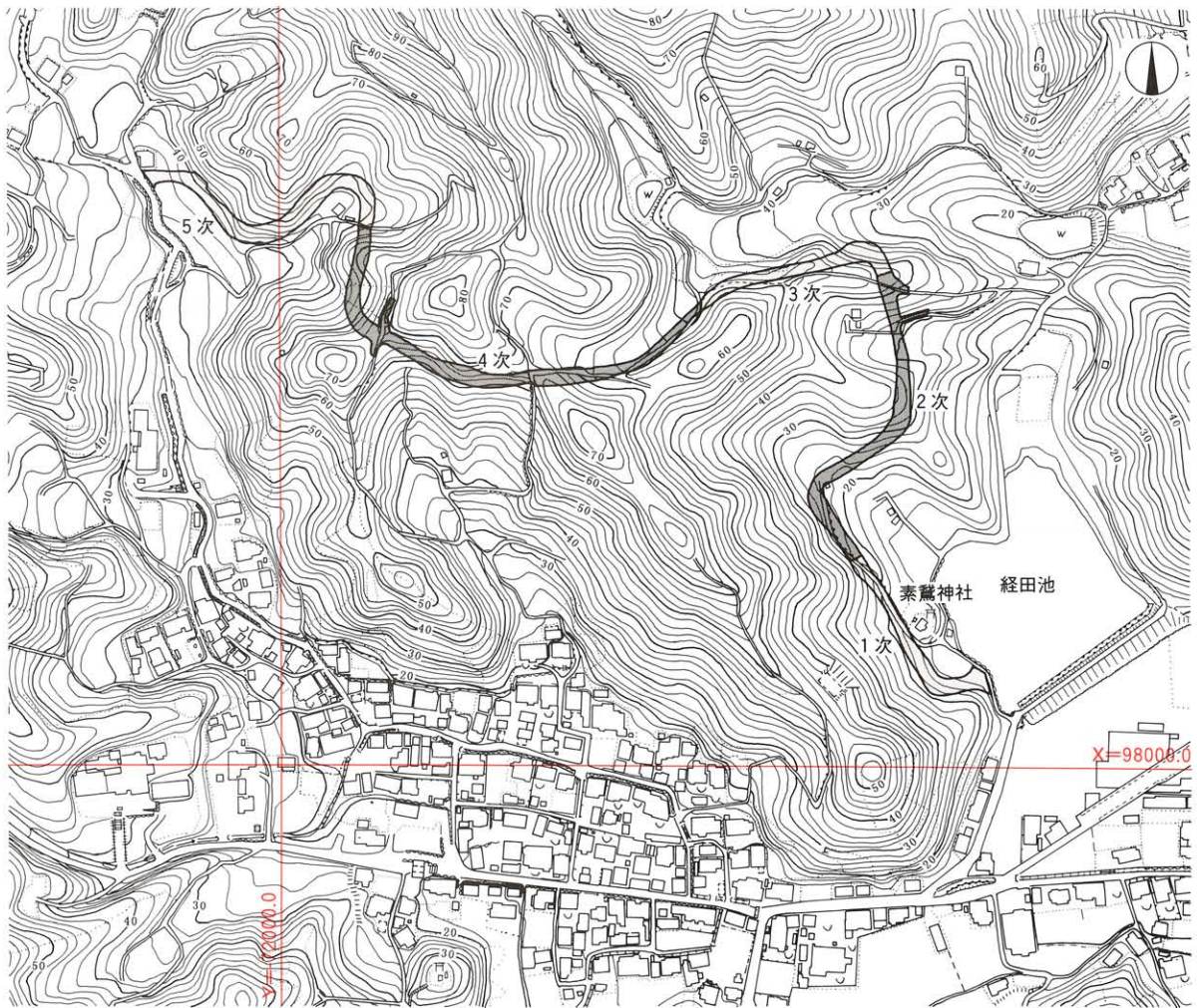
松山市教育委員会	教 育 長	池田尚郷
事 務 局	局 長	團上和敬
	次 長	森脇 將
	次 長	赤星忠男
文化教育課	課 長	松平泰定

（財）松山市生涯学習振興財団

理 事 長	中村時広
事 務 局 長	二宮正昌
事務局次長	河口雄三

埋蔵文化財センター

所 長	河口雄三
次 長	田所延行
調 査 係 長	田城武志
主 任	栗田正芳（文化教育課職員）
担 当	小笠原善治・山本健一・武正良弘・河野史知・ 水本完児・栗田茂敏・加島次郎



第1図 太山寺経田遺跡位置図 (S = 1 : 5,000)

表1 調査地一覧

遺跡名	所在地	対象面積	屋外調査期間
1次	太山寺町甲1459 外	800m ²	平成5年10月4日～同5年11月9日
2次	太山寺町乙677-1 外5筆	2,190m ²	平成6年9月5日～同6年12月26日
3次	太山寺町乙694-2 外	2,500m ²	平成7年6月1日～同7年8月31日
4次	太山寺町1934 外	2,800m ²	平成8年10月21日～同8年11月22日
5次	太山寺町1981 外	2,000m ²	平成9年12月15日～同10年1月30日

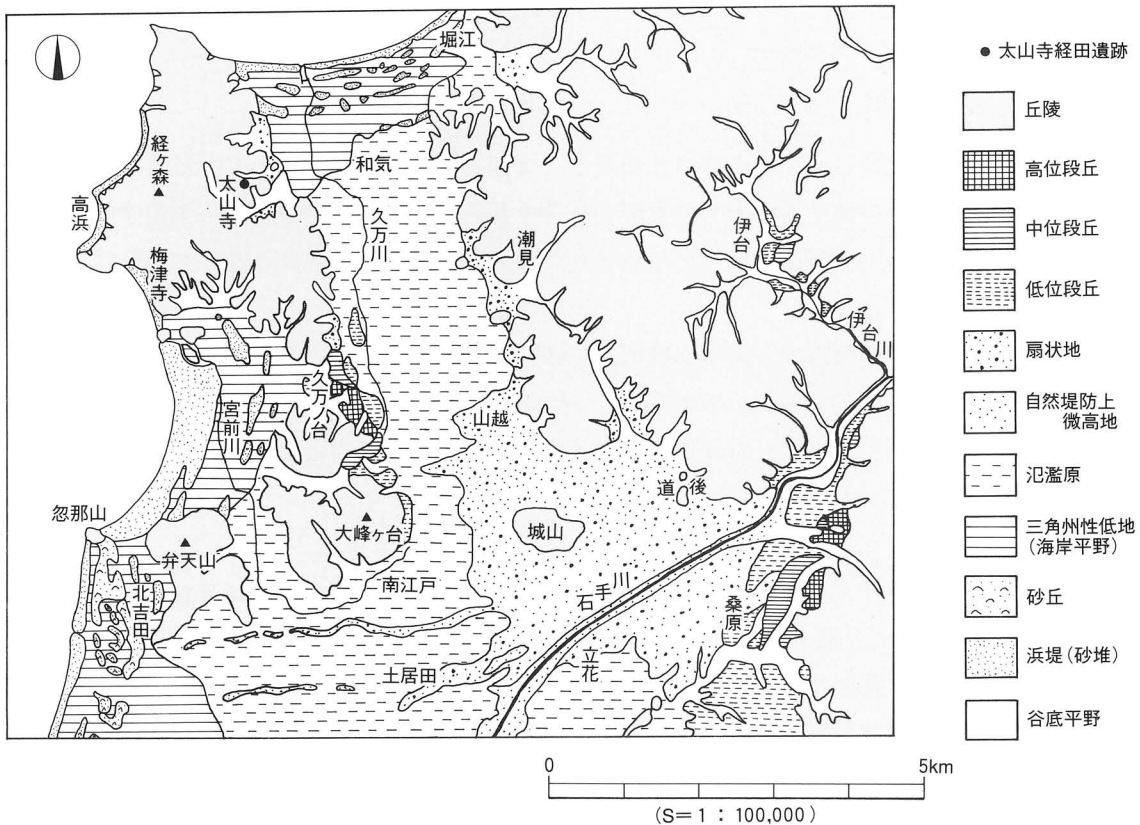
3. 環境

(1) 遺跡の立地

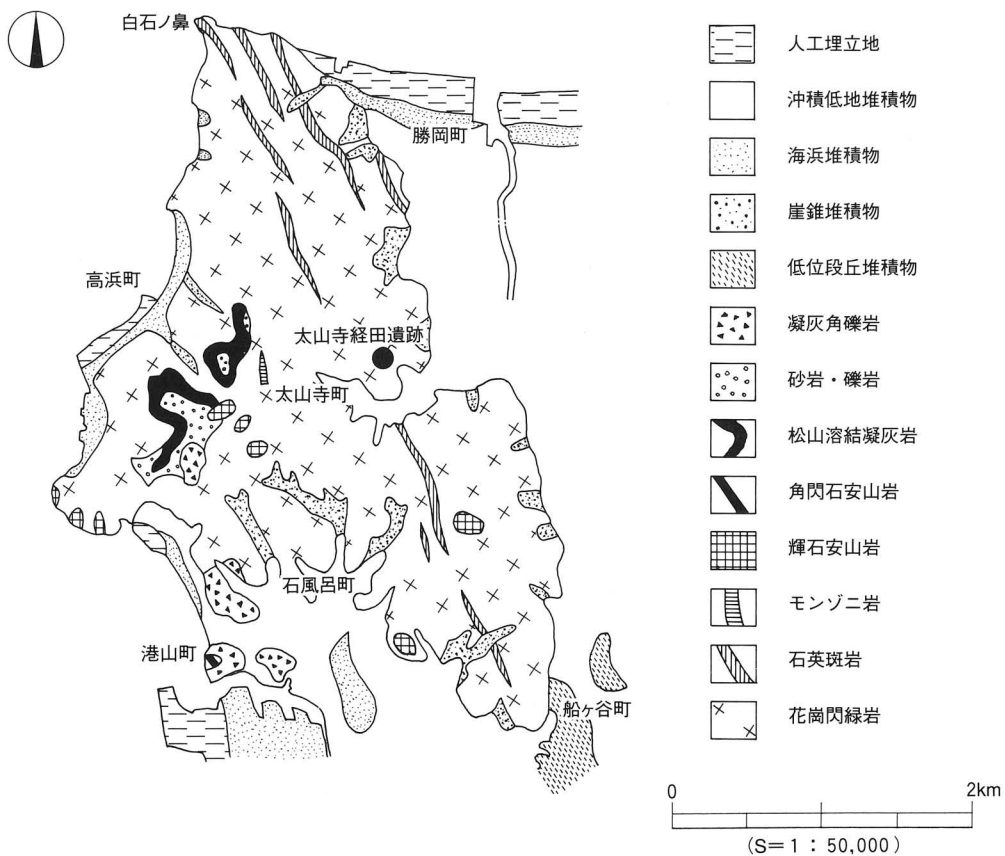
太山寺経田遺跡は、松山平野の北部にある太山寺経ケ森（標高約204.3m）を中心とする太山寺山塊のほぼ中央東寄りの丘陵上に立地している（標高約10m～67m）。この太山寺山塊の東には、堀江低地（堀江地溝帯）がひろがっている。この低地をはさんで東に高縄山系の丘陵が連なっている。

現在、松山平野を北東部から南西方向に流れる石手川は、この高縄山系に源を發し、扇状地を形成した後、重信川に合流し、伊予灘に注いでいる。石手川の旧流路は、現在とは異なり、現流路よりも約2 km北方の高縄山系南面にあたる御幸山麓を西流し、その山麓に沿って北方に流路を振り、堀江湾に注いでいたものとされており、堀江低地はこの河川活動によって形成された地溝性の沖積低地と河岸段丘とによって成り立ち、低地の規模は東西2～3 km・南北約7 kmで、南部の山越付近の標高が10～20m、堀江湾岸の和気・堀江付近で1～2 mの海拔高度を示している。

本遺跡周辺の河川には、現在、太山寺川と久万川がある。太山寺川は、経ケ森に源を發し、太山寺山塊の東側を北に流れて和気浜へと注いでいる。この川は、流域に広がる田畑の灌漑・生活用水として重要な河川で、経田・南勝岡・入山田・火打石・片岡・姥ケ谷など灌漑用溜池が数多く存在している。久万川は、久万ノ台周辺にその源を發し城北平野を貫流し、大淵遺跡の西を北流して和気浜に注いでいる。この川は明治20年頃まで、大淵遺跡近くまで小舟が出入りし荷物などを運ぶ水運の川であった。旧久万川は、かつて太山寺山塊の東山麓を大きく蛇行しながら流れていたと思われる。



第2図 松山平野の地形図



第3図 太山寺の地質図

(2) 歴史的環境

○縄文時代

太山寺経田遺跡の立地する太山寺山塊の北側並びに東側の丘陵上や低湿地から、後晩期の土器が出土している。特に、県内の縄文遺跡として重要な位置を占めている船ヶ谷遺跡(1)・大淵遺跡(2)が太山寺山塊の東側に位置し、旧久万川によって形成された自然堤防上に船ヶ谷遺跡が、河川背後の後背湿地に大淵遺跡が立地している。

船ヶ谷遺跡は晩期後半の遺跡で、河川、杭列、住居址などが検出され、多量の土器や石器、木製品のほかに朱漆塗釧が出土している。この時期に続く大淵遺跡では、丹塗りの彩文壺や靨の残る土器、朱漆塗結菌式竪櫛、石庖丁、石鎌、石斧などが出土しており松山平野内における稲作開始期の遺跡として注目されている。

○弥生時代

弥生時代前期の遺跡には、太山寺経ヶ森から南東麓500mに位置している鶴ヶ峠遺跡(3)から貯蔵穴28基が検出され、前期前半の土器とともに炭化米や緑豆の出土がみられる。また、大淵遺跡より南約2kmにある三光遺跡(4)では、弥生時代前期後半～後期にかけての土器が出土している。

太山寺山塊から堀江地溝帯をはさみ高輪山系の西麓周辺にも、弥生時代の遺跡がみられる。特に、南西麓の座拝坂遺跡(5)では前期末の土器や後期末の竪穴住居址が、姫原遺跡(6)では中期後葉の円形周溝状遺構2基が、谷町遺跡(7)と金比羅山遺跡(8)では後期後半の竪穴住居址が調査されている。また、堀江遺跡(9)からは前期前葉の重弧文小型壺が出土している。

○古墳時代

大淵遺跡3次調査地(10)では、前期初頭の竪穴住居址、土坑、土器溜まりなどが検出されている。また、船ヶ谷遺跡2次調査地(11)では、前期～中期の河川跡が検出され、多量の土師器が出土し、現在のところ、特に太山寺山塊から堀江低地にいたる緩斜面や低地部に居住域があると思われる。

墳墓では、太山寺丘陵上に数多くの古墳が分布し、坂浪、片廻、太山寺、船ヶ谷、北山、東山町などの古墳群が形成されている。これら古墳群の中で、近年では、鶴ヶ峠遺跡・高月山古墳(12)・船ヶ谷向山古墳(13)・船ヶ谷三ツ石古墳(14)が調査されている。

太山寺経田遺跡の周辺には、素鷲神社古墳（別称、経田池古墳）をはじめ数基の古墳が確認されているが、いまだそれら古墳の調査例はない。

太山寺山塊から堀江低地をはさんだ高輪山系の西側丘陵にも、北谷・権現山、潮見、堂ヶ谷、姫原、権現などの古墳群があり、それら古墳群の中でも6世紀末の北谷王神ノ木古墳(15)や金銅装圭頭大刀や挂甲小札などが出土している7世紀前半の塚本古墳(16)をはじめ、影浦谷古墳(17)、金比羅山遺跡、福角古墳(18)などが調査され報告されている。また、谷町の蓮華寺(19)境内には、本堂裏の古墳から出土したものであると思われる舟形石棺の身部が手水鉢の代用として置かれている。阿蘇凝灰岩を削りぬいたもので県内唯一の削りぬき式石棺の例であり、このことは古墳時代に九州との文化交流があったことを証明している。

○古代

『和名抄』によれば、古代伊予国は14郡からなり、そのうち和気、温泉、久米、伊予の4郡と浮穴郡の一部が松山平野にあったとされている。太山寺経田遺跡のある太山寺山塊並びに堀江低地は、この和気郡に属している。郡名の初見は、天平19(747)年の「法隆寺伽藍縁起并流記資材帳」にあり、法隆寺の庄が郡内に二カ所存在したと記されている。和気郡は、明治30(1897)年まで続く郡名である。

また、『日本書紀』によると、景行天皇の皇子十城別王^{とおきわけ}が伊予別君^{わけきみ}の始祖となっている。この十城別王の子孫が和気地区に土着して伊予別公^{わけきみ}と称し、郡の成立時に和気郡にしたと思われる。この伊予別(和気)は、伊予の国造と同様、大和朝廷と比較的早く関わりのあった地域の地方豪族であったために「別」の称号が与えられたと考えられている。なぜ和気郡の豪族がそうした称号を得ることができたかについては、まず、大王家の私的な経済基盤である名代が和気郡に濃密な分布をすること、次に、大和朝廷の外征軍の寄港地である熟田津が同郡にあったと考えられることなどが理由としてあげられている。とりわけ、和気郡は瀬戸内海航路の要衝に位置することが認識されている。

和気郡についての文字資料は、長屋王家、平城京二条大路、長岡京などから出土した木簡の中にみられる。それら木簡から、天皇家の経済的・軍事的基盤となった刑部、日下部、矢田部などの名代や、航海技術に長じた海部などの部民が濃厚に分布していたと思われる。

和気郡では、和銅6(713)年に里を郷と改名し、高尾郷、吉原郷、姫原郷、大内郷の四郷に分かれている。姫原郷は御幸・姫原、大内郷は潮見・平田・堀江・馬木がそれぞれ属していたと推定されているが、太山寺経田遺跡の所在する太山寺については、高尾郷または吉原郷のいずれかに属していたようで定かではない。

和気地区内の古代の遺跡には、堀江低地の東側で、座拝坂遺跡・姫原遺跡・七反地遺跡(20)などから8～10世紀代にかけての須恵器・土師器・黒色土器が出土している。また、久万ノ台遺跡(21)からも8・9世紀の須恵器・土師器の出土があげられる。



- 太山寺経田遺跡 ①船ヶ谷遺跡 ②大洲遺跡 ③鶏ヶ峠遺跡 ④三光遺跡 ⑤座拝坂遺跡 ⑥姫原遺跡 ⑦谷町遺跡 ⑧金比羅山遺跡 ⑨堀江遺跡 ⑩大洲遺跡 3次調査地 ⑪船ヶ谷遺跡 2次調査地 ⑫高月山古墳 ⑬船ヶ谷向山古墳 ⑭船ヶ谷三ツ石古墳 ⑮北谷王神ノ木古墳 ⑯塚本古墳 ⑰影浦谷古墳 ⑱福角古墳 ⑲蓮華寺 ⑳七反地遺跡 ㉑久万ノ台遺跡 ㉒山崎の居館跡 ㉓船ヶ谷遺跡 3次調査地 ㉔福角遺跡

第4図 周辺の遺跡 (S = 1 : 50,000)

いづれにしる、和気郡を含む松山平野の地域が大和政権の軍事・外交上の重要な拠点であったことを示しているものと考えられる。

○中世

平安時代中期以降、松山平野部が誰れの統治下にあったかは、史料がないので不明であるが、風早郡（現、北条市）の河野氏、あるいは伊予郡の高市氏の支配下にあったと思われる。12世紀前半に、河野氏は高縄山城を築き、これを本拠として周辺部に勢力を伸ばし、鎌倉時代に入ってから和気郡・温泉郡・久米郡・浮穴郡・伊予郡など松山平野に勢力を張り、さらに東の越智郡（現、今治市）にまで勢力を伸ばしていたと考えられている。河野氏は、建武年間（1334～1338）に松山平野の東北部の要衝道後に湯築城を築き、ここを本拠と定めている。和気郡は、河野氏にとって重要な港湾として位置づけられ、また、度々の合戦の場ともなっている。

豊臣秀吉の四国征伐によって河野家は滅亡し、安国寺恵瓊が和気郡他で二万石の領主となっている。

現在、和気郡内にみられる館跡としては、堀江町に東西約47m、南北41.5mを測り、周囲の道路からの比高4～5mを有する方形の台状地形を呈している山崎の居館跡⁽²⁾がある。集落遺跡には、船ヶ谷遺跡2次調査地の東約300m、久万川の右岸に位置する船ヶ谷遺跡3次調査地⁽³⁾から、14世紀前半の掘立柱建物跡8棟、柵列、井戸、区画溝などが検出され、土師器、陶磁器などが出土している。また、前述の七反地遺跡からも中世後半の遺物・遺構が多数発見されている。この七反地遺跡は、河野家家臣の大内氏が居を構えていたと思われる大内郷の中に位置している。他に、前述の座拝坂遺跡・金比羅山遺跡からは、和泉型瓦器碗の出土がみられる。また、堀江町の福角遺跡⁽⁴⁾でも掘立柱建物跡などが調査され、中国産と思われる天目碗や備前焼摺鉢などが出土している。

[註]

- (1) 『松山市・船ヶ谷遺跡 愛媛県青果連関連埋蔵文化財調査報告書』 愛媛県教育委員会 1985
- (2) 「大洲遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ 昭和62～63年度』 松山市教育委員会 1989
- (3) 「鶴ヶ峠遺跡」『松山市史料集 第2巻 考古編Ⅱ』 松山市史料集編集委員会 1987
- (4) 『松山市史料集 第1巻 考古編』 松山市史料集編集委員会 1980
- (5) 「座拝坂遺跡」『和気・堀江の遺跡』 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993
- (6) 「姫原遺跡」『和気・堀江の遺跡Ⅱ』 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998
- (7) 「谷町遺跡」『和気・堀江の遺跡Ⅱ』 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998
- (8) 「金比羅山遺跡」『和気・堀江の遺跡』 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993
- (9) 『松山市史料集 第1巻 考古編』 松山市史料集編集委員会 1980
- (10) 「大洲遺跡3次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報11 平成10年度』 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1999
- (11) 『船ヶ谷遺跡一2次調査一』 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1999
- (12) 『高月山古墳群調査報告書』 松山市教育委員会 1988
- (13) 「船ヶ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ 昭和62～63年度』 松山市教育委員会 1989
- (14) 「船ヶ谷三ツ石古墳」『和気・堀江の遺跡』 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993
- (15) 「北谷王神ノ木古墳」『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- (16) 「塚本古墳」『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- (17) 『影浦谷古墳』 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993

はじめに

- (18) 「福角古墳」『一般国道196号松山・北条バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—福角古墳・福角遺跡—』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1994
- (19) 「七反地遺跡」『平成9年度発掘報告会資料』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998
- (20) 「久万ノ台遺跡」『山越・久万ノ台の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993
- (21) 「山崎の居館跡」『松山市史料集 第2巻 考古編Ⅱ』松山市史料集編集委員会 1987
- (22) 『船ヶ谷遺跡—3次調査地—』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1999
- (23) 「福角遺跡」『一般国道196号松山・北条バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—福角古墳・福角遺跡—』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1994

[参考文献]

- ・正岡睦夫・十亀幸雄 『日本の古代遺跡22 愛媛』(株)保育社 1985
- ・川岡勉 『河野氏の歴史と道後湯築城』青葉図書 1993
- ・田中歳雄 『愛媛県の歴史』山川出版社 1973
- ・『創立85周年記念誌 和気のおもかげ』松山市立和気小学校PTA 1994
- ・『松山の文化財』松山市教育委員会 1996
- ・『松山の歴史』松山市史編集委員会 1989
- ・『松山市史 第1巻』松山市史編集委員会 1992
- ・『愛媛県内古墳—分布調査報告書—』愛媛県教育委員会 1991
- ・『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』愛媛県史編さん委員会 1982
- ・『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会 1986

第Ⅱ章

太山寺経田遺跡

— 1 次 調 査 —

第Ⅱ章 太山寺経田遺跡 1次調査

1. 調査の経過

(1) 調査の経緯

1993年（平成4）12月4日、松山市農林水産部農林土木課より松山市太山寺町1459外における団体営農道整備にあたり当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、市教委）に提出された。

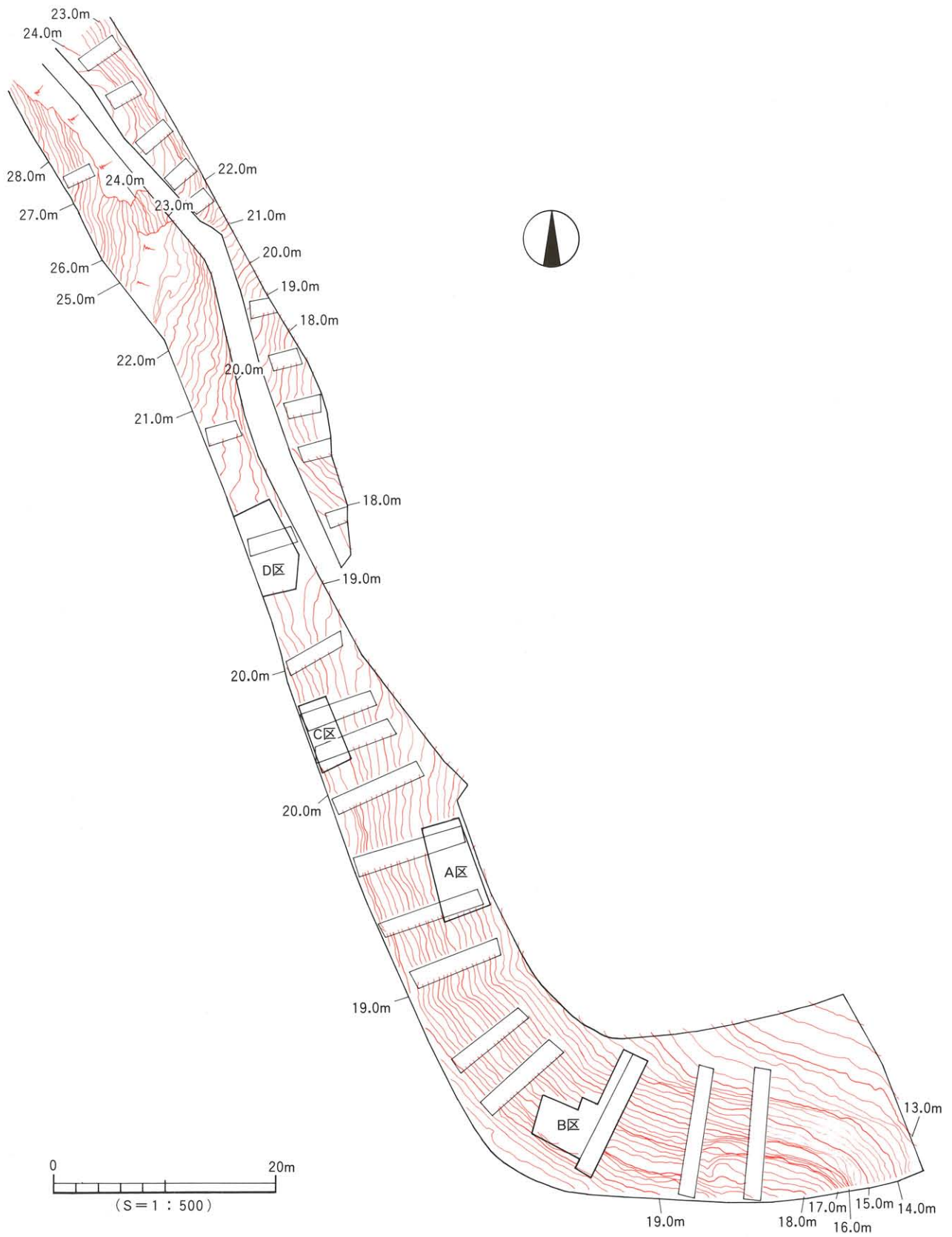
確認願いが提出された松山市太山寺町1459外は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No.10片廻遺跡（弥生時代） 太山寺古墳群 片廻古墳群 素鷲神社』内にあり、太山寺山塊上には太山寺古墳群、勝岡町坂浪古墳群、片廻古墳群、高月山古墳群、船ヶ谷向山古墳群、北山古墳群等の群集墳が分布し、周辺地域でも多くの発掘調査が実施されている。さらに本調査地が所在する丘陵尾根部付近では円墳6基の存在が踏査によって確認されており、また調査地南部に隣接する素鷲神社裏には大型の石材を使用した横穴石室1基が露呈している。昭和47年、この神社北側を整地中に弥生土器片と土坑墓3基が松山市教育委員会によって確認されており、周知の遺跡地帯として知られている地域である。このような状況からも、市教委と（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は当該地における埋蔵文化財の有無と、さらに遺跡の範囲や性格を確認するため、1994（平成5）年7月26日から同年9月30日の期間に試掘調査を実施した。

試掘調査は、調査地が丘陵谷部南斜面の果樹園内に位置することから、まず調査対象区域内の柑橘類等の樹木の伐採、撤去と下草刈りを行った。その後、申請地内の地形測量（20cmコンター測量）を実施し、調査対象区内の北西部から南東部にかけて、トレンチ名をT1～T25として「I」字状のトレンチを計25本の設定を行った。試掘調査作業着手前に対象域内を踏査し表面採集を行ったところ、土師器片、須恵器片、陶磁器片等20数点の遺物を調査対象区南部付近にて多く採取した。よって比較的調査区南部域を密にトレンチの設定をおこなった。

試掘調査では主にT13、T14、T16、T17、T21、T24の各試掘トレンチにおいて遺構・遺物を確認した。T13、T14では溝1条を検出した。T16、T17では、石列遺構1条、柱穴2基、溝2条を確認し、その他に土師器片、瓦器小片が出土した。T21では、石列遺構1条、竪穴住居址の一部を検出し、そのほか土師器、陶磁器片等が出土した。T24では、石列を配した溝状遺構を検出した。これら住居址の一部、溝、石列遺構および遺物等の出土から遺跡の存在が予想された。

これらの結果を受け、当該地における遺跡の取り扱いについて市教委と申請者の協議を行い。協議の結果、開発工事によって失われる遺跡について記録保存のために埋文センターが主体となり、平成5年10月4日から同年11月9日までの間本格調査を実施した。なお、屋内調査は平成5年10月4日～平成6年3月31日までおこなった。

太山寺経田遺跡1次調査



第1図 調査地位置図

(2) 調査組織

調査地 松山市太山寺町1459外

遺跡名 太山寺経田遺跡1次調査地

調査期間 1994(平成5)年10月4日～1994(平成5)年11月9日

調査面積 800m²

調査担当 栗田 正芳・小笠原 善治

調査作業員 田丸 竜馬、鎌田 譲二、大塚 隆重、金沢 進、細田 尚秀、
八木 欣道、藤原 誠吾、武知 久明、金本 貴広、両門 英雄、
長崎 尋教、西原 敏幸、田中 宏和、河口 保則、泉保 徹、
川井 正、松本 正義、末光 博武、岡田 久子、岡田 弥生、
白玉 典子、藤田 潤子、常廣 一恵、白形 安子、乗松 和枝、
遠藤 久仁子、谷口 よし子、横田 三都子 ほか

2. 層位

(1) 試掘調査

試掘トレンチを設定した対象地域内は、東部の丘陵谷部斜面と西部の丘陵中腹斜面に大きく分かれる。そのため各トレンチの層序は、立地の違いから上層の一部を除き層序は全く同様ではないが、基本層序は、第Ⅰ層灰黄褐色土、第Ⅱ層灰黄褐色土、第Ⅲ層橙色土、第Ⅳ層にぶい黄褐色土、第Ⅴ層明黄褐色土砂質土(地山)である。

- 第Ⅰ層 対象地全域に分布する現代の耕作土である。厚さ28cm前後を測る。部分的に消失する。
- 第Ⅱ層 旧耕作地の整地行為に伴う造成土で、一部消失するがほぼ対象地全域厚く分布する。層厚は2～58cm前後である。
- 第Ⅲ層 対象地に断続的に分布し、層厚は6～40cmで比較的厚く堆積する。遺物の出土はない。
- 第Ⅳ層 対象地に断続的に分布し、また層厚も増減が著しく、3～80cmである。遺構はこの層の前後で検出される。
- 第Ⅴ層 地山層である。上位では浅黄色の荒い砂質を呈し、下位ではにぶい黄橙色に黒褐色が粒状に混入する砂質土で構成され、これらは上位から下位にかけて硬質である。

以下、調査地南部から主要試掘トレンチT21、T17、T16、T14、T13、T25について層序の概要を述べる。

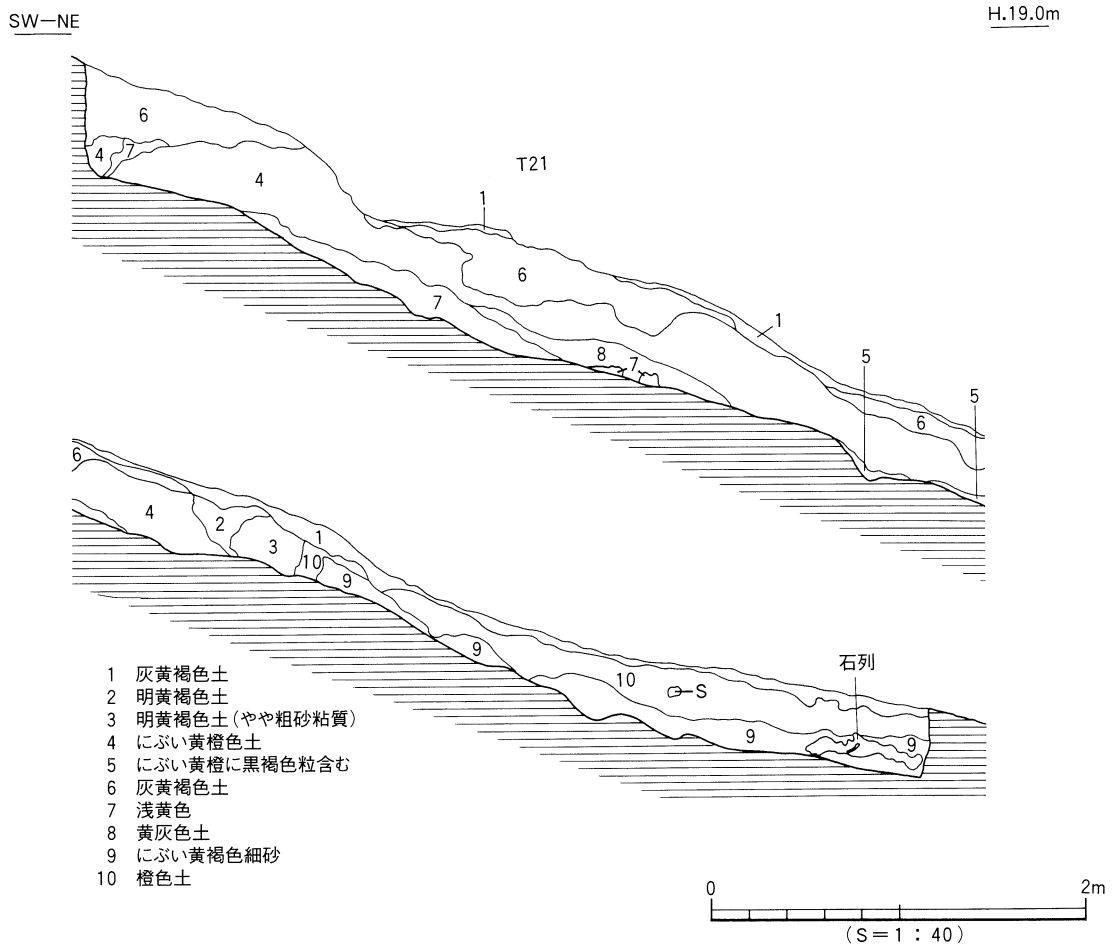
T21トレンチは、対象地南部に位置するトレンチである。層序は5層に大別され、基本層序にほぼ準じる。遺物包含層(黄灰色土)は第Ⅳ層にぶい黄褐色土の下層から検出された。また、トレンチ内下方断面では石列を含む遺物包含層(にぶい黄褐色細砂)がみられた。トレンチ内上方の包含層より土師器の壺形土器、また下方に位置し、残存する石列の下層からは陶磁器片が出土している。

T16、T17トレンチは、対象地中央部やや南方に位置するトレンチで、層序は5層に大別される。第1層灰黄褐色土、第2層灰黄褐色土、第3層黄橙色、第4層にぶい黄橙色、第5層にぶい黄橙色砂質土に黒褐色土が粒状に混入(地山)する。T16では、第Ⅳ層にぶい黄橙色土を切る形で溝を3条検

出した。また遺物は土師器の丸底壺が出土した。T17では、ほぼ同様な層序ではあるが第Ⅲ層がトレンチ内の低位置から消失し、高位置に見られる。T17では、いずれも第Ⅳ層にぶい黄橙色土を切る状況で、石列によって構成された東西方向に走る溝1条と南北に走る溝を1条検出した。両トレンチ内下方では大きく段状にカットされた落ち込みが見られる。これら両トレンチの層序は基本層序にほぼ準じている。

T13、T14トレンチは対象地中央部に位置するトレンチで層序は4層に大別される。T13における層序は、第1層灰黄褐色土、第2層灰黄褐色土、第3層橙色土、第4層明黄褐色土砂質土（地山）である。T14トレンチではほぼ同様な様相を呈し、第3層のみ橙色土に変わる。3層についてはT13のぶい黄褐色砂質土からT14の橙色土へと層序が変化することは、基本層序のⅢ層がこの付近では消失し第Ⅳ層に変化していることが理解できる。T13ではこの3層下より地山面を掘り込んだ浅い溝3条を検出し、T14においても集石と溝2条を検出した。

T25トレンチは、対象地内中央部の北方に位置するトレンチで、層序は第1層灰黄褐色土第2層にぶい黄橙色（第Ⅳ層）、第3層にぶい黄褐色砂質土で第3層以下は岩盤の基盤層である。T25では、基本層序の第Ⅱ層及び第Ⅲ層は見られず、第Ⅳ層、第Ⅴ層の間に第3層のぶい黄褐色砂質土が入り込んでいる。これは北方に隣接するT24でも同様な傾向を示すことから、この付近は地形の変化にともなう層序の変化であると考えられる。

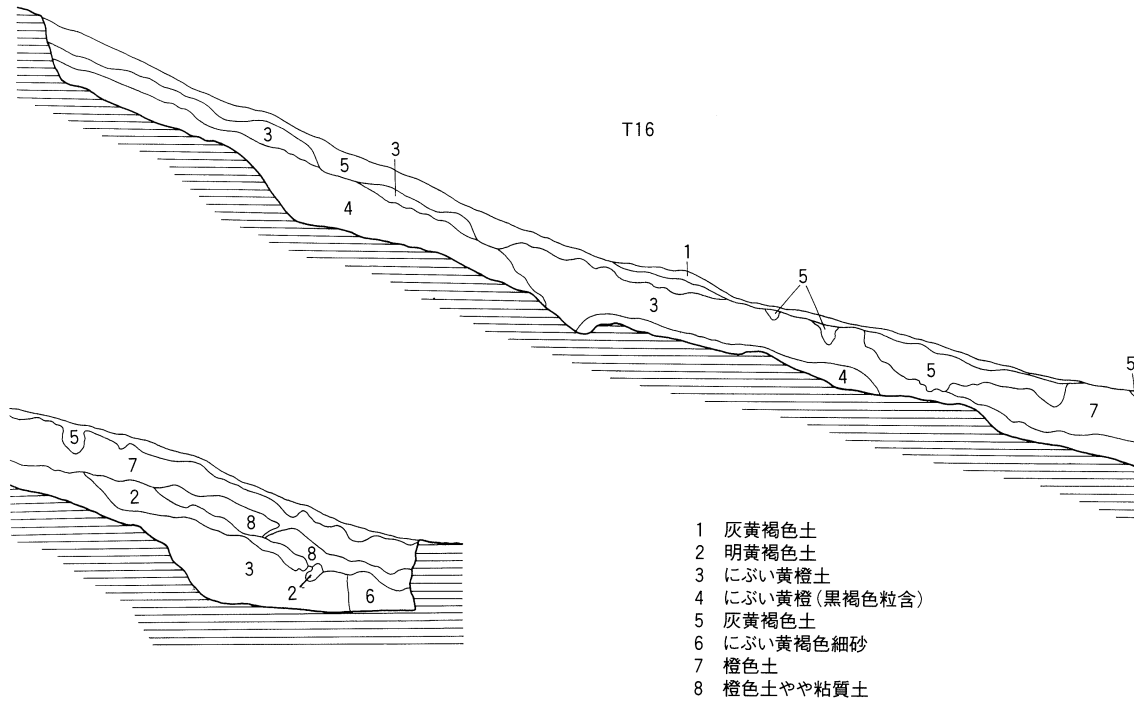


第2図 試掘トレンチ (T21) 土層図

層 位

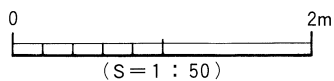
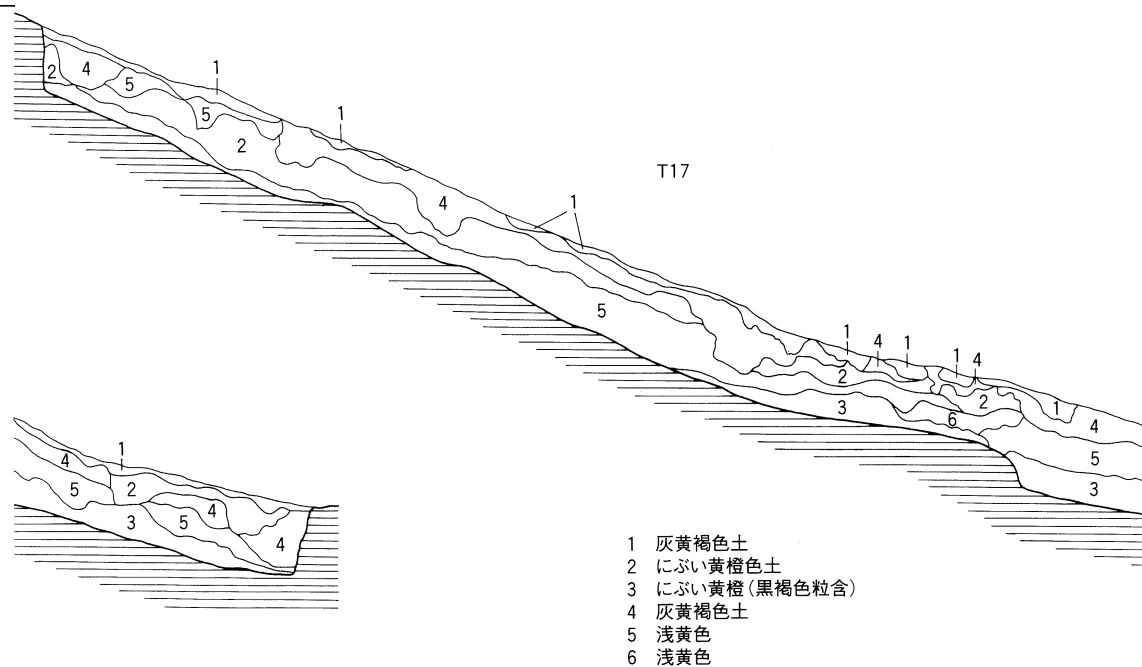
W-E

H.19.0m



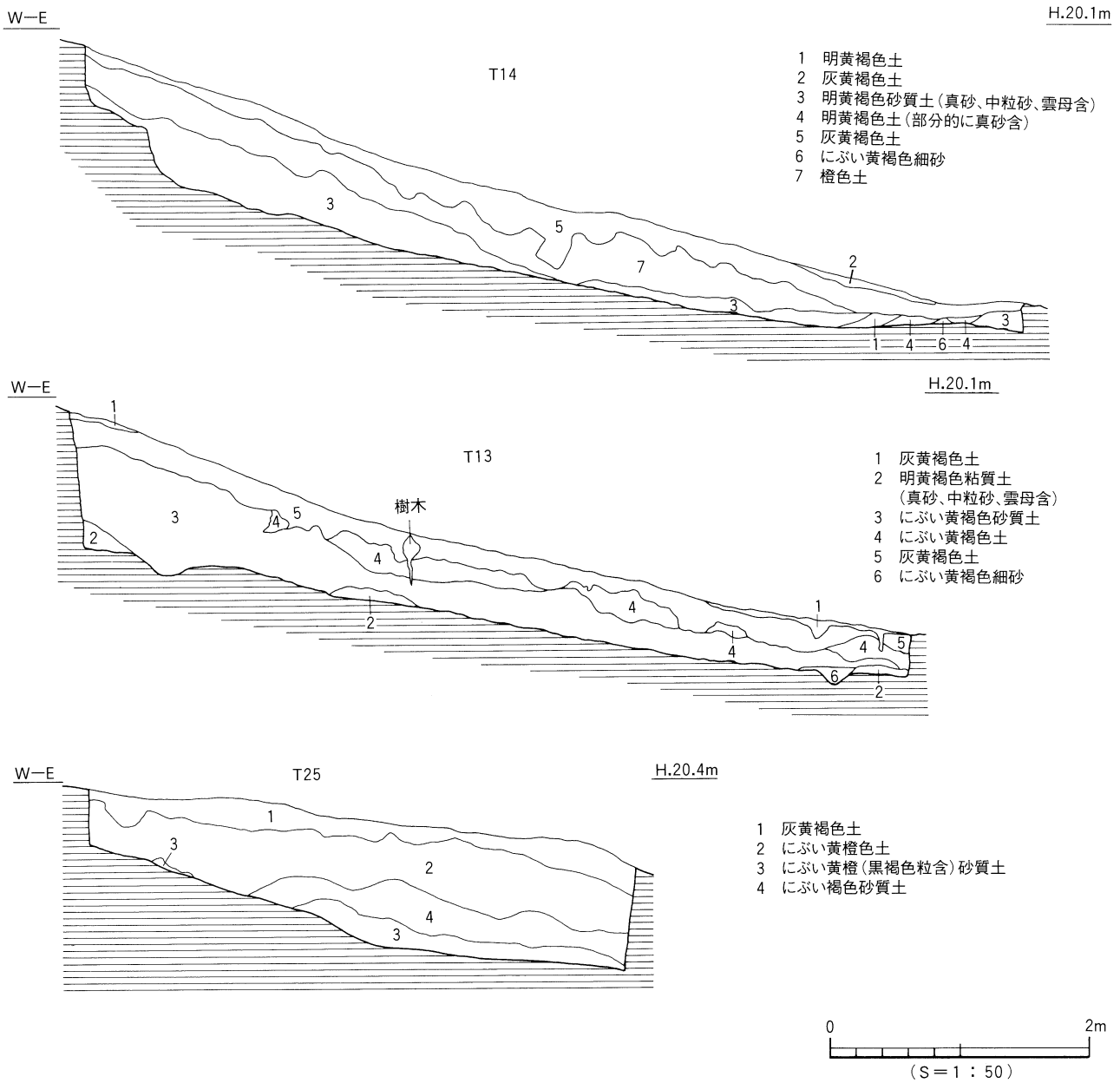
W-E

H.19.0m



第3図 試掘トレンチ (T16・17) 土層図

太山寺経田遺跡1次調査



第4図 試掘トレンチ(T14・13・25)土層図

対象地域内では、少なくとも3～4本の溝と数条の石列が広範囲に存在することが判明した。また、試掘時における各トレンチの断面観察から一部基盤層が階段状に段カットされており、基盤層までの耕作に伴う土地改変が行われたと考えられる。そのほか、古墳時代の遺物も出土していることから、遺跡の存在が予想された。

(2) 本格調査

試掘調査の結果をもとに設定された調査区はT16・T17付近をA区、T21付近をB区、T13・T14付近をC区、T25付近をD区とした。

A区

A区の基本層序は、第Ⅰ層灰黄褐色土、第Ⅱ層灰黄褐色土、第Ⅲ層にぶい黄褐色土、第Ⅳ層浅黄色土である。

第Ⅰ層 調査区全域に分布する。現代の耕作土である。層厚は2～14cmを測る。

第Ⅱ層 旧耕作地整地に伴う造成土である。ほぼ調査区全域にわたって分布する。層厚は2～40cm前後を測る。

第Ⅲ層 調査区上方に分布する。層厚は2～50cmで比較的厚く堆積する。遺物の出土はない。

第Ⅳ層 地山層である。上位では浅黄色の荒い砂質を呈し、下位ではにぶい黄橙色に黒褐色が粒状に混入する砂質土で構成され、これらは上位から下位にかけて硬質である。

B区

B区の基本層序は、第Ⅰ層灰黄褐色土、第Ⅱ層灰黄褐色土、第Ⅲ層橙色土～にぶい黄橙色土、第Ⅳ層浅黄色土砂質土（地山）である。

第Ⅰ層 調査区全域に分布する。現代の耕作土である。層厚は5～15cmを測る。

第Ⅱ層 ほぼ調査区全域に分布する。旧耕作地整地に伴う造成土である。層厚は10～53cmを測る。

第Ⅲ層 調査区上方ではにぶい黄橙色が、下方では橙色土が堆積している、層厚は10～62cm。遺物は土師器の小片が出土している。

第Ⅳ層 荒い砂質を呈した地山である。する。部分的には岩盤層が見られる。

C区

C区の基本層序は、第Ⅰ層灰褐色土、第Ⅱ層にぶい黄褐色砂質土、第Ⅲ層黄橙色砂質土である。

第Ⅰ層 調査区全域に分布する旧耕作土である。当調査区では、A区・B区に見られた現代の耕作土に相当する層はわずかに分布するのみで、旧耕作土が第Ⅰ層を形成する。層厚4～18cm前後を測る。

第Ⅱ層 調査区全域に厚く堆積する。層厚は6～44cm前後。遺物の出土はない。

第Ⅲ層 地山層である。黄橙色砂質土で2～5cm大の砂粒を多く含む。部分的には砂粒岩盤層が見られる。遺構は本層上面で検出した。

D区

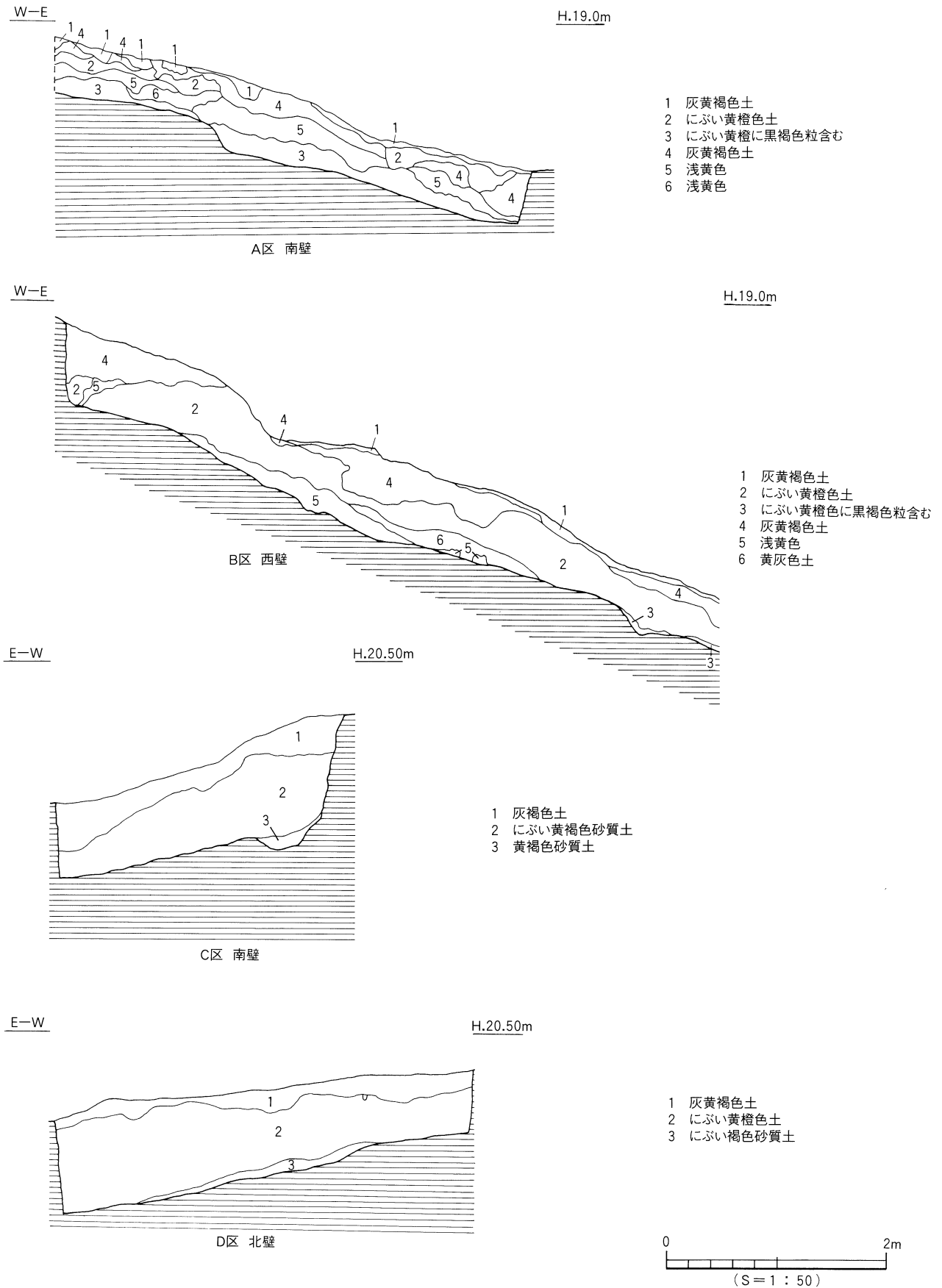
D区の基本層序は、第Ⅰ層灰黄褐色土、第Ⅱ層にぶい黄橙色土、第Ⅲ層灰白色土（赤褐色粒混）

第Ⅰ層 調査区全域に分布する。現代の耕作土である。層厚4～28cm。

第Ⅱ層 調査区全域に厚く堆積し、本層位中より銭貨が出土している。遺構は本層下より検出している。層厚は13～80cm。

第Ⅲ層 灰白色土に赤褐色の粒を含むが、地山に相当する層である。遺構は本層上面で検出した。

太山寺経田遺跡 1次調査



第5図 各区土層図

3. 遺構と遺物

(1) A区 (第6～9図、図版2・3)

試掘調査時においてT16およびT17トレンチ東部の遺構密度が高いことが判明した。よって、両トレンチを拡張しA区とした。

A区で検出された遺構は、溝2条、柱穴3基、石列1条である。調査区は標高15.2m～19.0mに位置し、調査面積は50㎡である。調査区内は西から東に急傾斜しており、東部では段状の落ち込み2カ所を確認した。調査区南部の石列は、試掘調査時の試掘トレンチT17にて一部を検出しており、本調査においてはほぼ全体を検出した。

溝

SD1 (第7・8図、図版2)

調査区東部を南東～北西に走る溝で、北西端は調査区外に延び、南東端は調査区南部でとぎれる。規模は幅約0.26m、検出長5m、断面形は皿状で、深さは検出面より約80cmを測る。埋土は褐色土を呈する。遺構は、調査区内北東部に見られる段状落ち込み内の埋土を除去後に検出した。土層の観察からも後世の削平により、遺構上部は失われていると考えられる。また、遺物は遺構内床面直上から北西部と中央部にそれぞれ土師器の壺形土器が1点ずつ出土している。

出土遺物 (第10図、図版8)

1は小形の壺形土器である。口縁部は欠損している。胎土は精良で焼成も良好で、器壁は厚い。器面および断面は磨滅している。調整は不明。

2は壺形土器である。口縁部は外傾して開き、端部にて段をなし、端部は丸くおさめる。体部は、胴部が張るやや扁平な球形で器壁は薄い。底部は平底。内外面調整は磨滅のため不明であるが、外面底部付近に一部煤の付着が見られる。遺構の時期は出土遺物より古墳時代初頭と考えられる。

SD2 (第7・8図、図版2)

調査区東端部を南東～北西に走る溝で、北西端は調査区北東壁外に延びる南東端はSD1よりやや南方でとぎれる。また、SP1およびSP2により遺構の一部が切られている。本調査区東壁は、調査対象区域の境界部に近接することから、SD2延長部確認のための拡張は行わなかったため全容は不明である。遺構の規模は幅65cm以上、検出長約5.1m、断面形は皿状を呈し、深さは検出面より32cm前後を測る。遺構埋土は褐色土を呈する。SD1と同様に、段状落ち込み内の埋土を除去後に検出し、後世の削平により遺構上部は失われていると考えられる。遺構内からは土師器の杯と和泉型瓦器碗の小破片が出土している。瓦器碗は小片のため掲載していない。

出土遺物 (第10図、図版2)

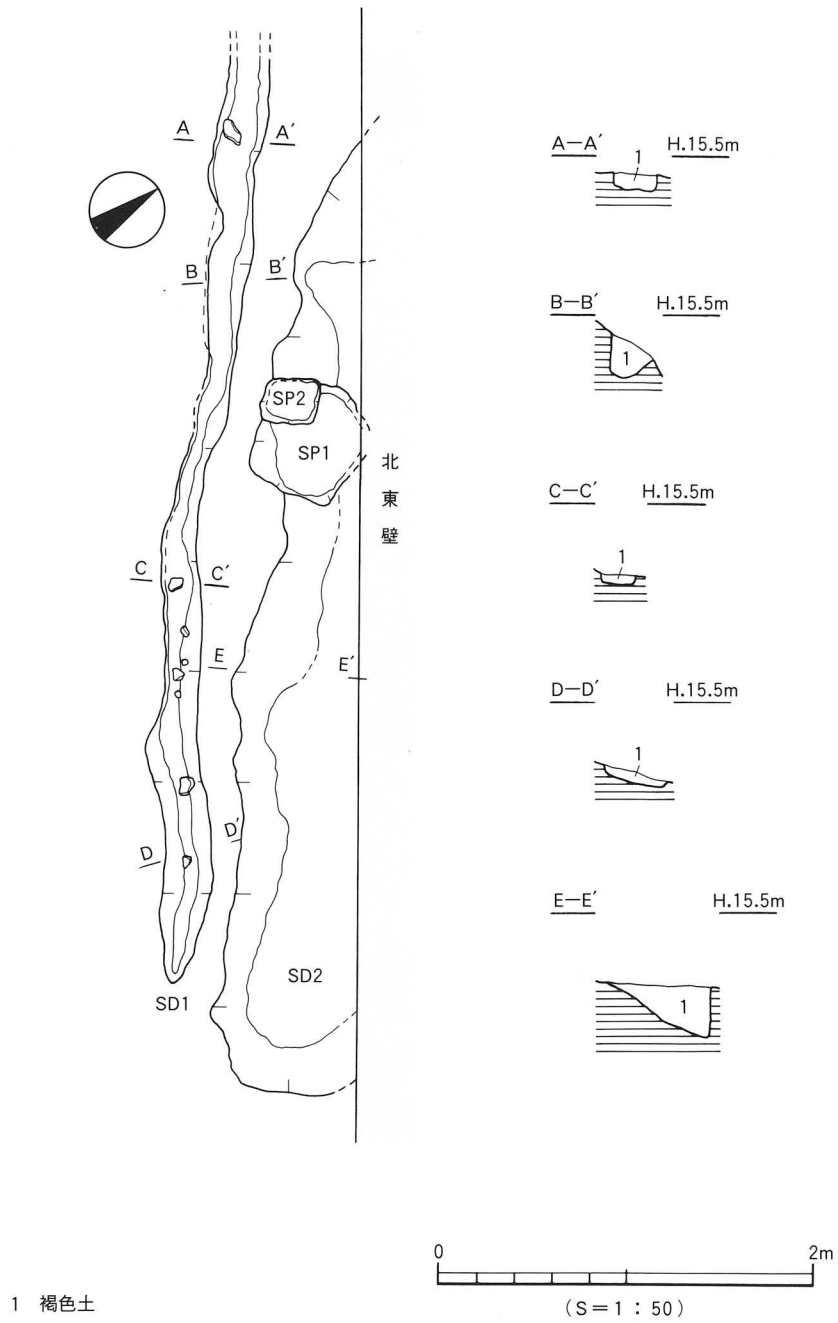
3は底部に回転糸切り痕を残す土師器の杯である。内外面はともに磨滅しており調整は不明。内面底部中央にやや盛り上がりを持つ。遺構の時期は出土遺物より中世と考えられる。

柱穴

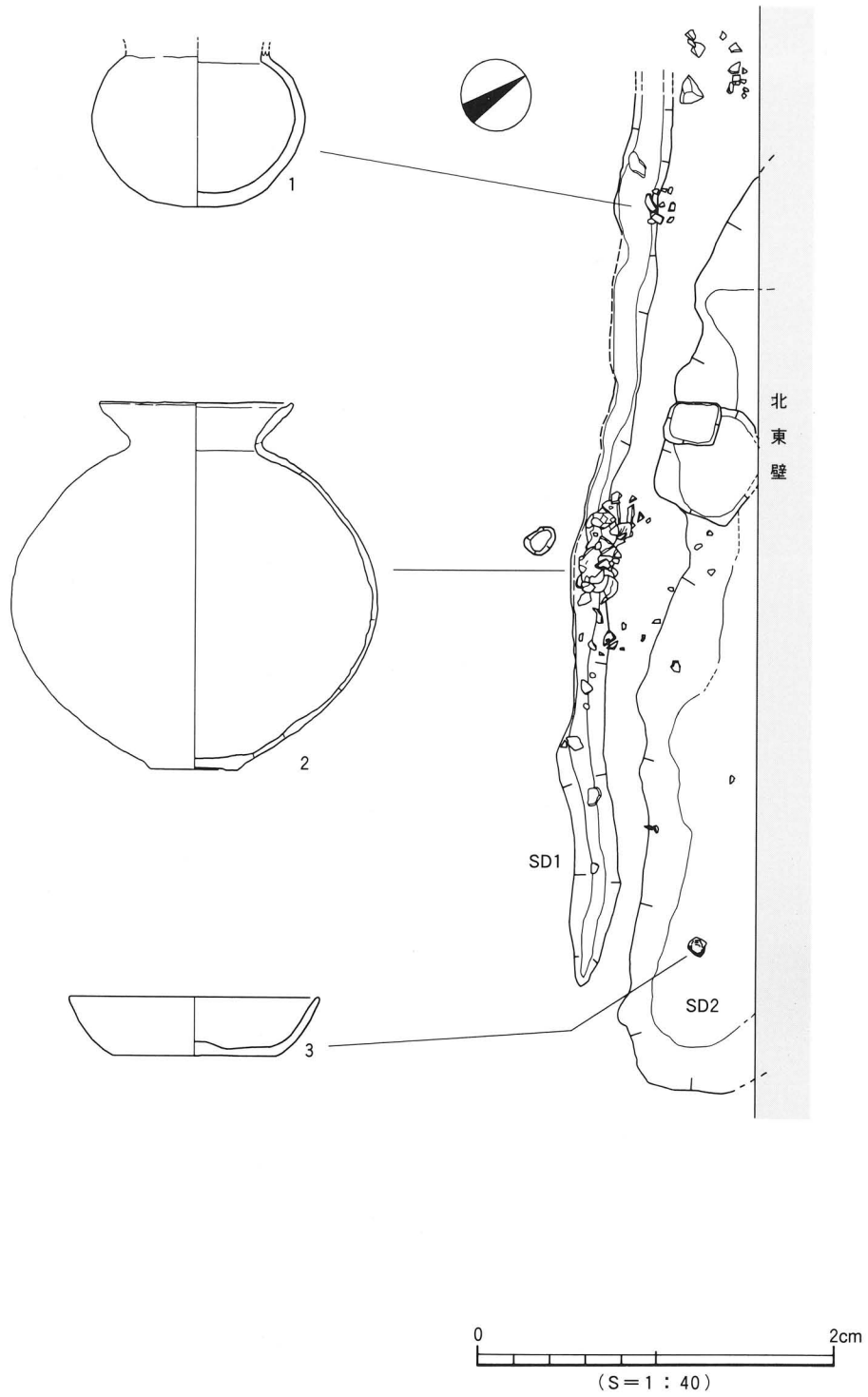
SP1・SP2の平面形はほぼ方形を呈するが、SP3・SP4は楕円形である。各柱穴の規模は、SP1は直径60cm内外、検出面よりの深さ11cmを測る。埋土は灰褐色土である。SP2は直径30cm内外、検出面よりの深さ4cmを測る。埋土はにぶい黄橙色粘質土である。SP3は直径13～18cm、検出



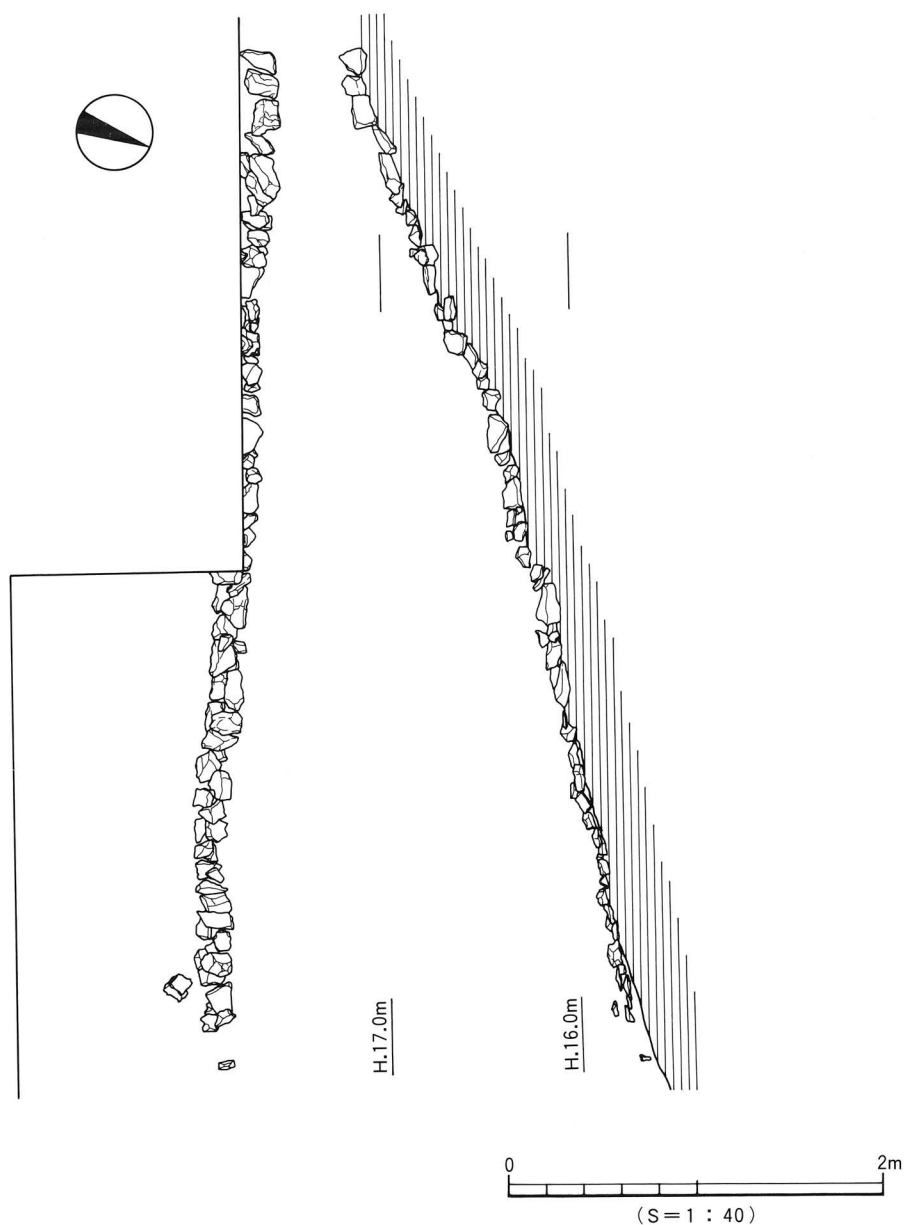
第6図 A区遺構配置図



第7図 SD1・SD2測量図



第8図 SD1・SD2遺物出土状況図



第9図 石列測量図

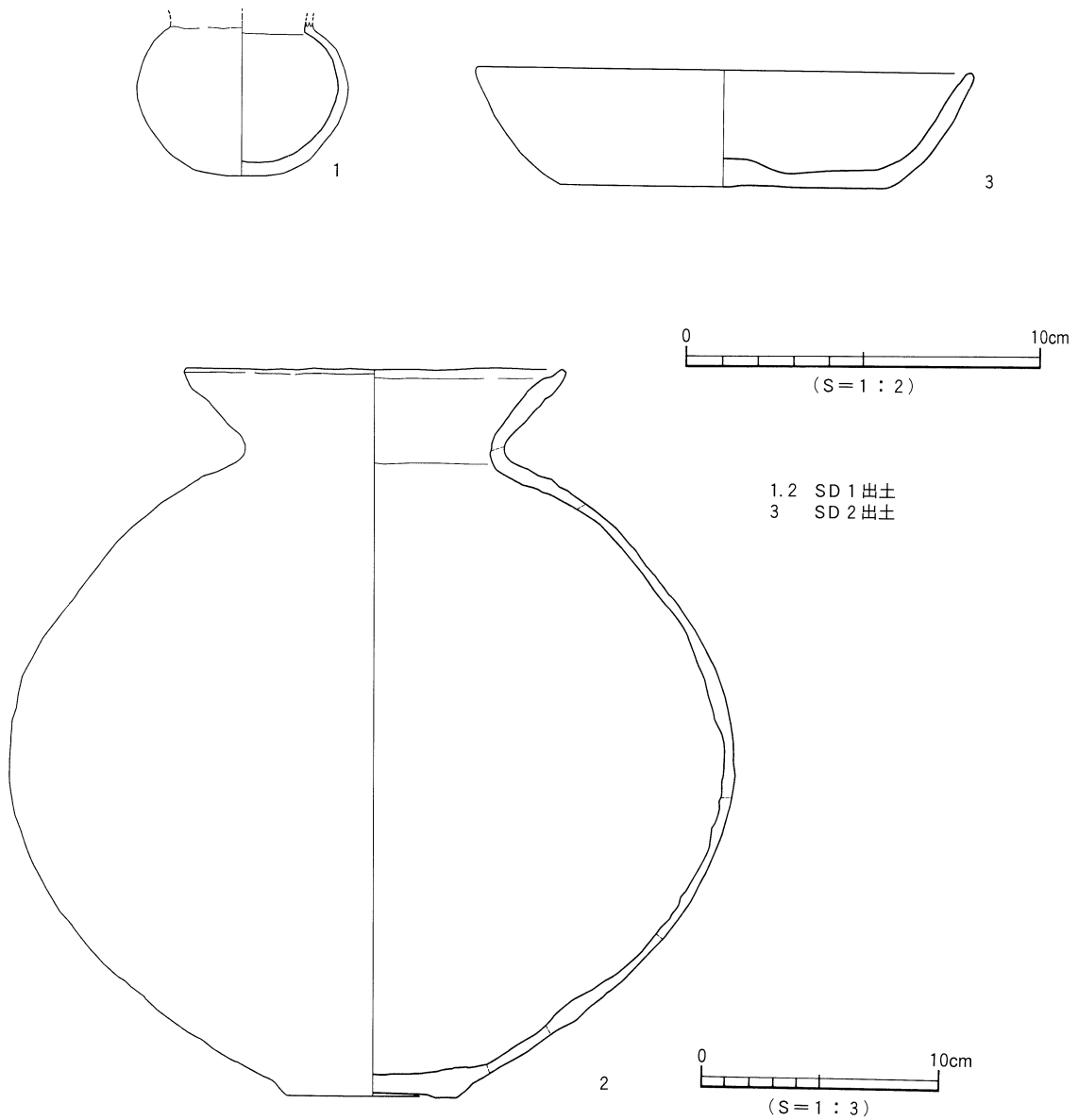
面よりの深さ3cm測る。埋土は灰褐色土である。SP4は直径30~35cm、検出面よりの深さは4cmを測る。埋土は灰褐色土である。遺構の切り合い関係はSP1がSP2に切られていることを確認した。これら柱穴により構成される建物は想定できなかった。また、遺構から遺物の出土もなく時期の特定は出来ないが、SP1・SP3・SP4の埋土からもほぼ同様な時期と考えられる。いずれにしてもこれらは、SD1埋没以降の比較的新しい遺構である。

石列（第9図、図版2）

調査区南部の斜面上下に設置される石列で、規模は検出長5.2m、幅20cm前後を測る。石列の方向は調査区内丘陵斜面から谷部に沿って東西方向に設置される。石列の多くは横長（長さ15cm~20cm、

幅5cm～15cm程度)の角礫と拳大の小礫で構成され、横長角礫のほとんどが南北方向に長軸が向き、小口をほぼ揃えて配置される。それ以外の横長角礫は、側面を東西方向にあわせ、石列の軸方向に揃える。これら角礫は、礫面の一部を瓦屋根状に重ねられる。石列の上方部は、試掘調査時においても試掘トレンチ内斜面上方の対象地境界付近までは延びず、トレンチ内中央付近で途切れる事を確認している。これらは、近・現代の耕作時に除去されたものと考えられる。また、石列下方部においても同様に石列は消失するが、壁面観察よりこれらも近・現代の耕作時に除去されたものと考えられる。

時期：この遺構から遺物の出土はみられないが、他区で検出された石列を参考として遺構の時期は江戸期以降と考えられる。



第10図 出土遺物実測図

(2) B区 (第11図、図版3～5)

試掘調査時においてT21トレンチ上方部から土師器の壺形土器および下方部に石列が検出されており、石列下部からは遺物の出土を見た。よって、遺構の広がりが予想されるとの判断がなされ、北西方向に向け調査範囲を拡張しB区とした。

B区で検出された遺構は、竪穴式住居址1棟、溝2条、石列1条である。調査区は標高14m～18mに位置し、南西から北東に急傾斜している。調査面積は44m²である。

竪穴式住居址**S B 1** (第13図、図版5)

調査区西部上方に位置する。住居址は、丘陵斜面の基盤層を約36cm前後まで垂直に掘り込み床面を形成する。床面は、比較的平坦ではあるが、西部から東部にかけての比高差は約13cmを測り、中央部から東部に向かい段状を呈する。遺構の平面形は方形を呈し、規模は東西3.2m、南北3.9m以上、検出面よりの壁高は検出面より20～40cmを測り、埋土は褐灰色土である。住居址の床面を精査したが、支柱穴に該当する柱穴および、周溝の検出には至らなかった。また、住居址の北部から東部にかけては後世の削平によってS D 2の北部とともに消失している。遺構は、まず溝S D 1によって切られ、次にS D 2によって切られる。

住居址内からは、拳大から人頭大の角礫が遺物とともにまとまって出土している。遺物は住居址床面から土師器の壺形土器、甕形土器、高坏形土器等が出土している。これらは比較的住居址内の南東部辺床面上に集中(第14図)する傾向がある。ただ高坏10は、それらとはやや離れた北西部で出土している。また、遺物のいくつかは角礫直下より出土している。とくに、甕4は幅約18cm、長さ約25cm程度の角礫に押しつぶされたように検出されている。さらに、これら礫および遺物の集中する一帯の床面の精査に努めたが、竈や炭化物、焼土の厨房施設等に関連する遺構や痕跡は確認できなかった。

出土遺物 (第16図、図版8)

甕形土器、壺形土器、高坏が出土している。4、5、6、7は甕形土器である。

4は口縁部がやや外反気味に立ち上がり、内外面ともにケズリを施す。

5は外傾して外上方に開く口縁部を持ち、端部は尖り気味に先細る。器壁は比較的薄く、体部は球形を呈し、調整は内外面ともに磨滅により不明。底部は欠損している。

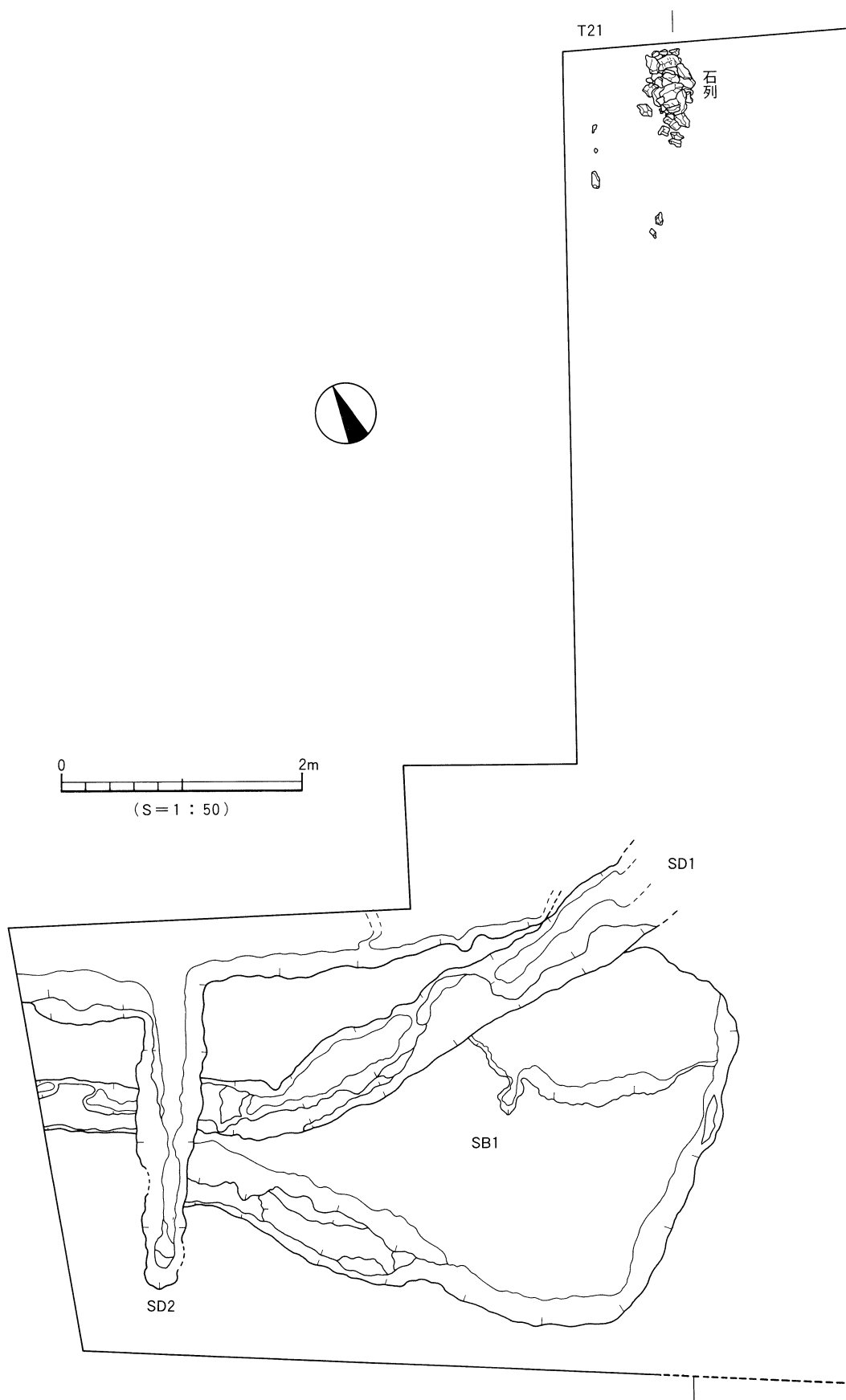
6は外傾したのち立ち上がる口縁部を持ち、端部は面をなす。器壁は比較的厚く、調整は内外ともに磨滅により不明である。

7はややいびつな球形の胴部を持ち、口縁部は外反し端部は丸くおさめる。内外面ともに磨滅により調整は不明瞭であるが、外面に一部縦方向のケズリ痕が見られる。内面には、一部粘土紐の接合痕が見られる。

8は小型の丸底壺である。胴部はやや肩の張る球形を呈し、口縁部はやや内湾して、やや外反気味に直立する。口縁部外面には、横方向のハケ目を施し頸部以下から底部にかけては、多方向からのハケ目調整が施される。内面は口縁部にハケ目、体部はケズリを施す。

9は高坏形土器の脚柱部である。磨滅が激しく調整は不明。

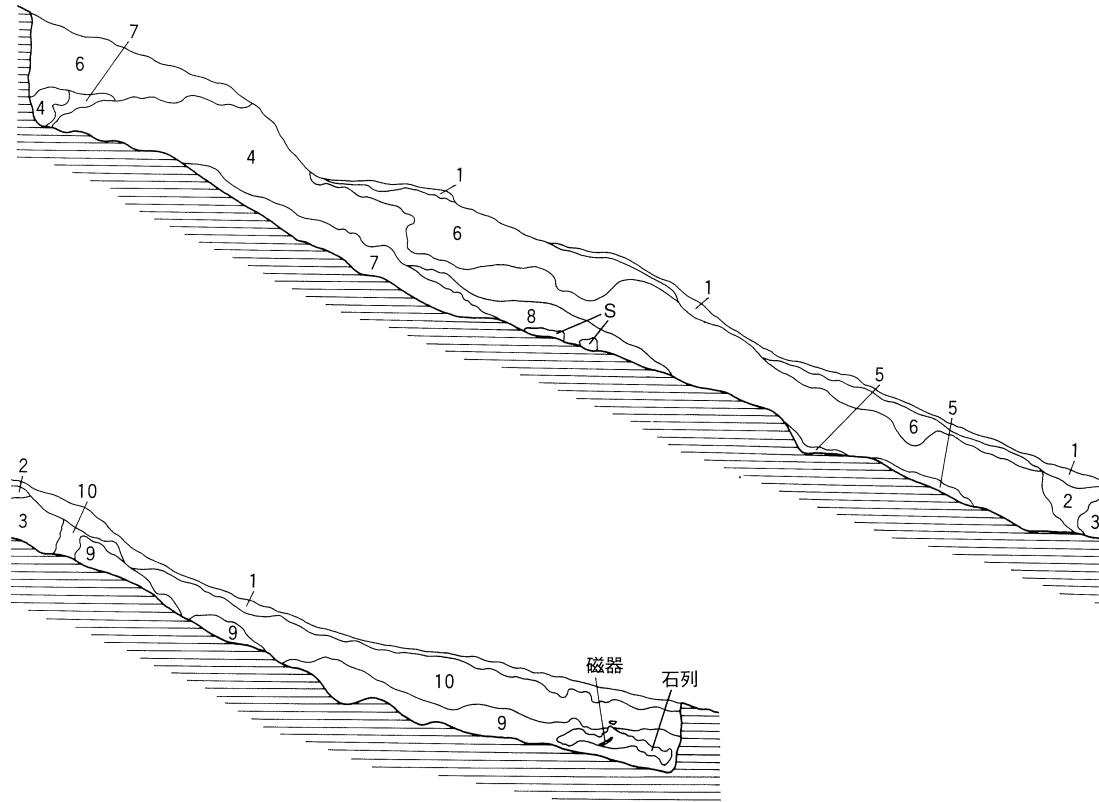
10の坏部は、口縁部が欠損しているが大きく開き、外面に段を持つ。脚注部は、裾部に向かってラッパ状に緩やかに開く。坏部と脚部の接合方法は、円孔の穿たれた坏部から円柱状の脚部に粘土塊を挿入する方法を採る。調整は磨滅により不明である。



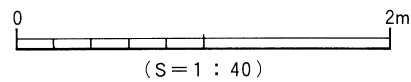
第11図 B区遺構配置図

SW—NE

H.19.0m



- 1 灰黄褐色土
- 2 明黄褐色土
- 3 明黄褐色土(やや粗砂粘質)
- 4 にぶい黄橙色土
- 5 にぶい黄橙に黒褐色粒含む
- 6 灰黄褐色土
- 7 浅黄色
- 8 黄灰色土
- 9 にぶい黄褐色細砂
- 10 橙色土



第12図 東南壁土層図

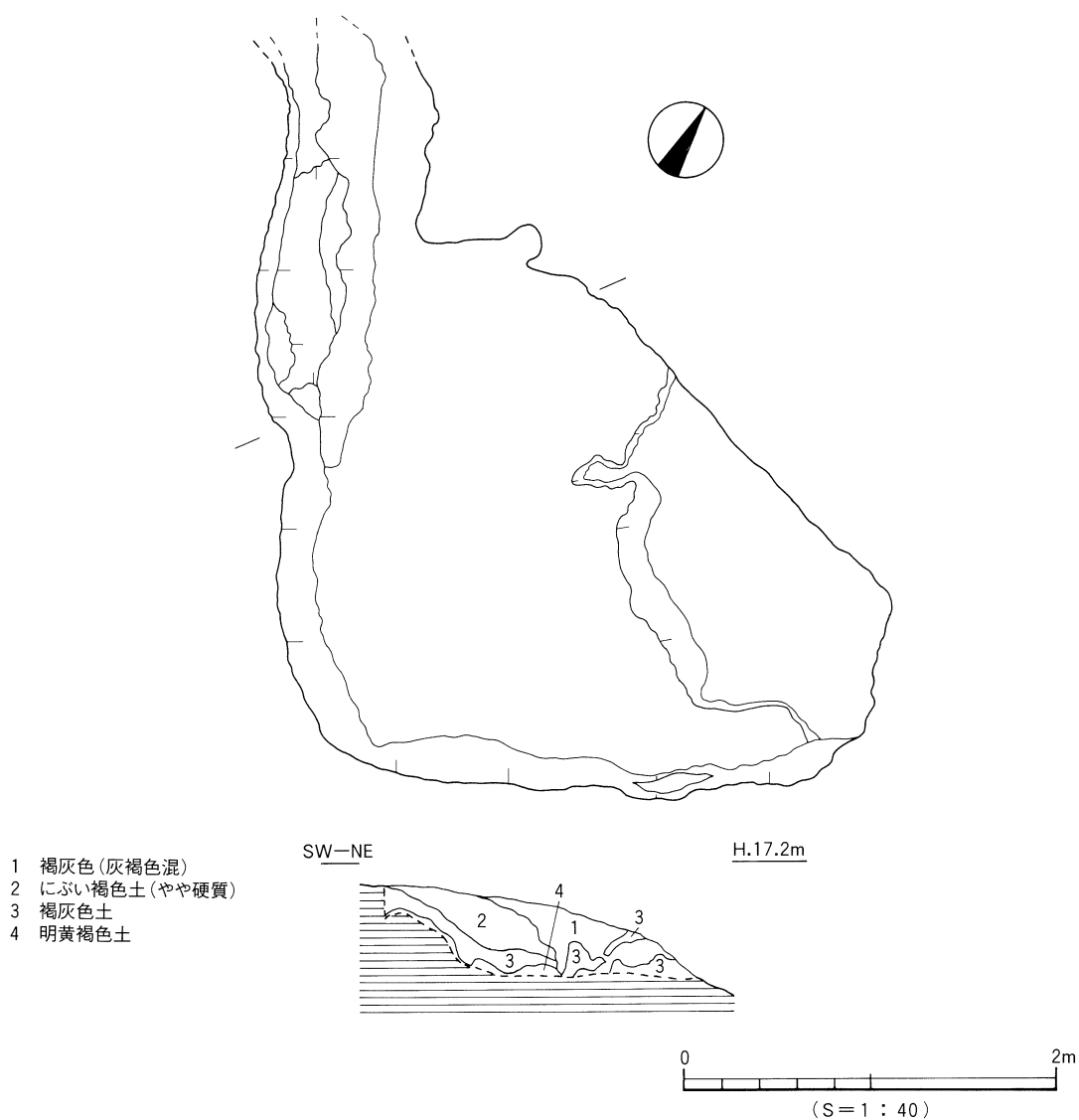
11の坏部は内湾して外に開き坏底部外面は磨滅のため不明瞭ではあるが段を持つ。脚注部は円錐状に広がり、ゆるやかに屈曲して裾部へ続く。内外面とも磨滅が激しく調整は不明である。

時期：遺構の時期は出土遺物より古墳時代中期に比定される。

SD 1 (第15図、図版5)

調査区南西に位置し、SB 1住居址の北部から東部を切り、またSD 2に切られて東西に走る溝である。規模は、幅36~65cm、検出長5.38m、深さ10cmを測る。断面形状は逆台形状を呈する。SDの東端は調査区外に延び、西端は住居址南東端付近で消失している。これは、後世の削平によるものと考えられる。溝底は西から東に急傾斜し、比高差は80cm前後を測る。遺構内からは5cm~10cm前後の小礫が溝床面上にまばらに検出した。また、遺物は、土師器の胴部片が数点出土しているが、小片のため未掲載である。

時期：遺構の時期を明確にできる遺物の出土がないため、比定し難くSB 1廃絶以降と考えられる。



第13図 SB1 測量図

SD 2 (第15図、図版 5)

調査区南西に位置し、住居址SB1及び溝SD1を切りながらほぼ南北に走る。規模は、幅28~40cm、検出長2.84m、深さ44~50cmを測り、北端部は調査区外に延びる。埋土は褐色土、下部においては細砂がまじる。断面形状は「V」字状を呈する。溝底は南部から北部に急傾斜しており、溝南北上場の比高差は95cm前後を測る。また、遺構内には5cm~16cmの小礫、及び角礫が溝内中位より多数検出している。礫の下層からは、シルト質の細砂層が見られた。遺物は上層より土師器の胴部小片が2点出土しているが、小片であるため未掲載である。

時期：遺物の出土が僅少であり、詳細な年代の比定は難しいが古墳時代、SD1の埋没以降である。

石列 (第11図)

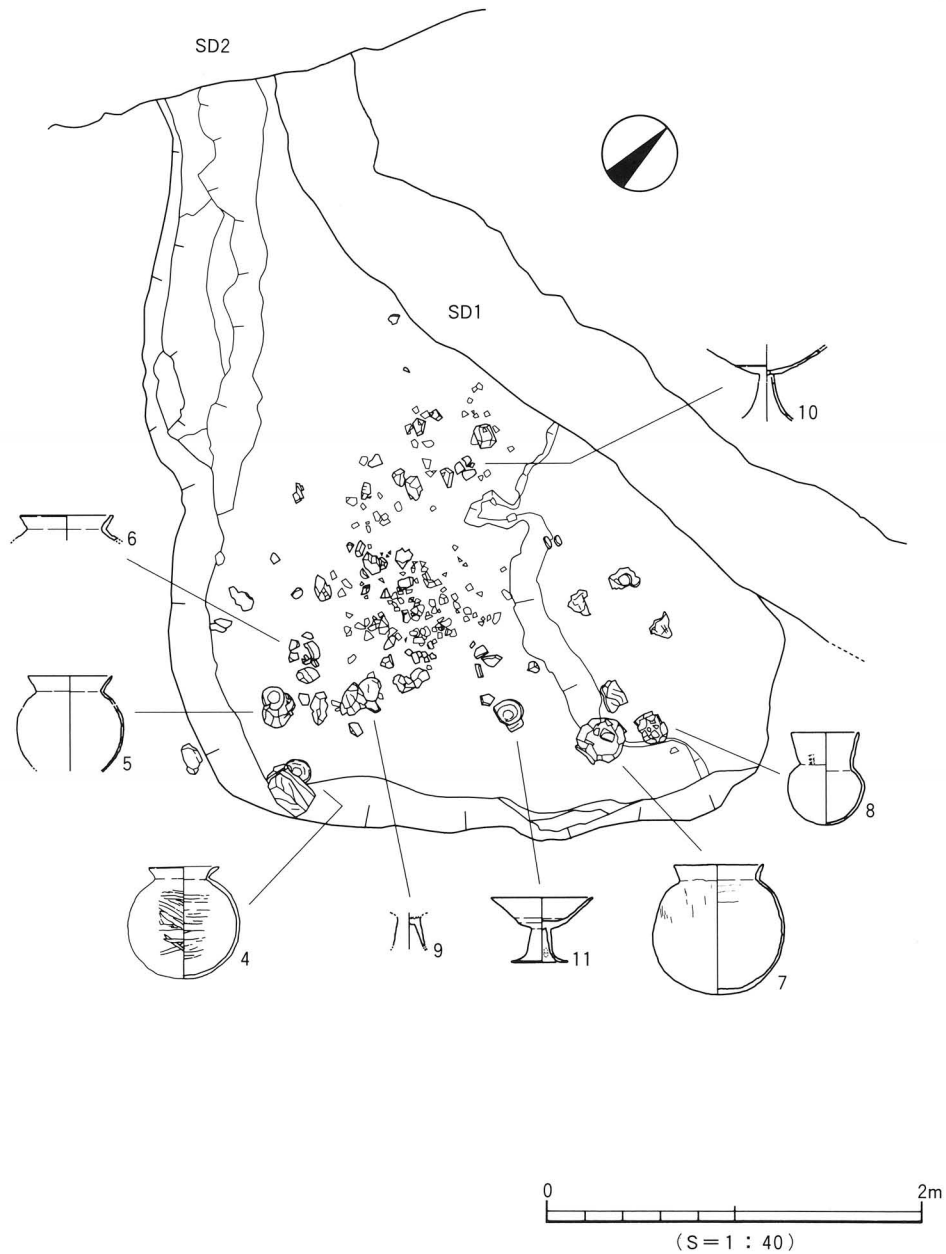
調査区北方に位置し、周辺地形では谷部斜面に位置する。長さ80cm、幅44cm、深さ8~16cmを測る石列である。石列の一部は、試掘時において確認されていたが、全長は後世の削平をうけ不明である。

この石列直下からは磁器が出土している。

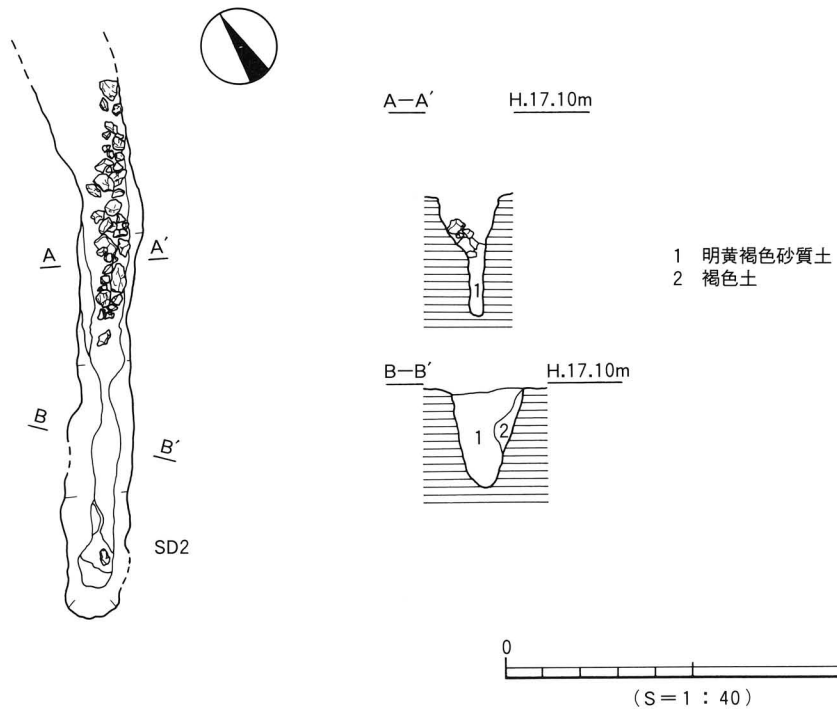
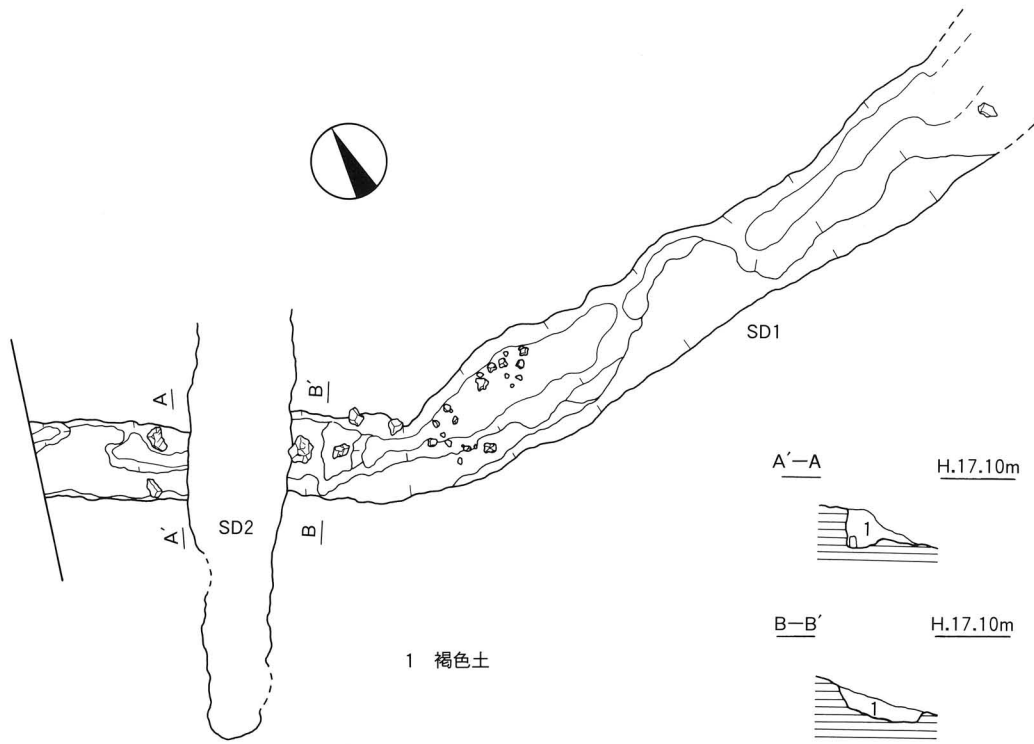
出土遺物（第16図）

12は磁器の鉢形土器底部片である。体部は大きく緩やかに開く。内面見込み部に2ヶ所のトチン跡が見られる。外面はケズリ、内面はナデられ、内外面ともに施釉される。高台は、回転ケズリ出しにより形成し、外面に面取りがなされるが内面はやや丸く仕上げる。

時期：遺構の時期は出土遺物より江戸期以降である。

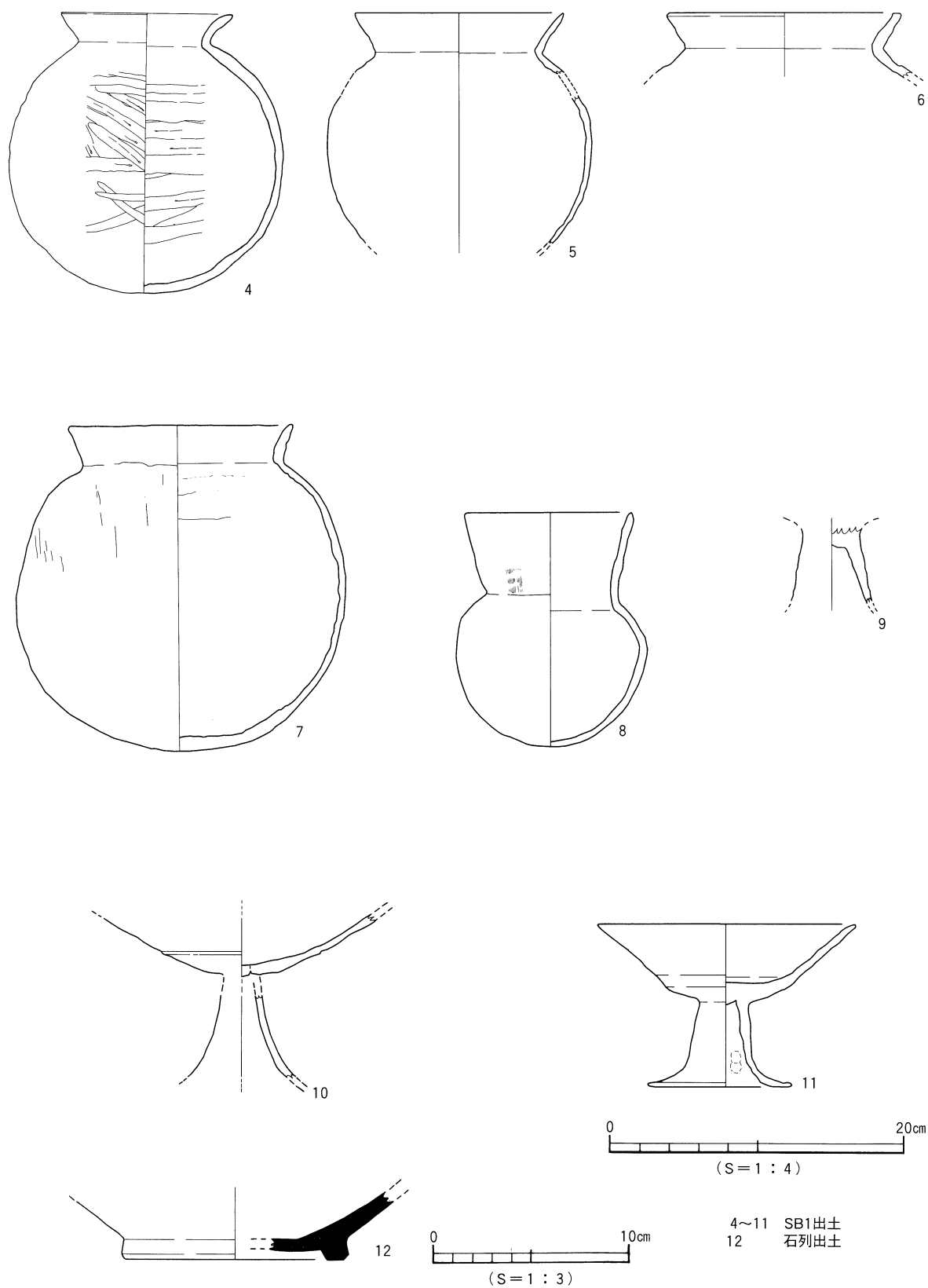


第14図 SB1 遺物出土状況図



第15図 SD1・SD2測量図

遺構と遺物

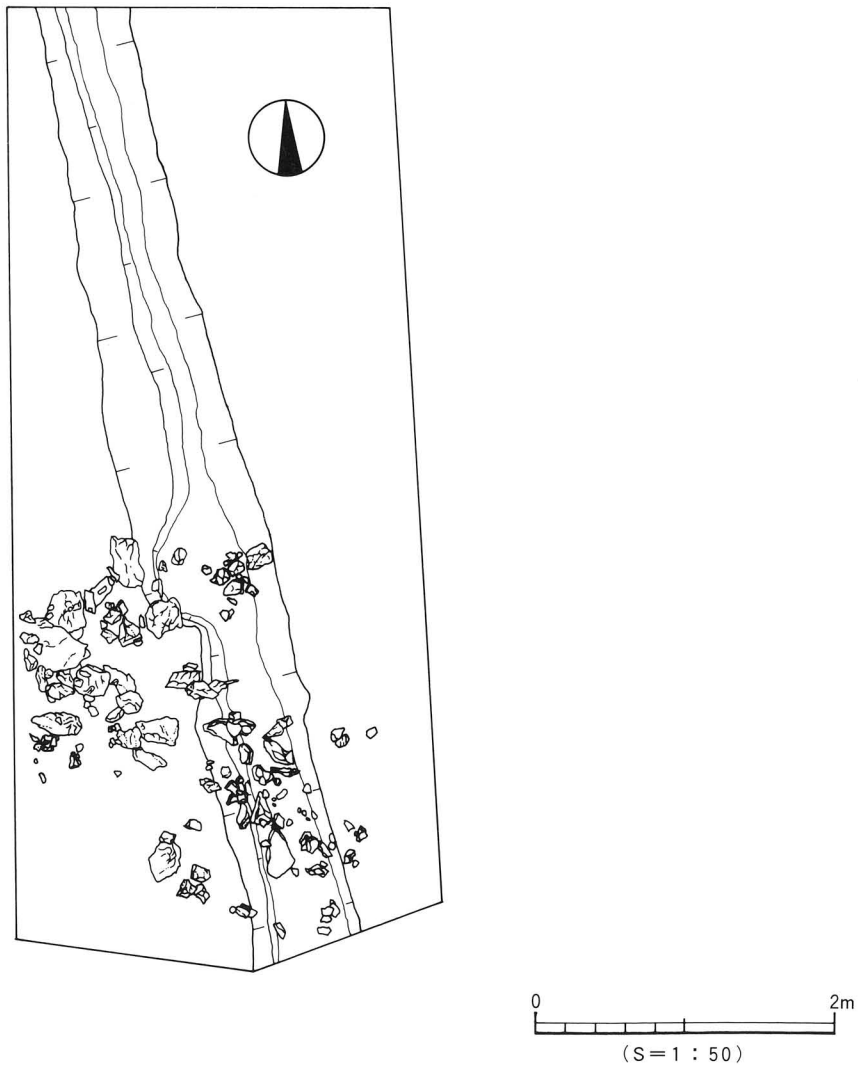


第16図 出土遺物実測図

(3) C区 (第17~19図、図版6)

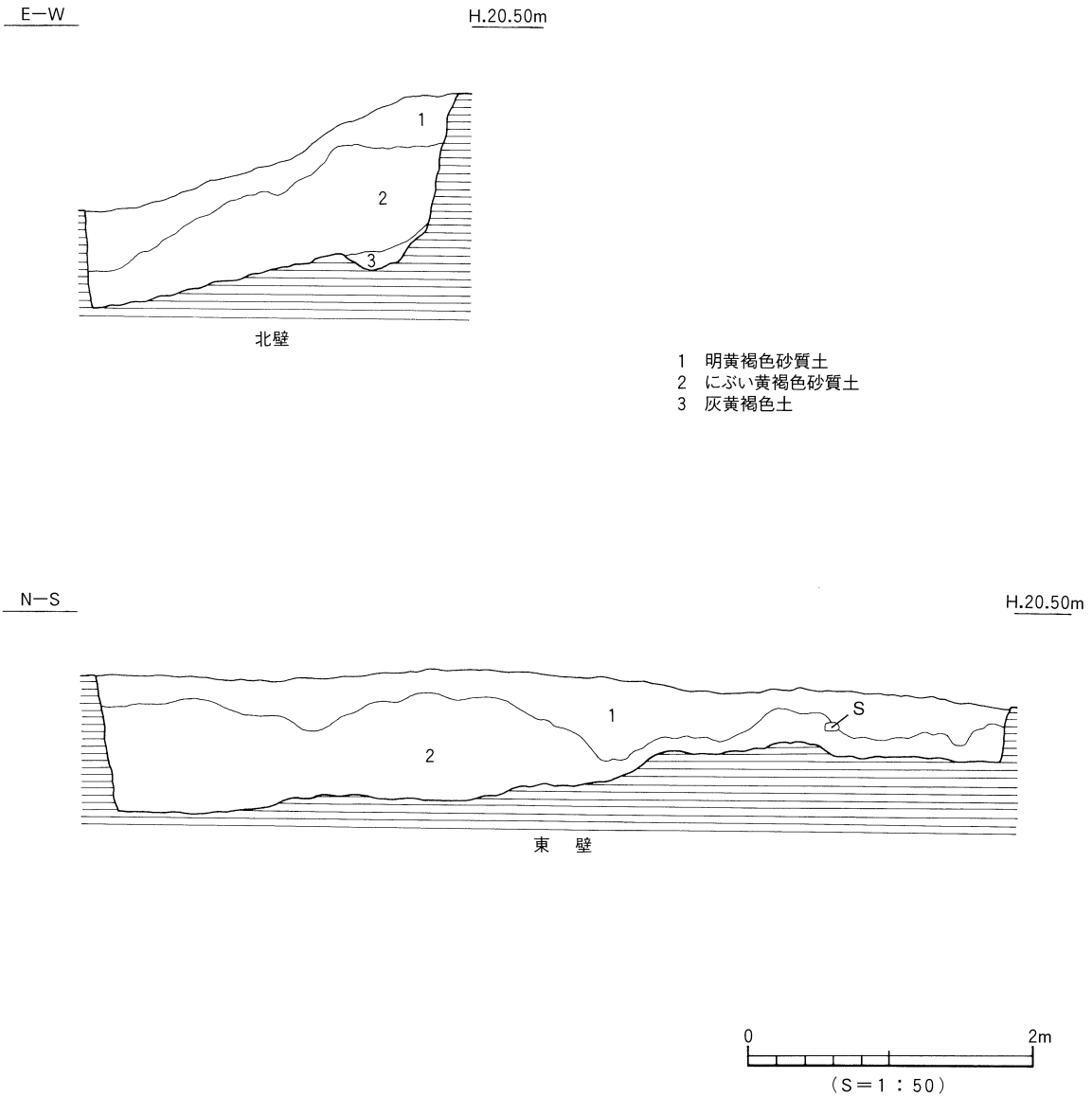
試掘調査時においてT13トレンチおよびT14トレンチの2本の試掘トレンチ上方部から一連のものと考えられる溝が検出された。よって、遺構は両トレンチにわたって広がると予想され、これらトレンチ上方部を拡張しC区とした。調査区内は、標高17.8m~19.5mを測り、調査区西部から東部にかけて急傾斜している。東西の比高差は60cmを測る。また、調査区全体の床面は一部礫層が見られ、特に南部は下層の礫を多く含む岩盤層が露出している。C区の調査面積は17㎡である。

検出された遺構は、調査区南北を走る溝1条のみである。試掘調査において、この溝は断片的に検出されていたが、本調査によりこの溝の広がりを確認する事ができた。また遺物は、調査区内の地山上面からは須恵器の胴部片が1点出土している。この須恵器片は小片のため未掲載である。



第17図 C区遺構配置図

遺構と遺物

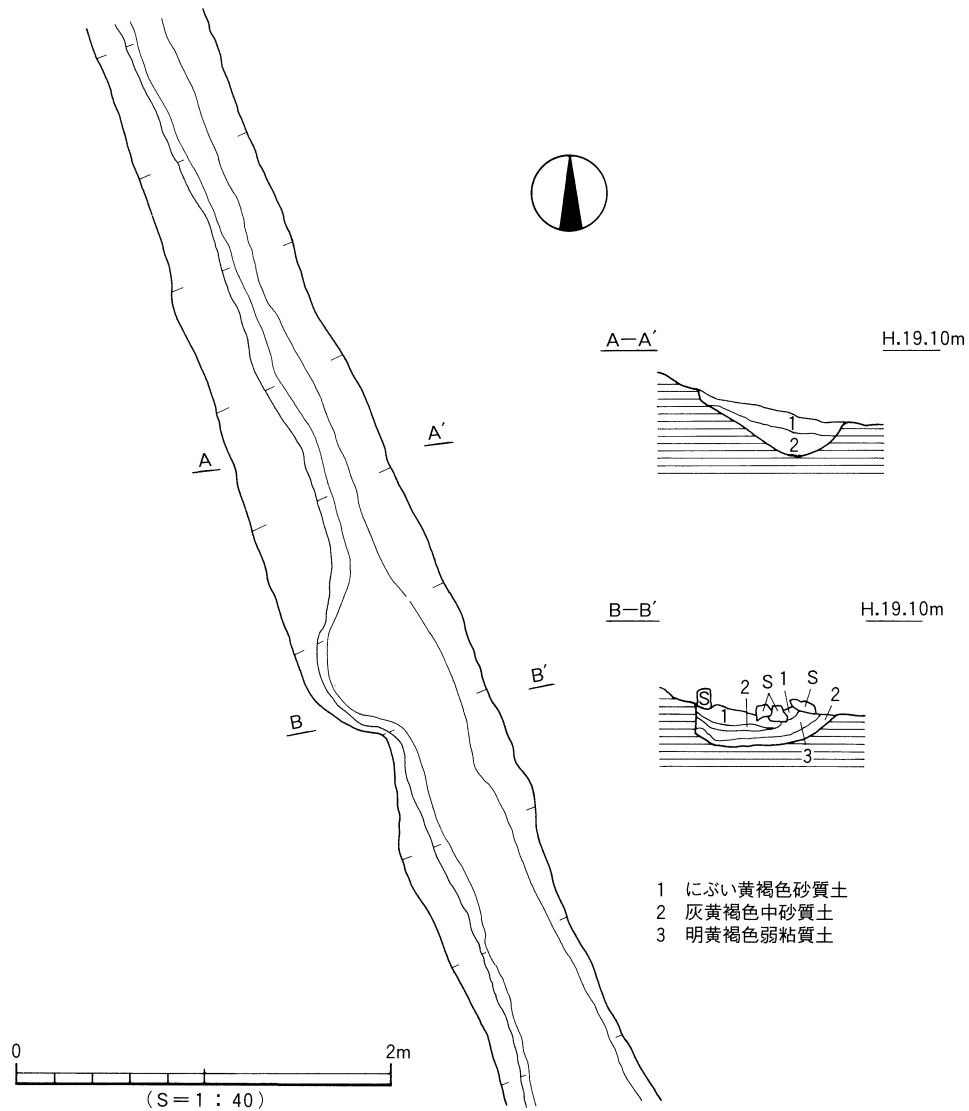


第18図 土層図

溝

SD 1 (第19図、図版 6)

溝SD 1は、調査区をほぼ南北に走り、一部中央部で膨らむ。規模は幅85cm前後、検出長6.3m以上、深さ約22cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、溝内の埋土はにぶい黄褐色砂質土、灰黄褐色砂質土である。溝は両端ともに調査区外に延びており、北西から南東に傾斜し比高差は約46cmを測る。溝床面は比較平坦であるが北部に向かってV字状をなす。溝からは、その性格を示すような施設は検出できなかったが、埋土は砂質が多く層状をなしている。この事からもこの溝の性格は、排水路等の可能性が考えられる。この溝からの遺物の出土はない。



第19図 SD1 測量図

時期：この溝からは、時期の特定できる遺物の出土はなく判断しがたいが、ここでは他の溝を参考に近～現代としておく。

(4) D区 (第20～23図、図版6・7)

試掘調査時においてT24トレンチから、溝内に石列を配した遺構を検出した。よって、当該の試掘トレンチを拡張しD区とした。調査区は、調査対象域内北部に位置し、標高18.8m～19.6mを測り、調査面積は36.0㎡である。調査区東には既存農道が隣接するため、北東部から東部はそれ以上の調査区の拡張はせず、直前にてとどめた。調査区内は、周辺地形に沿って北西から南東に傾斜する。

D区で検出された遺構は、石列で構成された溝4条である。遺物は、須恵器の胴部片1点が基盤面

直上より出土している。また、第3層中より古銭が2枚出土している。検出された溝3条は、東西に走る溝をSD1、南部から曲線的に走り調査区中央でSD3に接する溝をSD2、南西から曲線的に北部に走る溝をSD3、最後にSD3から北東に延びる溝をSD4とした。

溝

SD1（第21図、図版6）

SD1は、調査区内南東部に位置し東西にほぼ直線的に走る溝である。溝中央部にてSD2と交差する。規模は幅20cm～35cm、検出長4.5m、深さ15cm前後を測る。溝の両端は調査区外に延びるため不明である。溝内上面からは、10cm前後の小礫と20cmから15cm程度の横長角礫が検出された。これら横長角礫の多くは、SD2との交差部周辺を除き、溝の軸方向に対してほぼ直交するように配置されている。また、その下部には小礫が両側に配され、溝床面には礫はなく空間が造られる。溝の断面形状は、ところによってやや形状に変化があるが、ほぼ皿状～船底状を呈している。この溝から遺物は出土していない。

SD2（第21図、図版6）

SD2は、調査区内ほぼ中央に位置し、調査区南部からSD3中央部に接する溝である。溝の規模は、幅20cm～30cm、検出長約15.7m、深さ20cm前後を測る。全長は、溝が調査区外に延びるため不明である。石列の断面形状は、SD1とほぼ同様な配置構造を採り、溝の断面形状は「U」字状を呈する。SD1およびSD2が重複する部分は礫が疎らに検出され、また溝の床面は、SD2が5cm程度SD1より深くしっかり掘り込まれている。SD1との新旧関係は、石列の観察からSD1より古い施設と考えられる。この溝から遺物の出土はみられなかった。

SD3（第21図、図版6）

SD3は、調査区内ほぼ北部半に位置し、南西から北に曲線的に走り、中央部でSD2と接しながら調査区外に延びる。溝の規模は、幅約44cm、検出長4.38m、深さ30cm前後を測る。溝の両端は調査区外に延びるため不明である。石列を構成する礫は、上方部（南西部）は長さ20cm前後の角礫が使用され、下方部（北部）は比較的小礫が上面に配置されている。石列の内部構造は、前述のSD1と同様な状況を呈する。また、溝の断面形状は「U」字状を呈する。

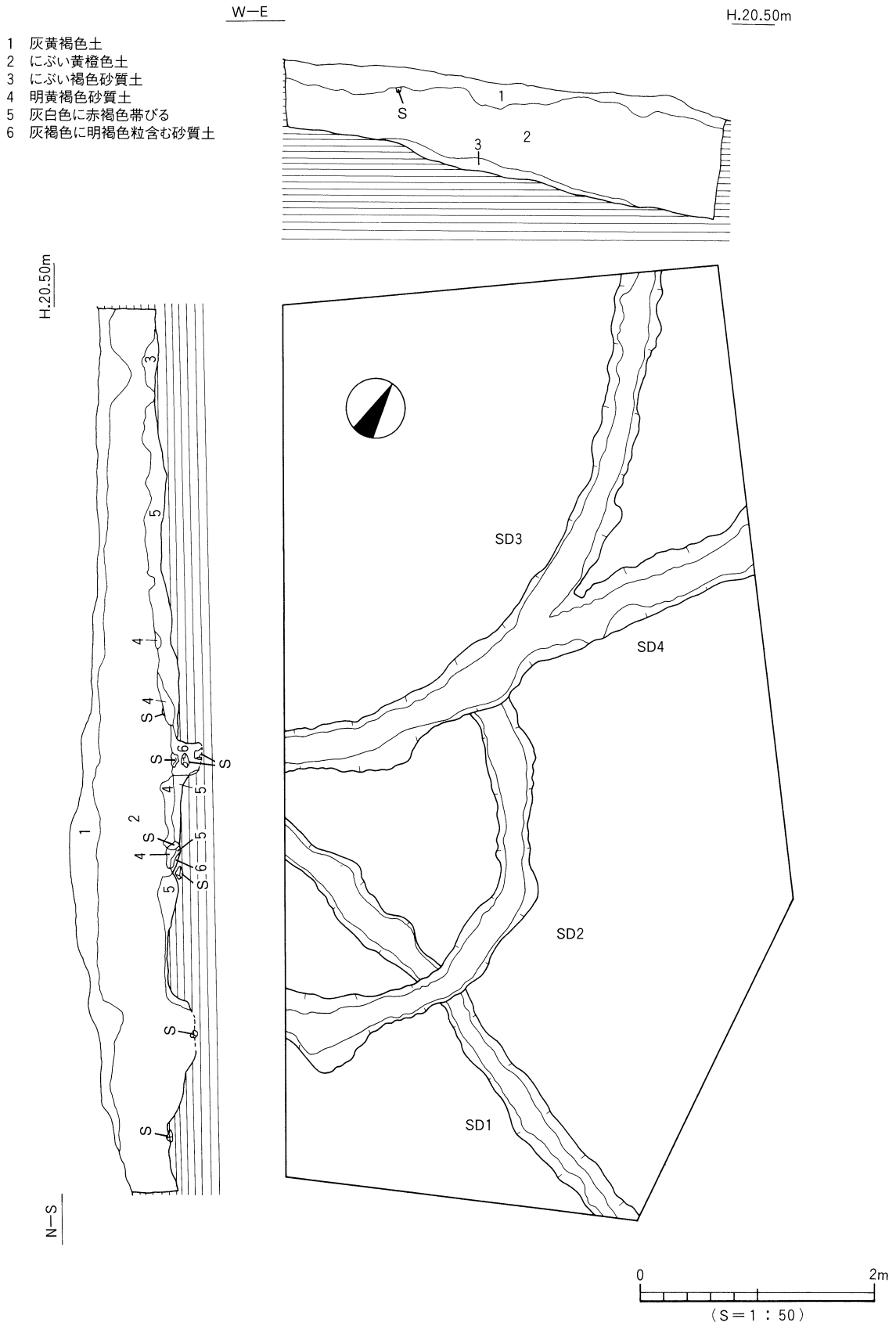
SD2との新旧関係は、その交差部の状況からは判断し難く、先行する時期若しくは同時期と考えられる。またSD4との関係は、その交差部（第22図）の観察より、SD4はSD3を構成する石列の礫を除去し、新しく増設するように石列が設置されることから、SD4に先行する時期と考えられる。

SD4（第21図、図版6）

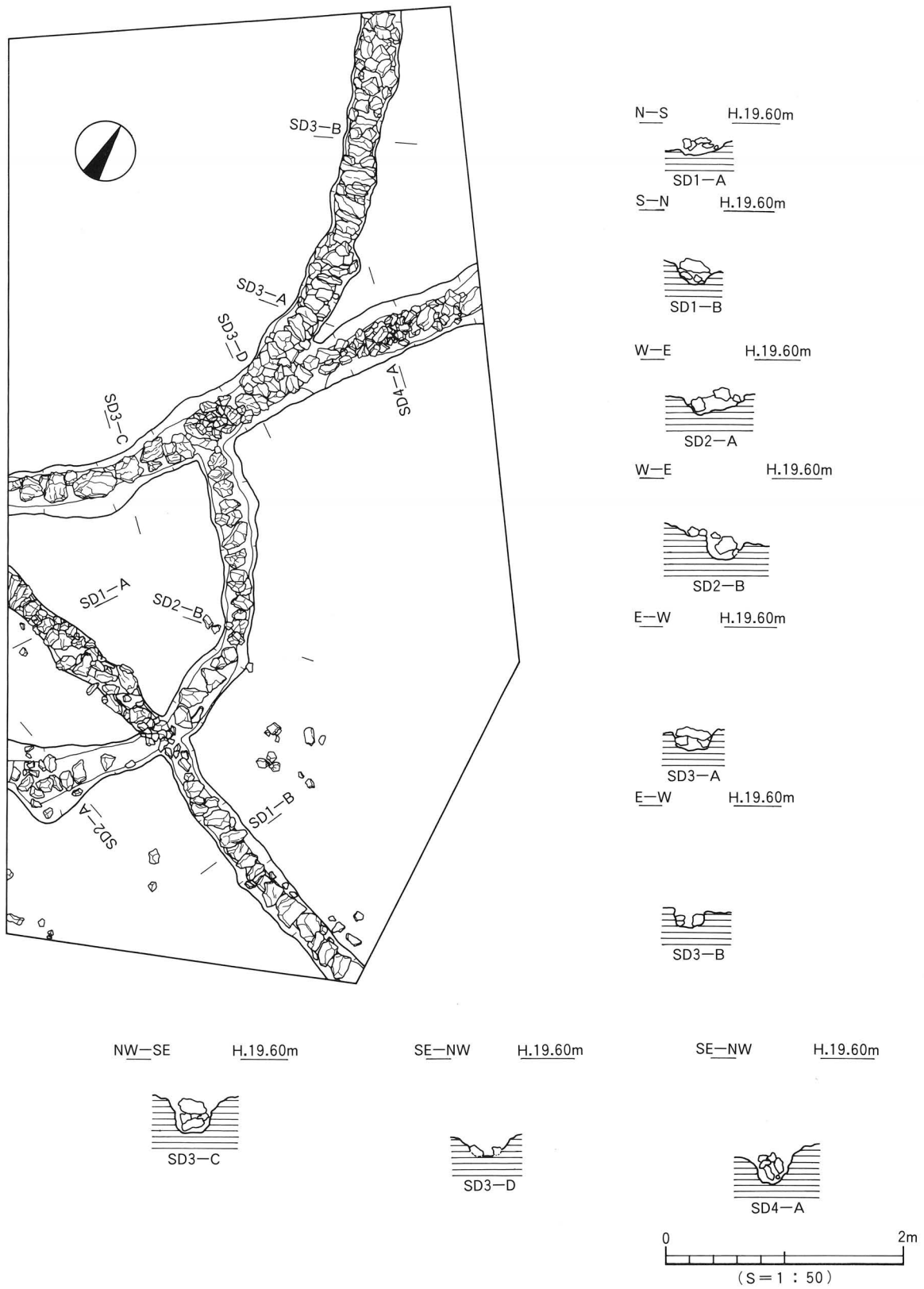
SD4は、調査区内ほぼ北東部に位置し、SD3中央部から北東に直線的に走り、調査区外に延びる。溝の規模は、幅約40cm、検出長2m、深さ30cm前後を測る。溝は調査区外に延びるため不明である。石列の構造はSD2と同様である。

いずれにしてもこれら複数の石列は、若干の構築時期の差はあるとしても、大きな時間差のあるものとは思われない。また、これらの遺構内からは遺物の出土は見られなかった。各溝内には石列が配され構造的に内部空間を持つように構築されることや、石列内部あるいは周辺の土層中には、砂質層が見られることから流水があったことが考えられる。この事からも、この溝内に設置された石列4条は排水等の機能を有した暗渠施設と考えられる。

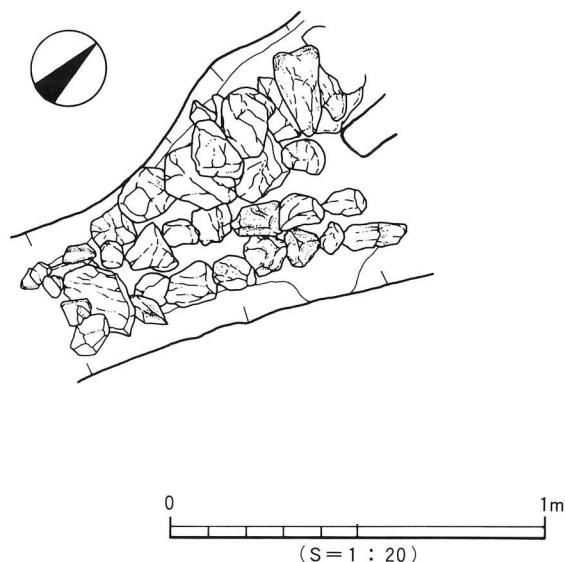
太山寺経田遺跡 1次調査



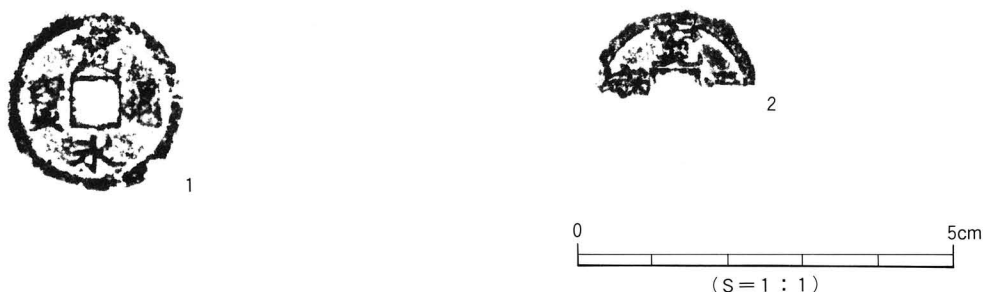
第20図 D区遺構配置図



第21図 石列測量図



第22図 石列交差部測量図



第23図 出土銭拓影

時期：これら4条の溝内より遺物の出土はないが、中世～近世の遺構と考えられる。

遺構外出土遺物

遺物は、須恵器の甕形土器胴部片、銭貨2枚が出土している。甕形土器片は小片であり、実測・図化は難しく実測図は掲載していない。

銭貨（第23図）

銭貨2枚は、ともに地山面直上より出土している。

1は、銭径23.4mmを測る古寛永銭である。銭貨全体に腐食が進んでいるがほぼ完形品である。背面には文字はない。

2は、残存銭経約21mmを測る古寛永銭である。銭貨全体の下半部が欠損している。完全に判読できる文字は、「寛」の文字のみである。その他「寶」・「通」の文字の上半部が残る。

これら二つの銭貨は、「寛」の文字を比較する限り同様な形態である。銭貨の新古峻別は、1の銭貨に見られる「寛」・「寶」文字の形態観察によるものである。

4. 小結

各区における調査では、古墳時代・中世～近世までの遺構を検出した。中でも最も注目されるのは、A区出土の壺形土器およびB区の方形住居址である。

A区

本調査区で検出された石列は、その構造や方向性、また本調査次以降に引き続き行われた当地域の調査所見からも、これらは土地を区画する目的で設置されたものと考えられる。また、これらの石列は、ほとんどが丘陵斜面に沿って設置されている。

溝遺構SD1、SD2はその最東部の落ち込み部内埋土を除去後、床面にて検出した。またSP1、SP2は落ち込み埋土上面では確認することは出来なかった。このことから、溝SD1・SD2が構築された後に柱穴が建てられ、その後周辺を含め後世の削平があり、土地改変が行われたと考えられる。この土地改変の際には、石列自体も一部破壊されていることから土地改変は、石列構築後に行われていることが理解できる。またやや規模が異なり近接するSD1およびSD2は、ほぼ一致した方向性を持つが、SD1出土の壺形土器2は古墳時代初頭に比定され、またSD2出土の杯形土器1は中世に比定される。両者の所属時期が大きく異なることは興味深い、これら溝の目的は不明である。

B区

調査区南部の方形竪穴式住居址内からは、拳大の角礫が遺物とともにまとまって検出されている。遺物は、住居址床面より土師器の壺、甕、高坏等が出土している。これら遺物は、南部コーナーに甕形土器3点と高坏形土器1点、北東部コーナーに甕形土器、小型丸底の壺形土器、高坏形土器がそれぞれ1点ずつ検出されている。また、中央部に高坏形土器が1点検出され、殆どが住居址内南東部辺に集中していることは、住居址内における空間利用の面でも興味深い。また住居址内に炉址等の痕は検出されず、東部段落ちの意味合いも不明であるが、本住居址の性格に関連するものであるとも考えられる。またSD1・2は、その埋土中に砂質土を含むことから排水施設としての溝である。

C区

SD1は、他の調査区でも検出される排水施設の溝と考えられる。地山面に露出する岩盤を掘り込んでしっかり構築される。

D区

検出した溝はSD1、SD2、SD3、SD4の4条である。これら溝の配置および構造は前述したが、詳細な観察と調査時における石列構成の所見からも、構築順序はSD3→SD2またはSD4あるいは同時期→SD1であると考えられる。SD1およびSD2の交差部は石列の配置状況からSD2が先行し、SD3およびSD2の交差部は判断し難いが、SD3前後の時期と考えられる。

SD4は、SD3構築後に取り付けられる事から、最も新しい時期と推察される。このような排水施設の設置目的は不明であるが、何らかの理由により数度の排水施設の改修行為が行われたと思われる。

今回の調査では、当丘陵上に所在する古墳群に直接関連する遺構遺物の検出には至らなかったが、丘陵周辺に営まれた古墳時代集落の一部が解明できた。しかし、生活址も一部であり、またそれ以外の遺構は確認できず、当該期の遺跡の広がりや性格については不明な点が数多くあった。また中世～

近世における当地における農耕地利用形態の一端が明らかにされた。特に本遺跡では、特徴的に見られる多くの溝は、土地を区画する溝、また排水等の水利に用される暗渠状の溝があり、これらの事から当地域における土地区画および土地利用の在り方の一端を窺う事ができよう。今後は、周辺地域での発掘調査により、集落構造や変遷が明らかになることに期待したい。

【参考文献】

- 栗田正芳・小笠原善治 1994 「太山寺経田遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』VI
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 田城武志・山本健一 1995 「太山寺経田遺跡 2 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報』VII
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 山本健一・武正良浩 1996 「太山寺経田遺跡 3 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報』VIII
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 水本完児・河野史知 1997 「太山寺経田遺跡 4 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報』IX
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏・加島次郎 1998 「太山寺経田遺跡 5 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報』X
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 河野史知 1997 「樽味高木遺跡 4 次調査地」『桑原地区の遺跡』III (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田正芳編 1993 「古照遺跡— 6 次調査—」『松山市文化財調査報告書』35 (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 川根正教 1995 「寛永通寶銭の基礎的研究 1」『出土銭貨』第 4 号 出土銭貨研究会

遺構・遺物観察表

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴上→胴部上位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 石・長(1~4) → 「1~4mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表 1 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時 期	炉	カマド	位 置	平面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	出土遺物	備 考
1	古墳中期			調査区西部上方	隅丸長方形	東北 東西 3.9以上×3.2×0.2~0.4	土師	B区

表 2 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A 区	皿状	5.0以上×0.26×0.8	南東 ~北西	褐色土	土師	古墳	
2	A 区	皿状	5.1以上×0.65以上×0.32	南東 ~北西	褐色土	土師	中世	
1	B 区	逆台形状	5.38以上×0.36~0.65×0.1	東西	褐色土	土師	古墳中期	
2	B 区	V字状	2.84以上×0.28~0.40×0.44~0.5	南北	褐色土 明黄褐色土	土師	古墳中期以降	
1	C 区	逆台形状	6.3以上×0.85×0.22	南北	にぶい黄褐色砂質土 灰黄褐色砂質土		中世~近世	
1(A)	D 区	皿状 船底状	4.5×0.20~0.35×0.15	東西			中世~近世	石列
2(B)	D 区	U字状	4.5×0.20~0.30×0.20	南北			中世~近世	石列
3(C)	D 区	U字状	5.5×0.44以上×0.30	南西~北			中世~近世	石列
4(D)	D 区	U字状	2.0×0.4以上×0.30	北東			中世~近世	石列

表 3 石列一覧

石列	地 区	断面形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A 区		5.2×0.2	東西			江戸	

表4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	壺 (土師器)	頸径(8.0) 残高 8.7	口縁部は欠損。 器壁は厚い。	マメツ	マメツ	灰黄色 にぶい黄橙色	砂(1~3) ○		
2	壺 (土師器)	口径(16.2) 器高 30.7 底径(7.2)	口縁部は外傾して開き、端部に段をなし丸い。体部は胴部が張る扁平な球形で器壁は薄い。平底	マメツ	マメツ	橙色 橙色	砂(2~3) 石・長(2~3) ○		
3	皿 (土師器)	口径(14.2) 器高(3.3) 底径(9.0)	内面底部中央やや盛り上がる。	Ⓢ回転糸切り	マメツ	にぶい橙色、灰色 にぶい橙色 赤灰色	石・長 ○		
4	甕	口径(11.5) 器高 18.9	口縁部は外反気味に立ち上がる。	ケズリ	ケズリ Ⓢヨコナデ	淡黄色 にぶい黄橙色	密 石・長・砂(1~5) 金 ○		
5	甕	口径 14.2 残高 15.5	口縁部は外傾して外上方に開く。端部は尖り気味に先細る。器壁は薄い。	マメツ	マメツ	橙色・オリーブ色・ 灰色 オリーブ褐色・灰色	石・長(1~3) ○		
6	甕	口径(16.0) 残高 4.3	口縁部は外傾したのち立ち上がる。器壁は厚い。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	粗 石・長(5) ○		
7	甕	口径 7.8 器高 6.4 底径 21.8	胴部はいびつな球形。口縁部は外反し端部は丸い。器壁は厚い。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	砂		
8	壺	口径 11.5 器高 15.7	胴部は肩の張る球形。口縁部は内湾して立ち上がり外反する。	ハケ	ハケ	明赤褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~3) ○		
9	高坏	残高 3.8	高坏形土器の脚柱部。	マメツ	マメツ	黄橙色 灰白色	密 石・長(1~2) ○		
10	高坏	残高 11.0	口縁部は外面に段を持つ。脚柱部は裾部に向かってラッパ状に開く。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~5) ○		
11	高坏	口径(17.6) 器高 10.9	坏部は内湾して外に開く。脚柱部は円錐状に広がり屈曲して裾部へ続く。	マメツ	Ⓢヨコナデ 脚ヘラケズリ	淡黄色・黄灰色 浅黄橙色	密 石(1~5) 金 ○		
12	鉢	高台径(11.5) 高台高(0.5) 残高 3.4	体部は大きく穏やかに開く。見込み部に2ヶ所トチン。	施釉	ナデ 施釉	淡黄色 淡黄色	密 ○		

表5 出土遺物観察表 銭貨

番号	銭名	初鑄年	銭径(mm)	孔径(mm)	外縁厚(mm)	内側厚(mm)	重量(g)	備考
	寛永通寶	1626年	23.4	0.5	1.15	0.95	2.19	古寶永
	寛永通寶	1626年	21.0	不明	0.6	0.1	0.78	古寶永

第Ⅲ章

太山寺経田遺跡

— 2 次 調 査 —



第Ⅲ章 太山寺経田遺跡 2次調査

1. 調査の経過

(1) 調査の経緯 (第1図、図版9)

本調査地は、現在果樹園として利用されている丘陵地で、大小3本の尾根とこれらの尾根に挟まれた谷間部によって形成されている標高29～44mの緩斜面上に立地する。今回の調査は、経田遺跡1次調査で検出された古墳時代の遺跡の広がりの確認や、古墳の検出を目的とした。

調査はまず、7月1日より9月4日までトレンチによる確認調査から始めた。それぞれの地形を考慮しながら計24本のトレンチを設定した。この確認調査は、対象地内の樹木の伐採、雑草の除去などの作業のため約2ヶ月間を費やした。

確認調査の結果、T1・T2・T16・T17では遺物包含層を、T9・T10では礫石密集部、T23では溝状遺構を確認した。これらのことにより、T9・10地点をA区、T16・17地点をB区、T23地点をC区と地区割りをを行い本格調査を実施した。なお、T1地点では遺物包含層を確認しているが、作業の進行上確認調査のみとなった。

本格調査は9月5日から開始、プレハブ等の撤去も含めて12月26日に終了した。

(2) 調査組織

調査地 松山市太山寺町乙677-1外

遺跡名 太山寺経田遺跡2次調査地

調査期間 平成6年9月5日～平成6年12月26日

調査面積 2,190m²

調査担当 田城 武志・山本 健一

調査作業員 石本 勝彦、市山 積、岡崎 政信、蔵本 義夫、重松 吉雄、橋 丈太郎、田中 茂樹、能田 久士、平岡 孝史、広沢 忠、藤原 誠吾、本多 好則、松田 常義、松本 敦、松本 慎二、山口 吉一、好川昇三郎、渡辺 常信、岩本 美保、木下 奈緒美、村上真由美 ほか

2. 層位

(1) 調査地の基本層位 (第2・3図、図版10)

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層明灰黄色砂質土、第Ⅱ層淡黄灰色砂質土、第Ⅲ層黄褐色土～茶褐色砂質土、第Ⅳ層黄橙色砂質土～茶褐色砂粒岩盤である。

第Ⅰ層：耕作土で、調査地全域で見られる。

第Ⅱ層：耕作地掘削時の造成土である。ほぼ調査地全域で見られる。

第Ⅲ層：第Ⅲ層は4層に細分される。Ⅲ①層は黄褐色土でT2のみで確認された。約20cmの堆積を測り、土質はやや硬く粘性をおびる。遺物の出土はない。Ⅲ②層は淡黄色土でT4・8・9・22で確認された。約10～40cmの堆積を測り、土質はやや硬く微粘性である。遺物の出

土はない。Ⅲ③層は明茶褐色土でT 8のみで確認された。約10～25cmの堆積を測る。遺物の出土はない。Ⅲ④層は茶褐色砂質土でT 14・15で確認された。約20～40cmの堆積を測る。遺物の出土はない。

第Ⅳ層：地山層で、第Ⅳ層上位は黄橙色砂質土で、土質は2～5mm大の砂粒を呈し、緻密ではあるが脆い。中位は上位層より茶色味が増し、土質は硬くなる。下位は茶褐色砂粒岩盤となる。

1) A区の層位 (第4図、図版11)

層位は、第Ⅰ層明灰黄色砂質土(耕作土)、第Ⅱ層淡黄灰色砂質土(造成土)、1層赤褐色土、第Ⅳ層黄橙色砂質土(地山)となる。第Ⅱ層は調査区北東部では欠除する。また基本層位第Ⅲ層は検出されなかった。1層は本調査区に限り検出したものである。調査区のほぼ全域で検出したが、南東隅部では確認されなかった。概ね西から東へ傾斜しており40～80cm前後の堆積を測る。1層中からは多量の礫石と、これら礫石の間より縄文土器の小片2点出土した。

2) B区の層位 (第7図、図版14)

層位は、第Ⅰ層明灰黄色砂質土(耕作土)、第Ⅱ層淡黄灰色砂質土(造成土)、1層明茶褐色砂質土、2層茶褐色砂質土、3層明茶褐色・灰茶褐色砂質土、4層黒褐色粘性土～黄灰色土、5層暗黄褐色砂質土、6層明黄灰色微粘性土である。基本層位の第Ⅲ・Ⅳ層は確認されなかった。

1～6層は本調査区に限り検出したものである。1層は調査区東半部に堆積し、層厚約20cmを測る。遺物の出土はない。2層は調査地全体に堆積し、層厚12～38cmを測る。遺物は弥生土器の小片を少量出土した。出土した土器片はすべて3cm以内のもので著しく摩滅を受けていた。3層は若干の土色の違いにより3①層明茶褐色砂質土、3②層灰茶褐色砂質土の2層に分層される。3①層は18～28cm、3②層は20～36cmの堆積を測る。3層は調査区全体に堆積する。遺物は弥生土器、須恵器、石製品を出土した。4層は若干の土色の違いにより7層に細分される。4①層は黒褐色粘性土で調査地全体に堆積し、層厚10～20cmを測る。4②層暗灰黄褐色土で調査区東部では欠除する。24～36cmの堆積を測る。4③層黄灰褐色土(やや粘性)で調査区東部にのみ堆積し、層厚約25cmを測る。4④層灰褐色土(やや粘性で茶色ぎみ)調査区全体に堆積し、層厚20～36cmを測る。4⑤層暗灰褐色土(やや粘性)で調査区全体に堆積し、層厚8～35cmを測る。4⑥層黄灰色土(やや粘性)で調査地東半部に堆積し、層厚6～22cmを測る。4⑦層黄灰色土(4⑥層よりやや青味)で調査地全体に堆積し、層厚12～22cmを測る。4層は弥生土器を包含するが、4②層からの出土量が最も多く、4④層は少量の小片のため図化しきれなかった。5・6層は深掘りにて確認した。5層暗黄褐色砂質土で調査区東半部で確認している。15～30cm以上の堆積を測る。6層明黄灰色微粘性土(砂粒まじり)で50cm以上の堆積を測るものと考えられる。

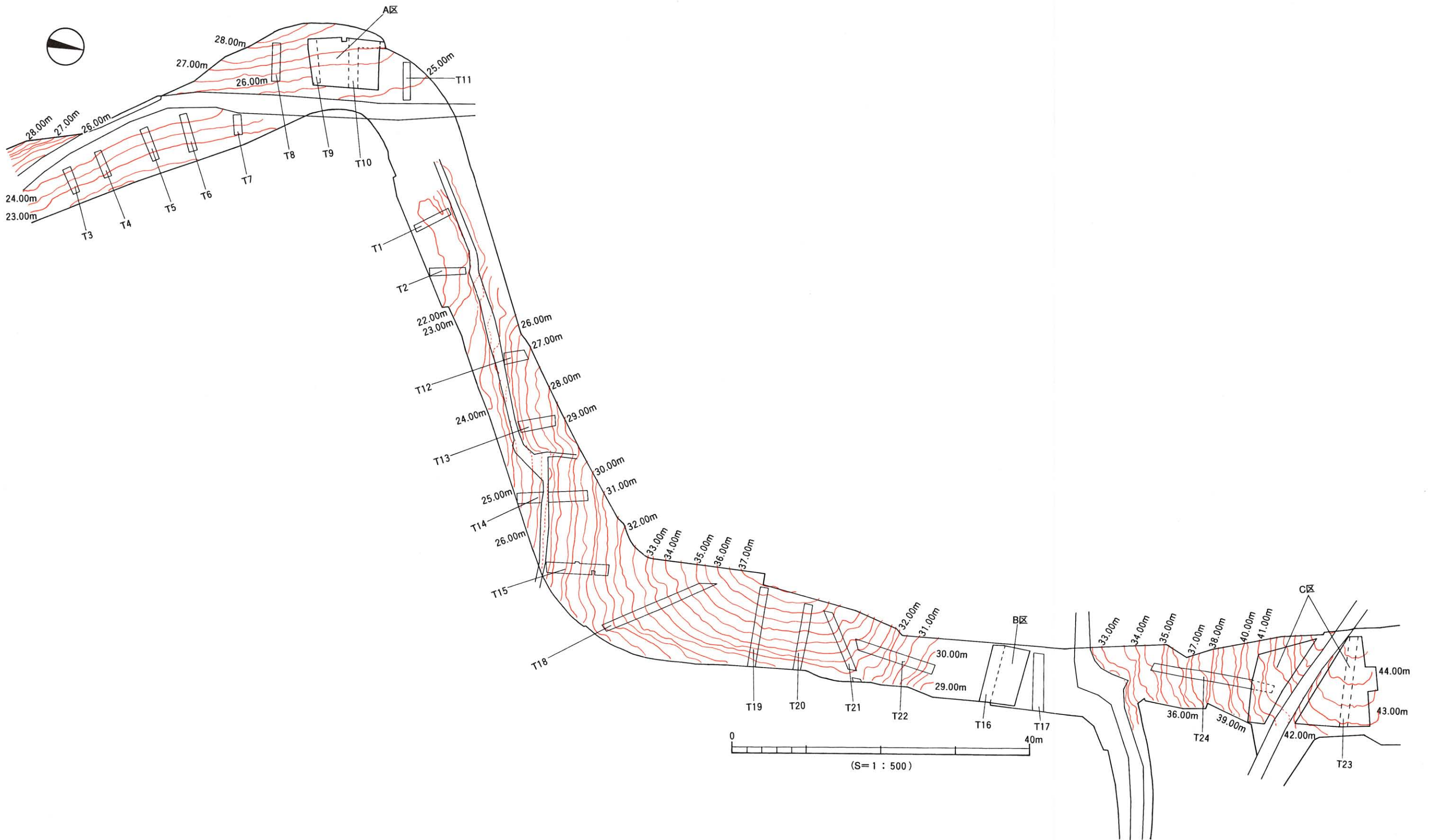
5・6層からの遺物の出土はない。各層は出土遺物より3層は古代、4層は弥生時代中期、5・6層は弥生時代中期以前に堆積したものと考えられる。

なお2層上面にて溝1条、4層上面にて土坑1基を検出した。

3) C区の層位 (第21図、図版17)

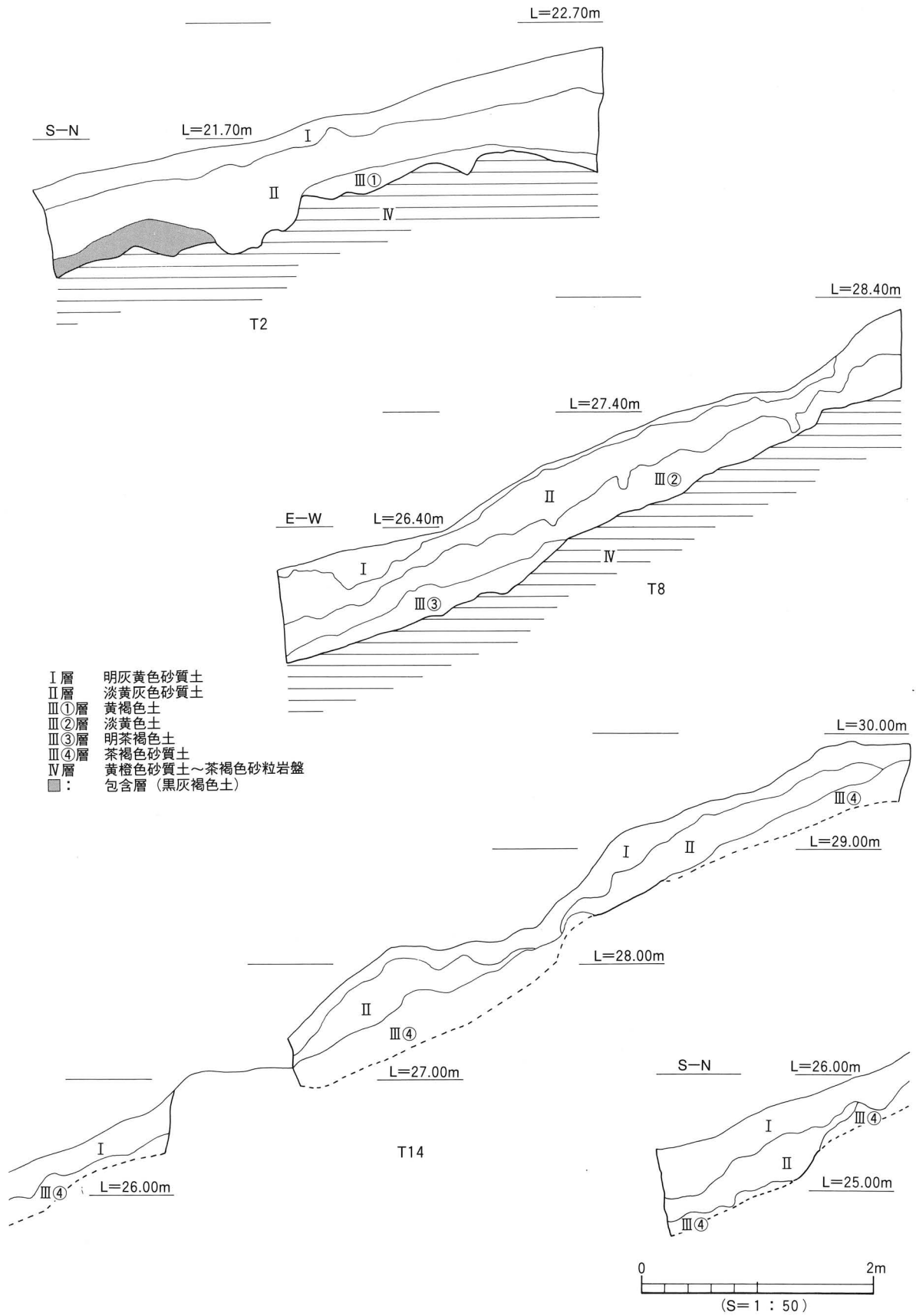
層位は、第Ⅰ層明灰黄色砂質土(耕作土)、第Ⅱ層淡黄灰色砂質土(造成土)、第Ⅳ層黄橙色砂質土(地山)となる。基本層位の第Ⅲ層は検出されなかった。

C区では第Ⅳ層上面にて土坑2基、溝3条を検出した。

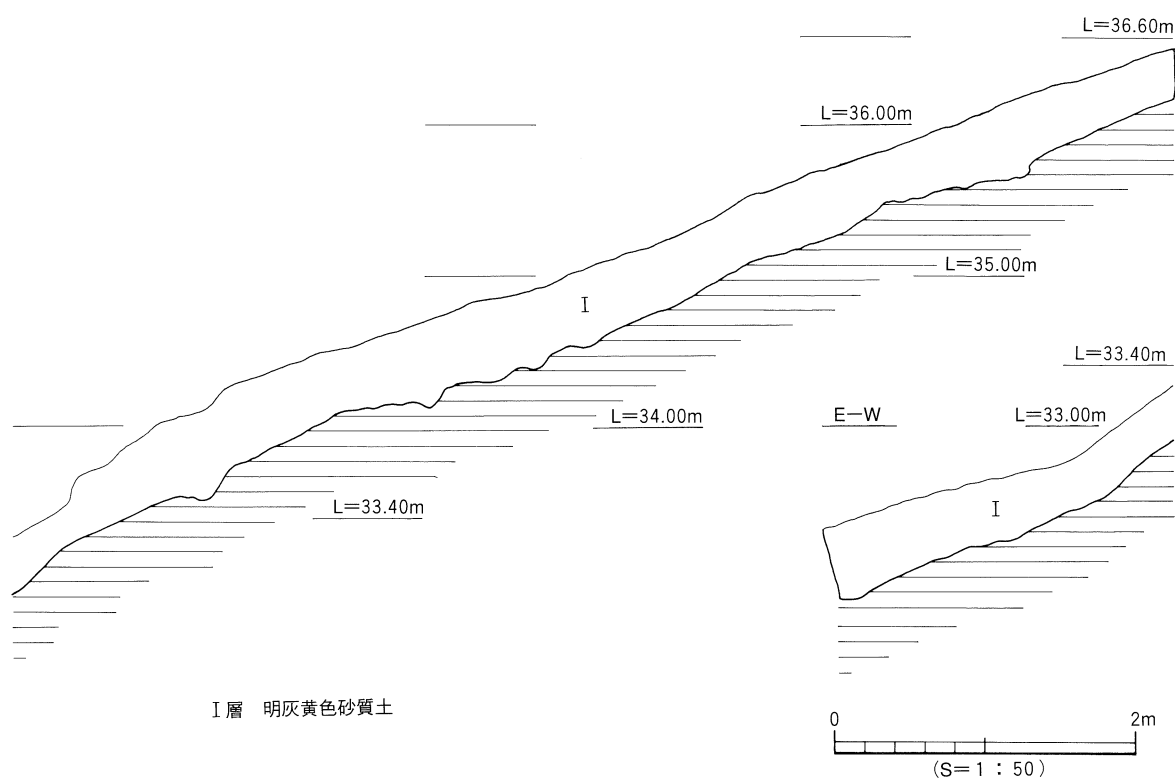


第1図 調査地測量図・トレンチ、調査区位置図

層 位



第2図 トレンチ土層図 (T2・8・14)



第3図 T20土層図

3. 遺構と遺物

確認調査の結果によりA～C区の3地区の本格調査を行った。以下、各区ごとに検出遺構・遺物の説明を行なう。

(1) A区(第4図、図版11)

A区では礫石密集部を検出した。

A区は調査地南部、既存農道西隣の東下がりの緩斜面上に位置する。調査区は、礫石が検出されたT9・10を含めるかたちで設定した。調査区の規模は南北9.4m、東西6.2mを測る。尚、調査区内を2m四方のグリットに分けた。

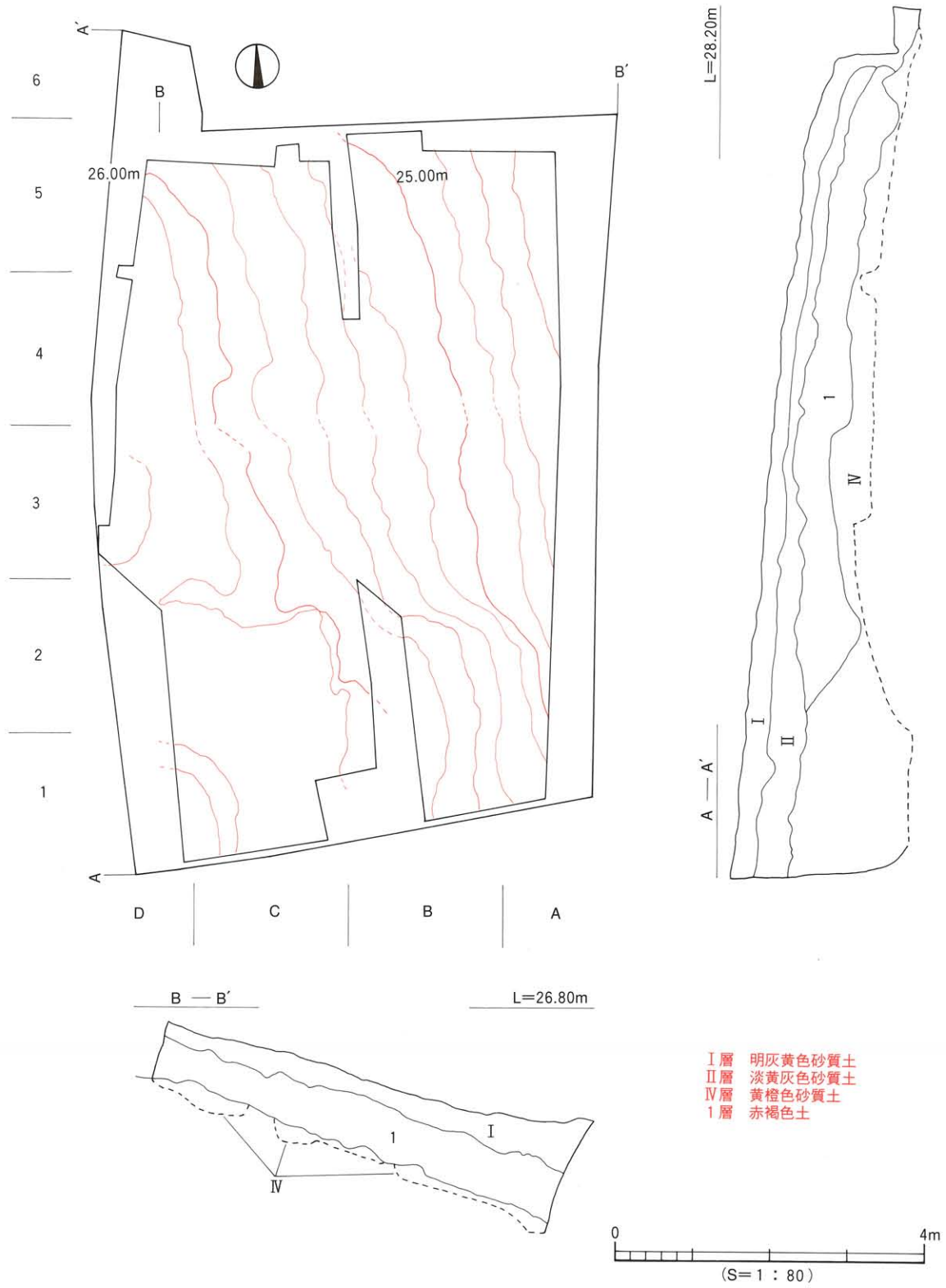
礫石密集部(第5図、図版12・13)

この礫石密集部は調査地及び周辺地でみられる花崗岩の角礫が密集したものである。第IV層上面と同様東下がり傾斜して堆積する。調査区内A3～D6区で検出した。平面形状は、密集端部を南辺のみ確認したが、東西及び北部分は調査区外のため不明である。検出規模は、東西6m、南北6.5m、厚さ15～55cmを測る。礫石の大きさはほぼ15～30cm大のものであるが、60cm大のものが数点見られた。礫石には加工痕はみられず、また、意識的に構築された様子は今回の調査では確認されなかった。遺物はA4区の礫石の間より、縄文土器片2点が約60cm離れて出土した。この2点は同一個体である。

出土遺物(第5図、図版23)

縄文土器(1) 幅広い沈線を施し、縄文がみられる。鉢形土器と考えられる。(縄文後期～晩期)

遺構と遺物



第4図 A区測量図



第5図 A区礫石密集部測量図・出土遺物実測図

(2) B区(第6～8図、図版14)

B区では、2層上面にて溝(SD)1条、4層上面にて土坑(SK)1基と2時期の遺物包含層を検出した。

B区は、調査地北部の既存農道南隣に位置し、調査区の北と南の小尾根に挟まれた東方へ開口する谷間部にあたる。調査区は遺物包含層の堆積の厚いT16を主に、掘削土置き場を考慮し設定した。調査区の規模は、深く掘削することと堆積層が砂質土であることなどから壁面の崩落が考えられるため壁面を斜交に掘削し、上場では東西10m、南北4.4m、下場では東西7.6m、南北4.3mとなる。尚、調査にあたり調査区内を2m四方のグリットに分けた。以下、各層ごとに遺構・遺物の説明を行う。

1) 2層検出の遺構と遺物

2層では上面より溝(SD)1条を検出している。また、2層中からは流入遺物の弥生土器が出土している。小片で著しい摩滅を受けているため図化には至らなかった。

SD1(第9図、図版14)

調査区西寄りのD3～E3区の3層上面で検出した。溝は中央部分(E3区)で、ほぼ直角に曲がる平面プランをもつ。検出長3.1m、最大上場幅1.0m、深さ4～14cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は明灰褐色砂質土である。遺物の出土はない。

溝の性格は不明であるが、埋土が灰色味をおびていることと溝の基底面及び壁面に薄く橙色(サビ色)の土層(図には示せない)が見られることなどから水の利用が考えられる。

時期：埋土から近代～現代と考える。

2) 3層検出の遺構と遺物

3層からの遺構は未検出である。出土遺物は弥生土器、須恵器、石製品である。出土量は少なく調査区全体に散在して出土した。

3①層出土遺物(第10図、図版23)

須恵器(2) 長頸壺の底部片で、脚は短く「ハ」字状に開き内端が接地する。

弥生土器(3) 甕形土器の底部で、上げ底で若干くびれる(弥生時代中期)。

石製品(4) 平基式の石鎌である。b面は素材面が残り周縁のみ調整される。a面はほぼ全面細部調整されるが雑である。未製品とも考えられる。法量は長さ2.6cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重量2.0gを測る。サヌキトイド製。

剥片(5) 石材は黒曜石でa面に自然面を残す。法量は長さ2.4cm、幅2.4cm、厚さ0.9cm、重量5.3gを測る。姫島産。

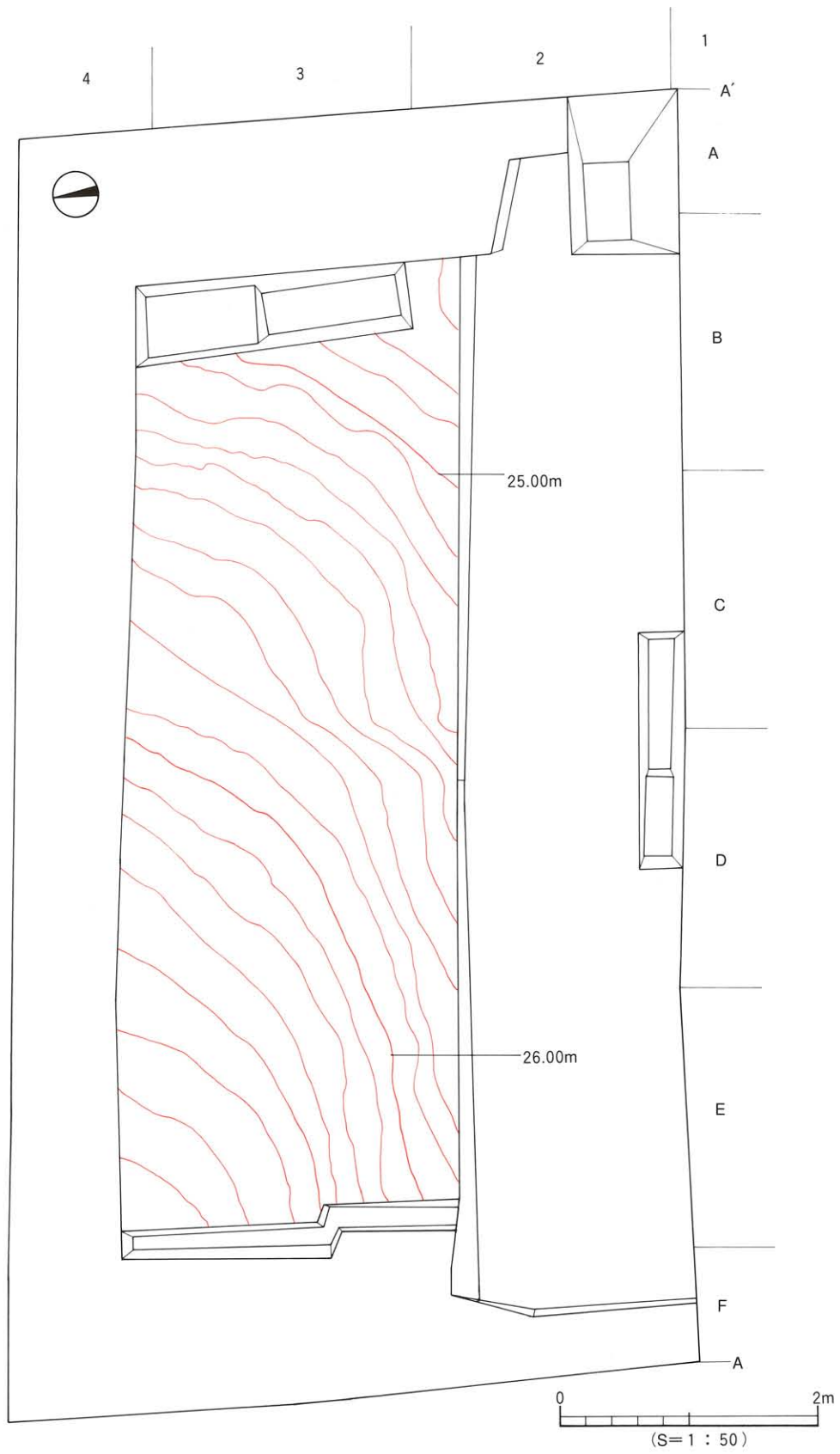
3②層出土遺物(第11図)

須恵器(6～8) 6は長頸壺の肩部片で、肩部は強く屈曲する。内・外面とも回転ナデ調整される。7は壺の肩部の小片である。一条の沈線と刺突文が見られる。8は甕の口縁部片で、断面はやや方形状を呈し端部は内方向へ屈曲させる。

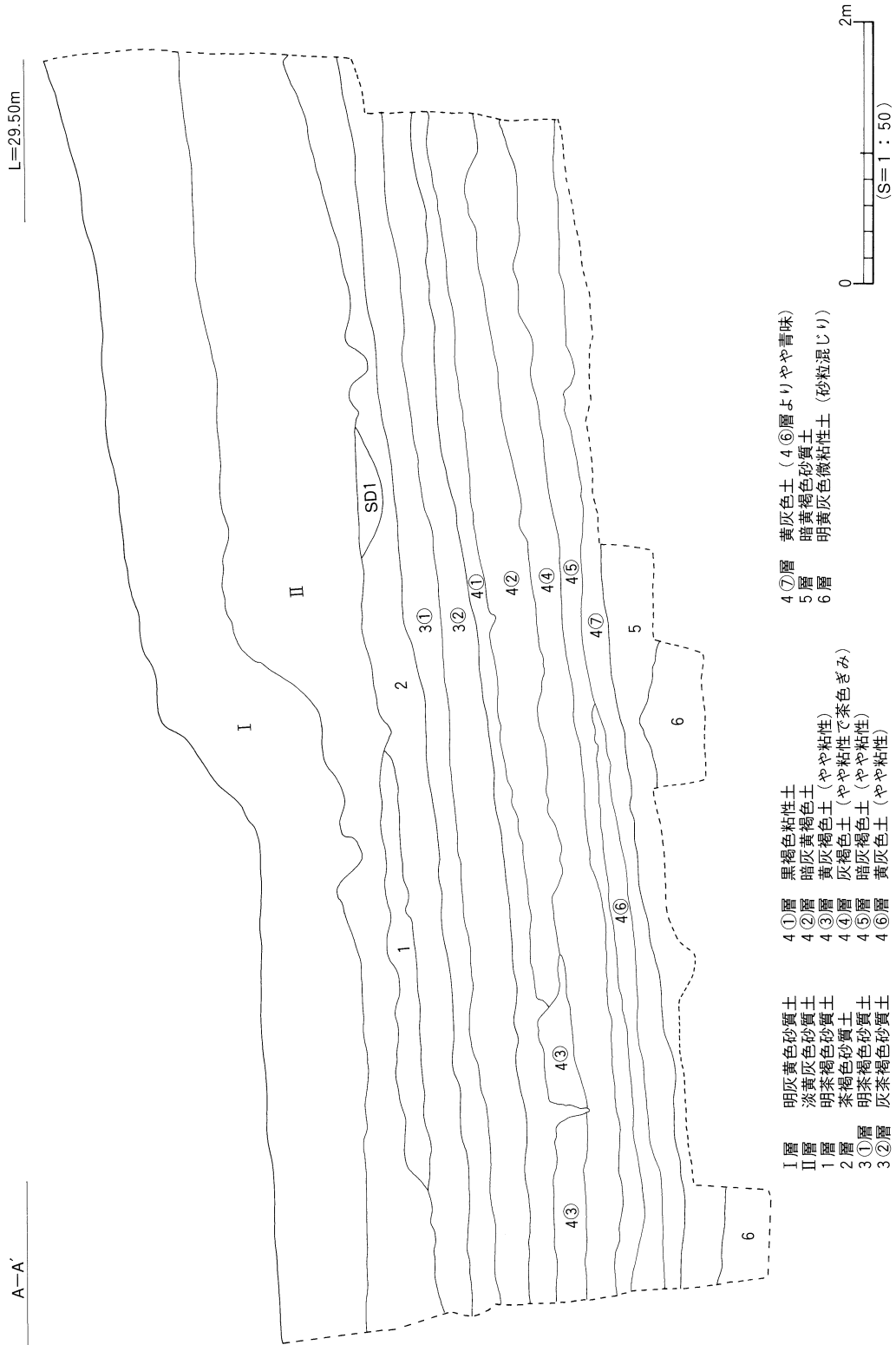
弥生土器(9) 甕の胴部の小片で、沈線文(2条以上)と刺突列点文が施される(弥生時代前期)。

3) 4層検出の遺構と遺物

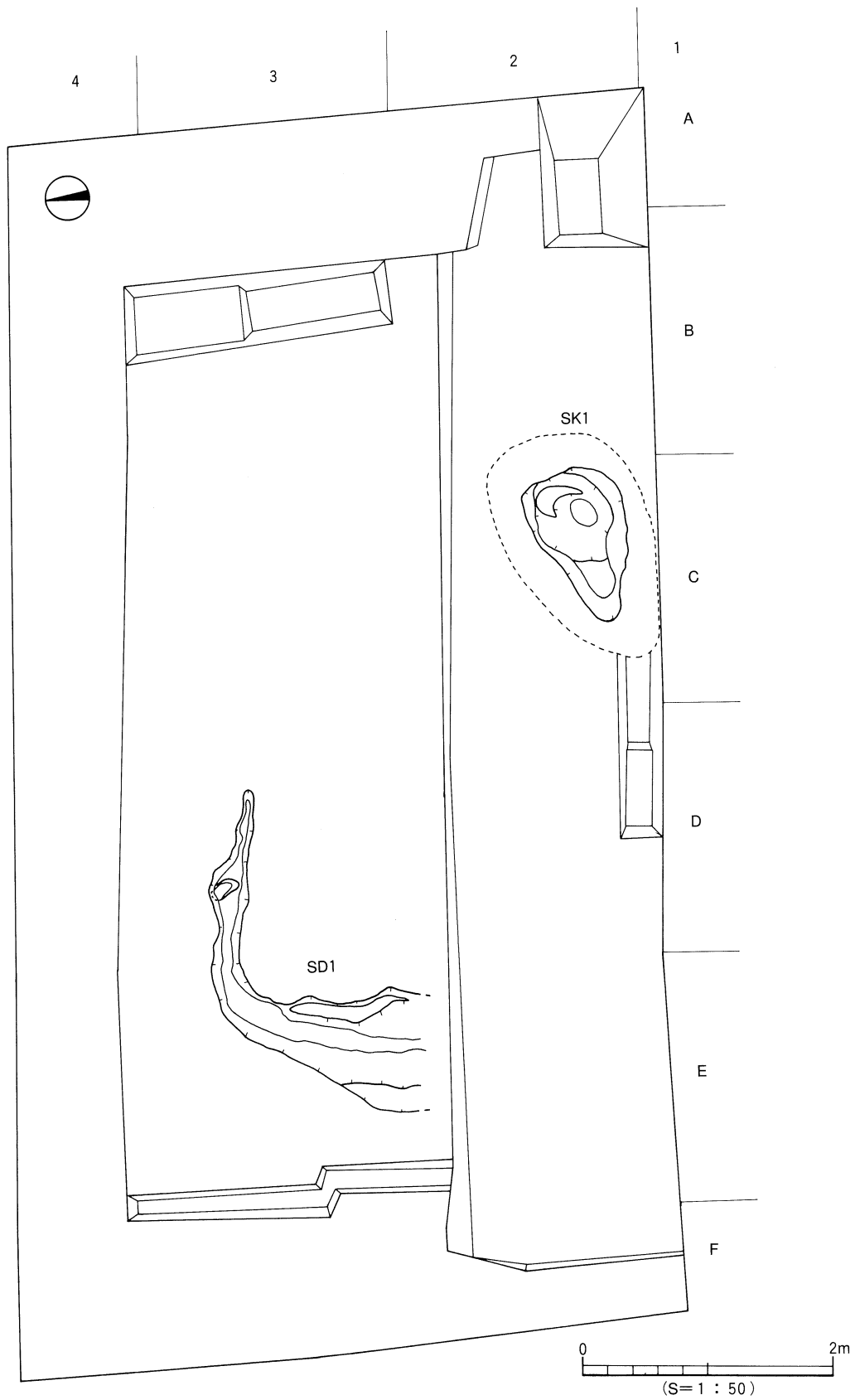
4層では上面より土坑(SK)1基を検出している。SK1は4①層上面で遺物の密集が見られ遺構の存在は確認出来たが、遺構の掘り方が不明瞭であったため、遺構の調査は4②層上面で行った。



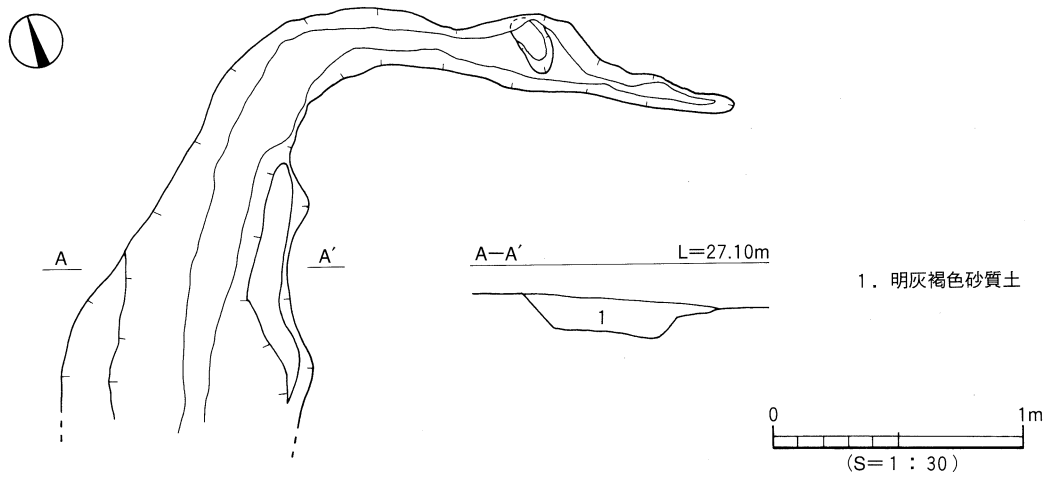
第6図 B区測量図



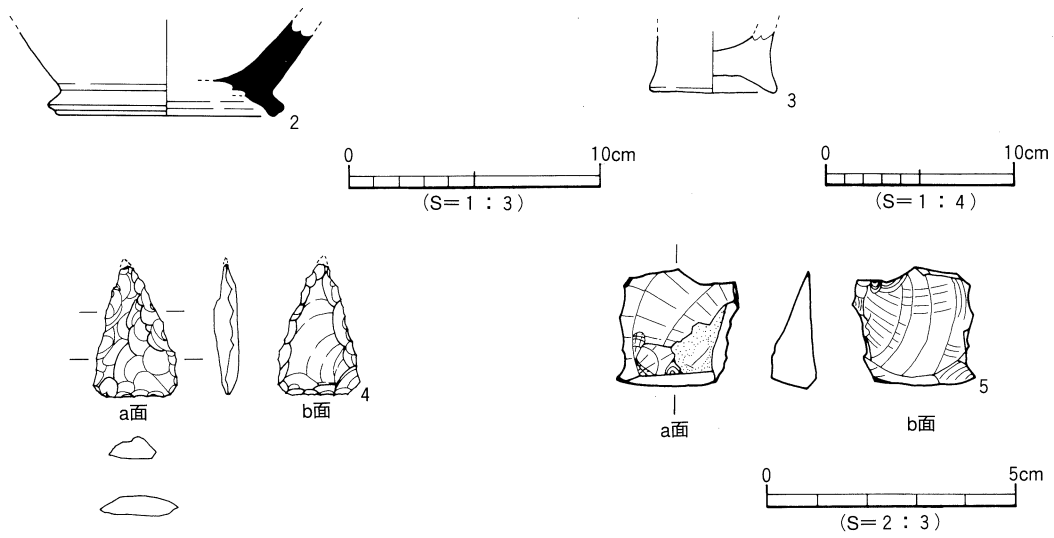
第7図 B区南壁土層図



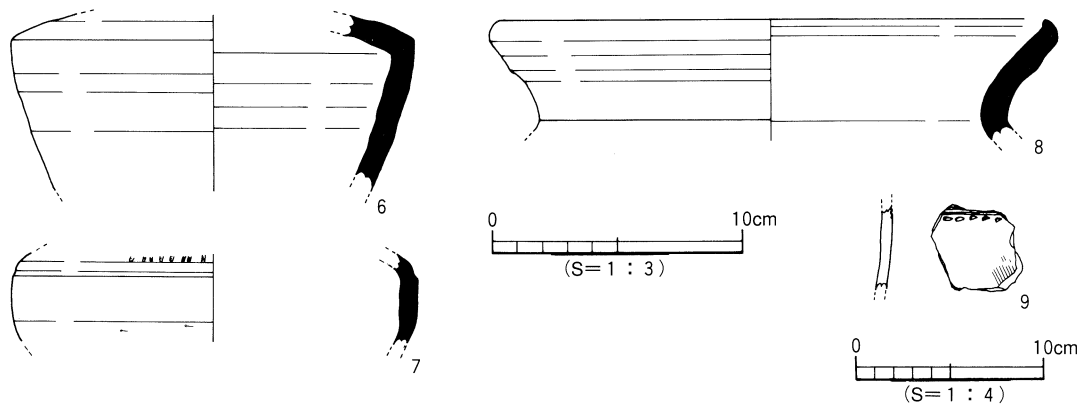
第8図 B区遺構配置図



第9図 B区SD1測量図



第10図 B区3①層出土遺物実測図



第11図 B区3②層出土遺物実測図

SK 1 (第12図、図版15)

調査区南東部のC 2区で検出した。平面形は不整な楕円形、断面形は南北方向で楕円状を呈する。規模は長さ124cm、幅77cm、深さ46cmを測る。埋土は濃青灰色粘性土(やや黒味)である。遺物は土師器、弥生土器が出土した。埋土上位からの出土が多く、10cm大の礫石と混在した状態であった。

出土遺物 (第13図、図版23)

土師器(10~13) 10~13は壺形土器である。10は球形の胴部を持つものと考えられる。緩やかに外反する口縁部で端部は尖る。頸部内面に接合痕が顕著に残る。11の口縁部は外傾するがやや内湾する。端部内面は突出する。13の口縁部は直線的に外傾する。器壁は薄い。弥生土器の甕形土器とも考えられる。

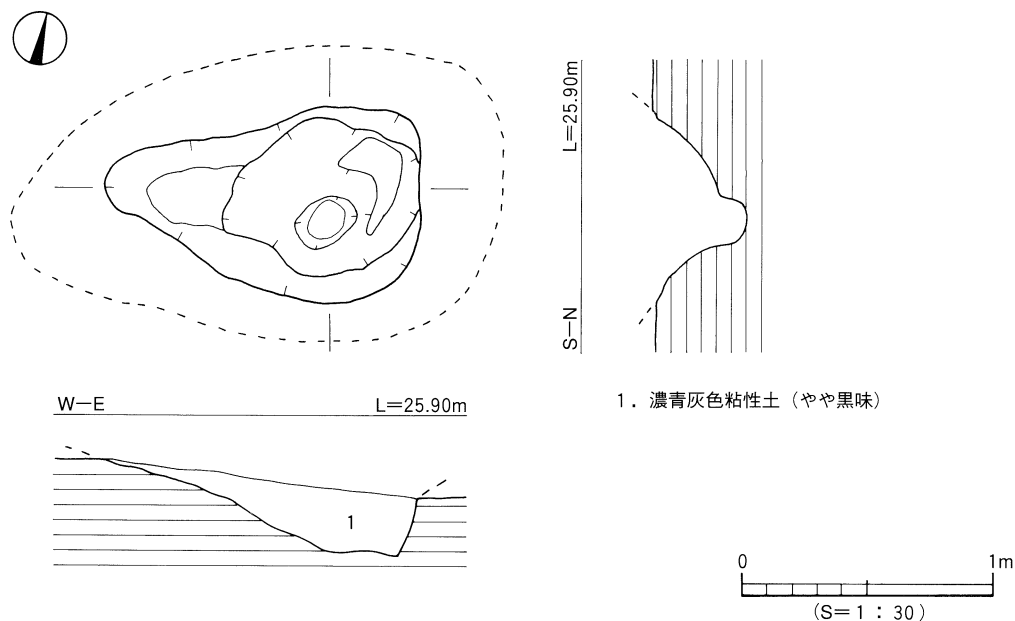
弥生土器(14~22) 14~17は弥生時代後期に、18は弥生時代前期に、19~22は、中期に比定される。14は甕形土器で、外反する口縁部は外面に面をもち内面は凹む。肩部は張るものと思われる。15~17は壺形土器で15・16は複合口縁で拡張部はやや内傾する。17は肩部片で器壁は薄い。18~20は甕形土器で、18は折り曲げ口縁で端部下端に刻目、頸部に沈線5条(以上)を施す。19・20はやや上げ底を呈する底部である。21・22は壺形土器で、21は外反する口縁部で端部に沈線、その後刻目を施す。21・22はともに口縁部内面に凸帯が付く。

時期：出土土師器の形態より古墳時代中期に位置づけられる。

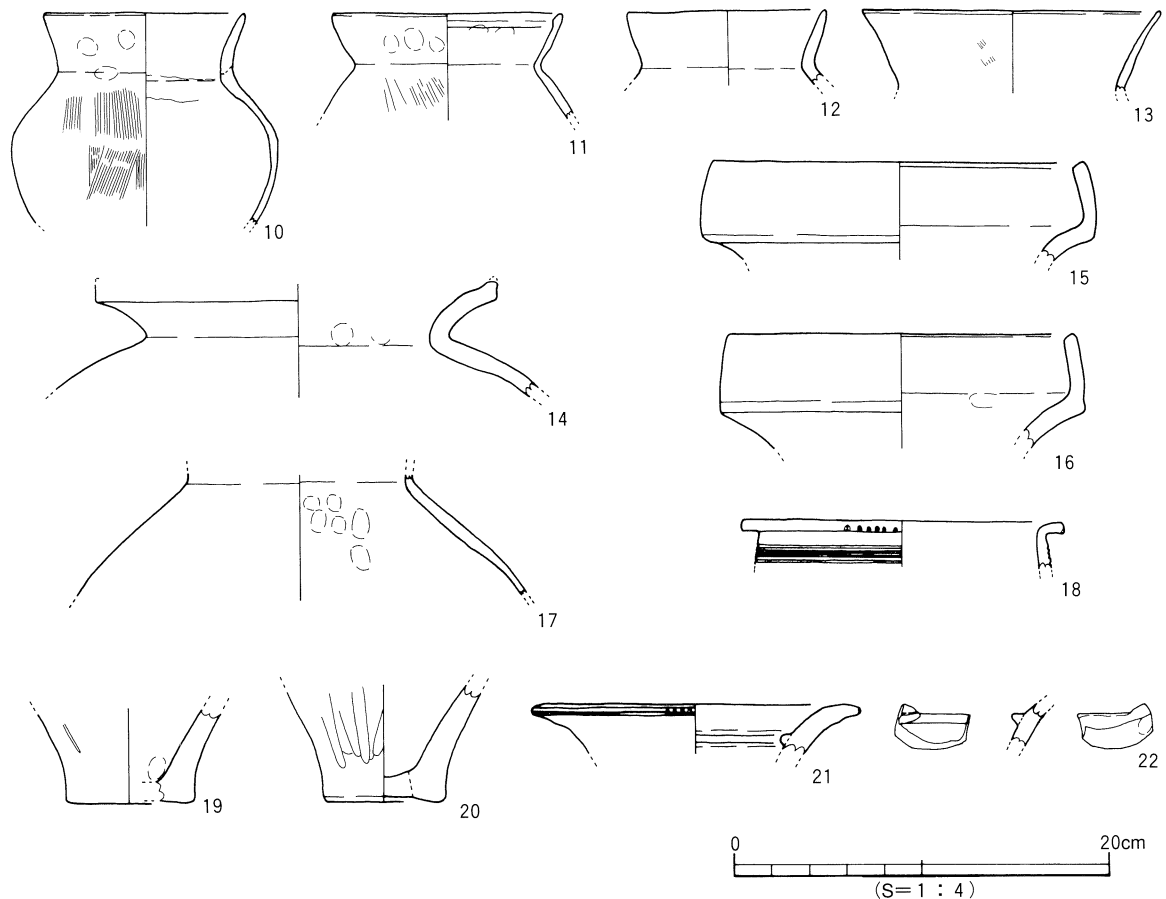
4 ①層出土遺物(第14図、図版23)

23~32は弥生土器である。前期~中期に比定される。

甕形土器(23~27) 23は口縁部下に凸帯をもつ。凸帯は指頭押圧後さらに刺突文を加える。口縁端部は上面に面をもつ。24・25は頸部片で、24は沈線6条(以上)が施される。25は貼り付けの口縁部と考えられるもので施文はされない。26・27は上げ底の底部である。



第12図 B区SK 1 測量図



第13図 B区SK1出土遺物実測図

壺形土器(28~31) 28は外反する口縁部で端部は外面に面をもつ。29~31は平底の底部で、29はやや突出気味である。

高杯形土器(32) 32は口縁部片で端部は内外方に肥厚させる。

4②層出土遺物(第15図、図版23)

33~60は弥生土器である。33~48は弥生時代中期に、49~60は前期に比定される。

甕形土器(33~39) 33・34は比較的長い口縁は水平に近い状態で付く。頸部に断面三角形の凸帯が巡る。33と34は貼り付け口縁と考えられる。35・36は短く折り曲げられる口縁部のものである。37~39は上げ底を呈する底部で、37は突出気味、38はくびれ気味、39はくびれをもつものである。

壺形土器(40~48) 40・41は口縁部片で40の端部は上下に肥厚、41は下端がナデにより下垂する。42~44は頸部片で、42は指頭押圧された凸帯が巡る。43・44は内面に凸帯が付く。45~48は平底の底部で45・46は若干突出する。

甕形土器(49~56) 49・50は貼り付け口縁で口縁端部は刻目文が施される。49の頸部は6条の沈線文と7条(以上)の沈線文の間に2条の刺突文が巡る。50の頸部は3条(以上)の沈線文が巡る。51は折り曲げ口縁で施文は施されない。52・53は頸部片で52は折り曲げ口縁と思われる。4条(以上)の沈線文が施される。53は4条(以上)の沈線文下に刺突文が施される。54~56は平底の底部であるが、わずかに上げ底を呈する。54は焼成後穿孔され甑に転用。

壺形土器(57~60) 57は頸部から肩部にかけての破片と思われるもので、段が付く。58は指頭押圧された後に刺突文が施された2条の凸帯の上下に沈線が施されるものである。59は平底、60は若干上げ底の底部である。

4 ③層出土遺物 (第16図、図版23)

61~65は弥生式土器である。61は弥生時代前期に、62~65は中期に比定される。

甕形土器(61) 61は頸部片で6条(以上)の沈線文が施される。

壺形土器(62~64) 62は外反する口縁部で端部は外方に面をもつ。63・64は外方に面をもち、下端が肥厚する。

高杯形土器(65) 65は坏口縁部片で端部は内外方に拡張し、外端面に刻目を施す。器面は内・外面とも細かいハケで丁寧に仕上げられる。

4 ⑤層出土遺物 (第17図)

66~81は弥生式土器である。67~69、76、78は弥生時代前期に、他は中期に比定される。

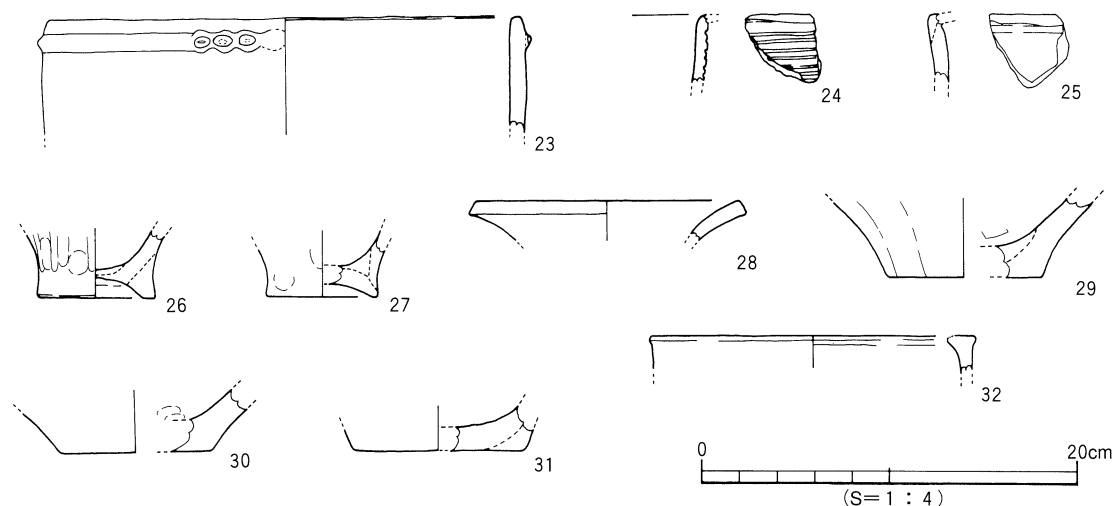
甕形土器(66~72) 66は貼り付け口縁で端部は刻目を施す。頸部は刻目が施された断面三角形の凸帯が巡る。67は折り曲げ口縁で、端部、頸部とも施文は施されない。68は貼り付け口縁で端部に刻目、頸部に12条の沈線が施される。69は7条(以上)の沈線が施される。70はくびれをもつ上げ底、71はやや上げ底、72は平底の底部である。

壺形土器(73~81) 73は外反する口縁部で端部は丸くおさめる。内面に断面三角形の凸帯が付く。74は水平まで開く口縁部で端部は外面に面をもつ。75は面をもつ口縁部片で端部下端が肥厚する。76~78は頸部片で、76は沈線、77は指頭押圧後刺突文が施された凸帯、78は5条(以上)の沈線が巡る。79~81は平底の底部である。

4 ⑥層出土遺物 (第18図)

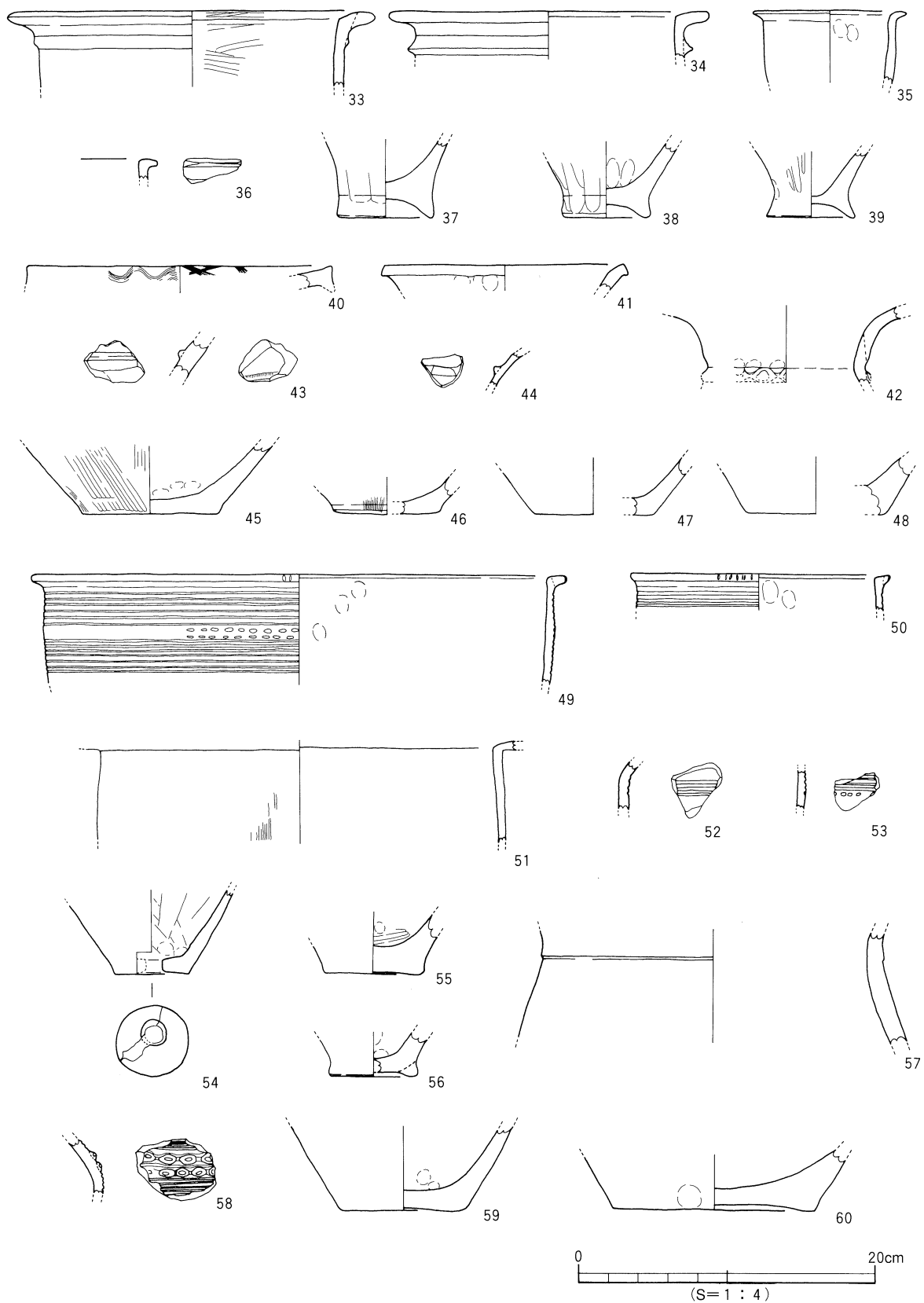
82~86は弥生土器である。

甕形土器(82~84) 82は折り曲げ口縁で、端部に斜格子文を施す。83は頸部片で4条(以上)の沈線が施される。84は平底の底部片。

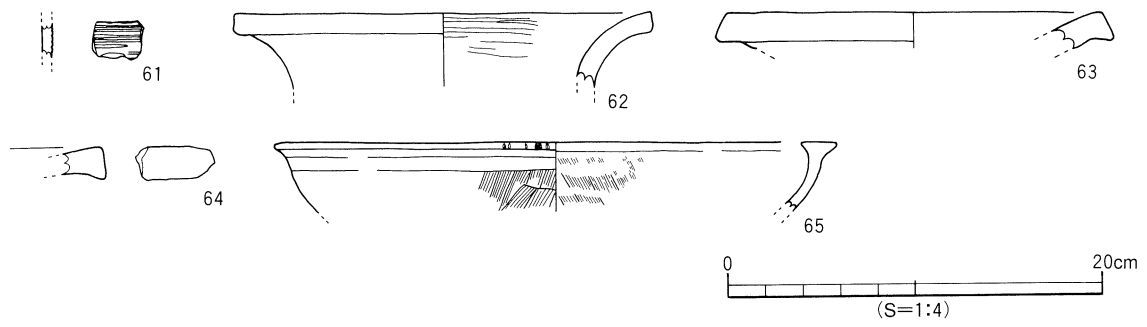


第14図 B区4①層出土遺物実測図

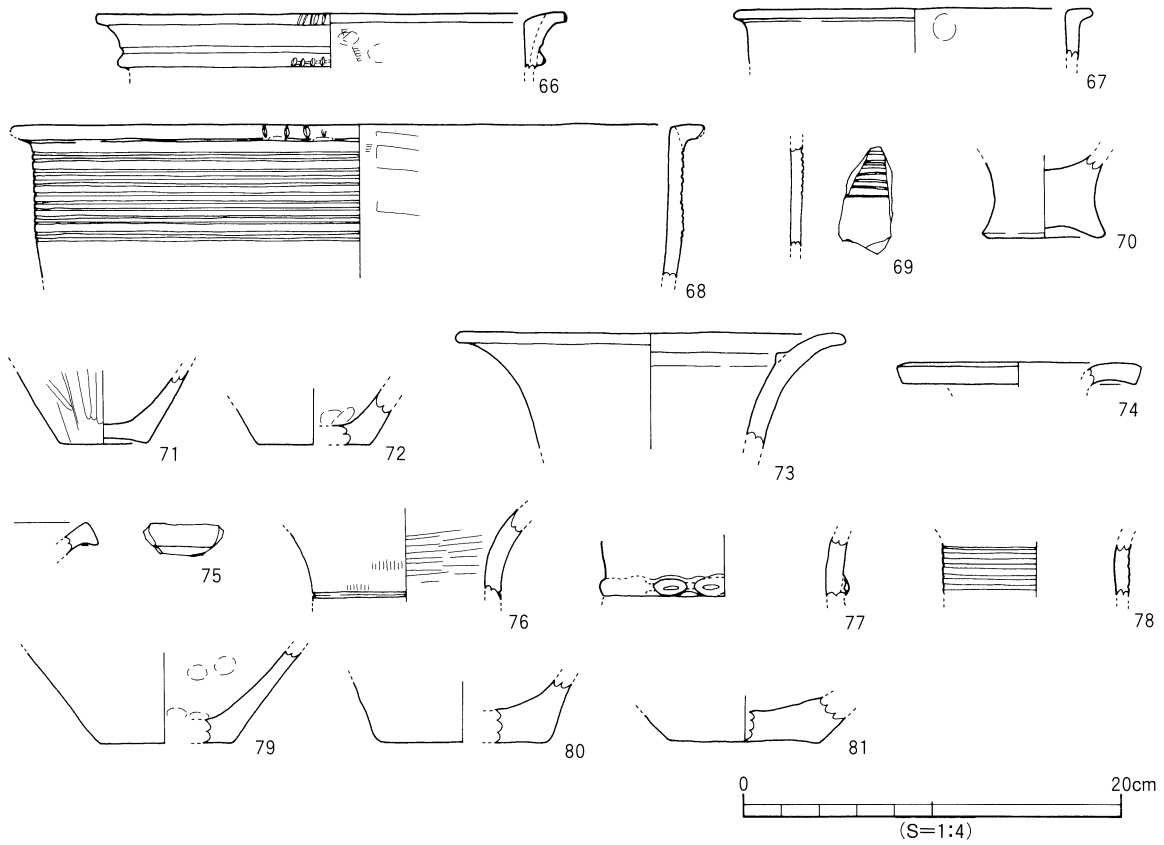
遺構と遺物



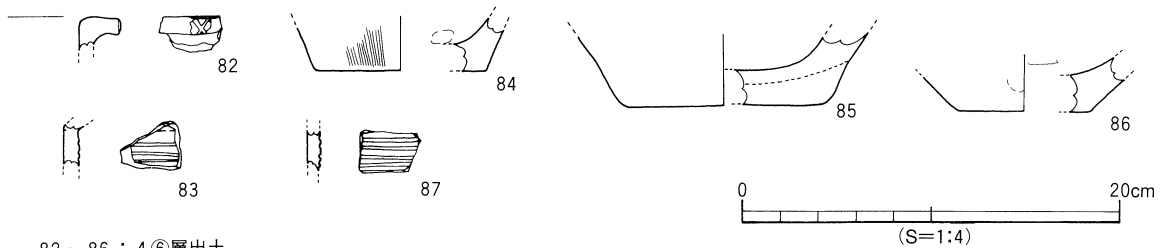
第15図 B区4②層出土遺物実測図



第16図 B区4③層出土遺物実測図



第17図 B区4⑤層出土遺物実測図



82～86：4⑥層出土
87：4⑦層出土

第18図 B区4⑥・4⑦層出土遺物実測図

壺形土器(85・86) 85・86は平底の底部で、85はやや突出する。

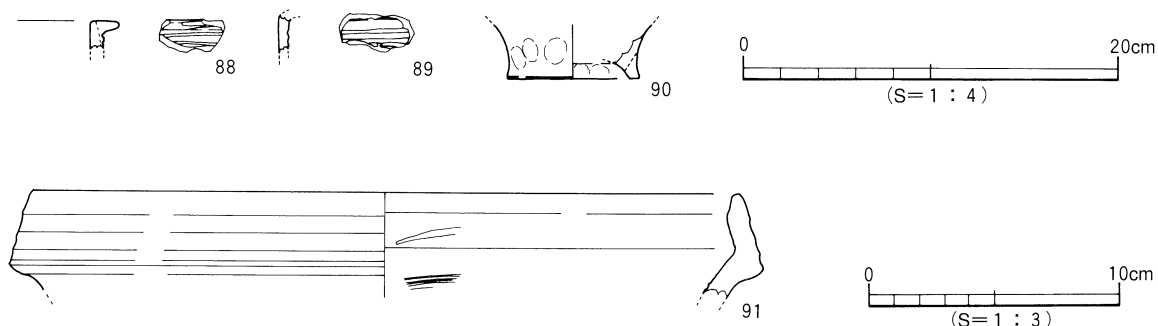
4 ⑦層出土遺物(第18図)

弥生土器(87) 87は甕形土器の頸部片で5条(以上)の沈線が施される。

4) B区出土遺物(出土層位不明、第19図)

弥生土器(88~90) 88~90は甕形土器である。88は貼り付け口縁で頸部に2条(以上)の沈線が施される。89は頸部片で3条(以上)の沈線が施される。90は上げ底の底部で若干くびれをもつ。88・89は弥生時代前期、90は中期に比定される。

陶器(91) 91は備前焼播鉢の口縁部片でやや内傾する口縁部は外面に3条の凹線状のナデがみられる。16C代。



第19図 B区層位不明遺物実測図

(3) C区 (第20・21図、図版16・17)

C区では第(5)層上面にて土坑(SK)2基、溝(SD)3条を検出した。

C区は、調査地北端部の既存農道の北部及び南部に位置する。この部分は東方へ延びる尾根上の傾斜変換点にあたる。調査区はT23と24の北部分を含めるように設定した。調査区の規模は南北約15m、東西約12mを測るが既存農道部分は使用するため未調査となった。尚、調査にあたり調査区を4m四方のグリッドに分けた。

土坑

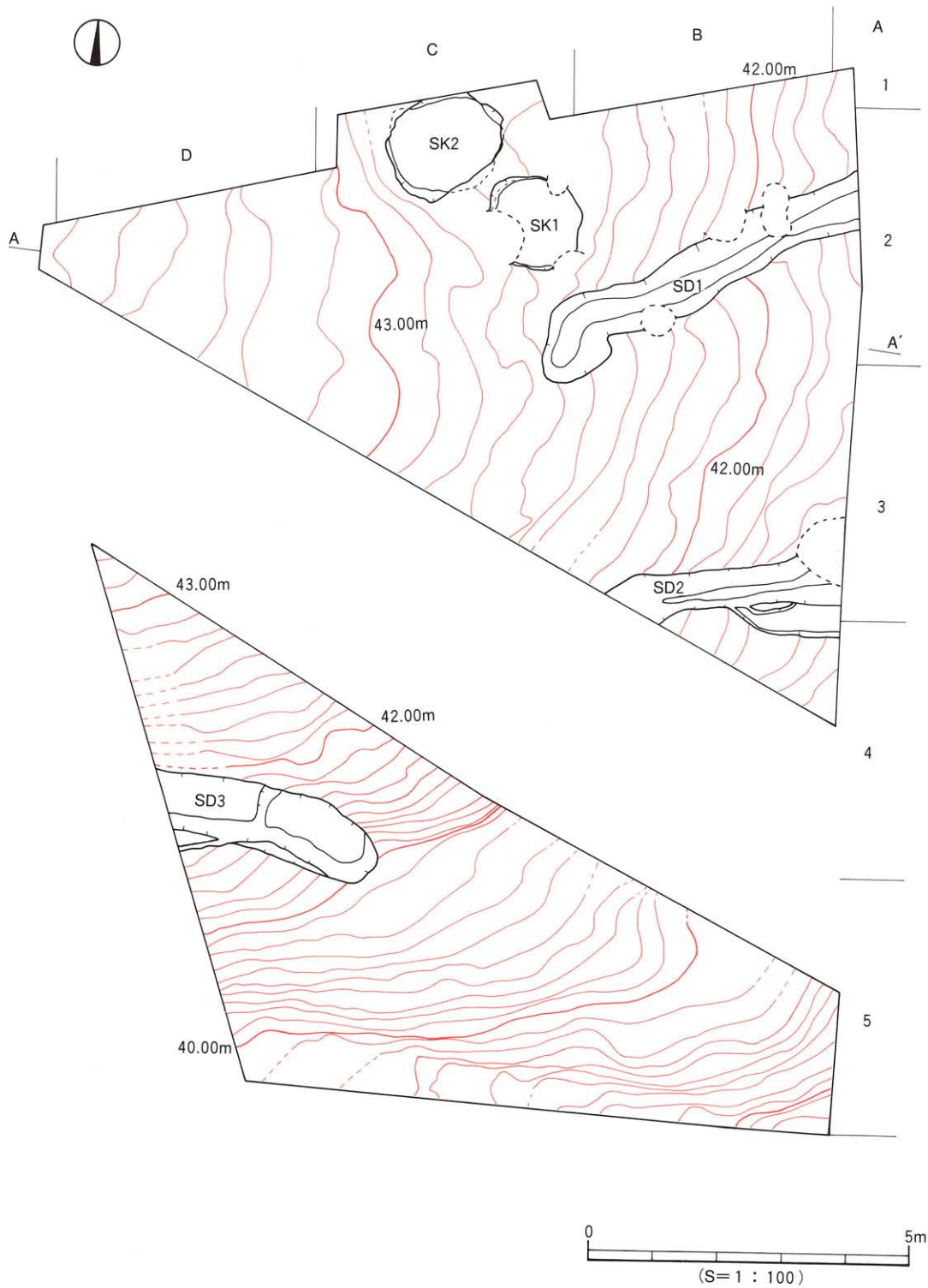
SK1 (第22図、図版18)

調査区北部C2区で検出した。SK2の南東に隣接する位置である。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。土坑の基底面はほぼ平坦である。規模は径140~143cm、深さ37cmを測る。埋土は3層に分層される。1層黄褐色砂質土(硬い)、2層茶褐色土(黒褐色土混じり・硬い)、3層黄茶褐色土である。遺物は弥生土器、炭化物、焼土、サヌキトイドの剥片、川原石、礫石が出土した。弥生土器は甕形土器、壺形土器の破片が1~3層中より、炭化物は1~2cm大の大きさのもので、1層中の北部に集中して出土した。焼土は7×8cm大が1層より、4×2cm大が2層より、中央やや南寄り出土した。剥片は0.5~2cm大が、川原石は1~2cm大のものが、ともに1~3層中の北部に集中して出土した。礫石は南壁際の1層中より1点出土した。参考品として図化を行った。

出土遺物(第23図、図版23)

弥生土器(92~93) 92は甕形土器の口縁部片で、折り曲げ口縁は端部に刻目文が施されるが全周は回らない。頸部は上段より6条の沈線文、1条の刺突文、4条の沈線文、最下段に1条の刺突文を施

太山寺経田遺跡 2次調査



第20図 C区測量図・遺構配置図

す。93・94は壺形土器で、93の頸部には3条(以上)の沈線文が施される。94はやや立ち上がりを持つ平底の底部である。

参考品(95) 95は砂岩礫で大きさは長さ11.8cm、幅7.9cm、厚さ3.4cm、重量510gを測る。使用痕、加工痕は認められない。

時期：出土遺物から弥生時代前期の遺構と考える。

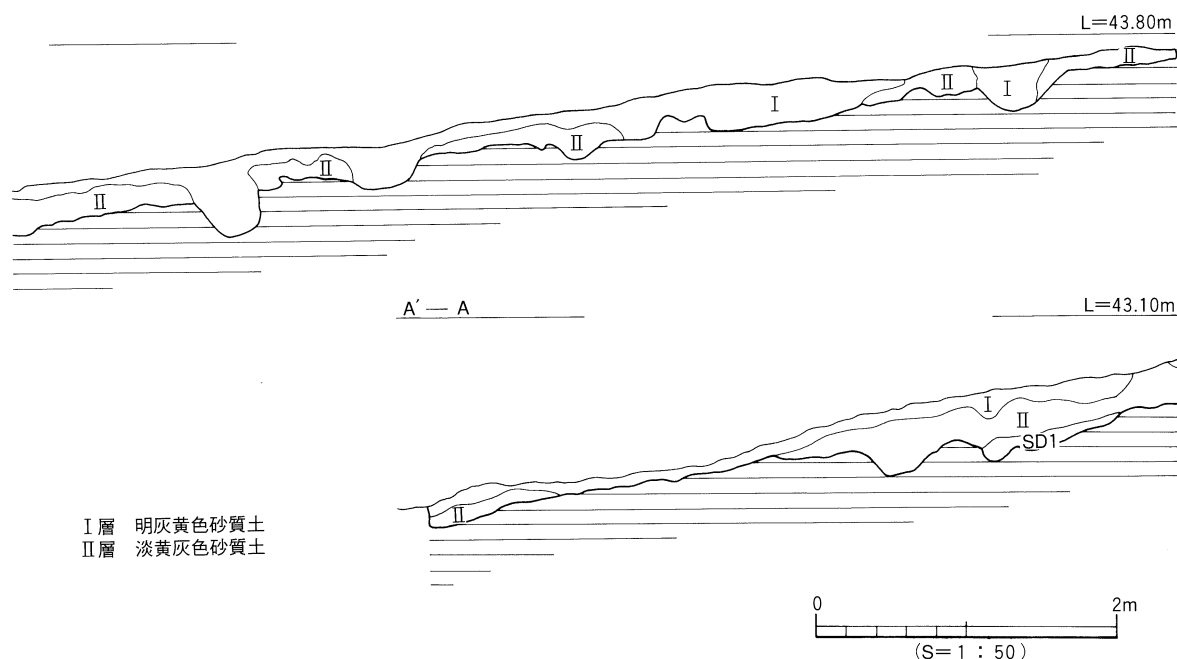
SK 2 (第24図、図版19・20)

調査区北部のC 1・2区に位置する。平面形状は楕円形、断面形状は袋状を呈する。土坑の基底面はSK 1と同様平坦である。規模は径150~181cm、深さ101cmを測る。埋土は5層に細分される。1層黄褐色砂質土(硬い)、2層明黄褐色砂質土(炭化物混じり・硬い)、3層明黄褐色粗砂質土(柔らかい)、4層黄茶褐色砂質土(柔らかい)、5層茶褐色砂質土(柔らかい)である。遺物は弥生土器、炭化物、焼土、サヌキトイドの剥片、川原石、礫石が散在して出土したがやや東半部に多い。弥生土器の出土量はSK 1より多い。器種は甕形土器、壺形土器がある。1・5層から集中して出土したが3・4層からの出土はない。炭化物は1層中からは1~2cm大のものが、2層中からは長さ16~20cm、幅6cmを測る大きいものが2点出土した。焼土は2層より、4~10cm大の大きさのものが密集した状態で炭化物の横より出土した。剥片は2×3cmの大きさのものが1層より1点、川原石は1~3cm大の大きさのものが1・2層より5点出土した。礫石は2層より1点出土した。調査地及び周辺地で見られる花崗岩で大きさは長さ21cm、幅12cm、厚さ6.5cm、重量は2100gを測る。使用痕、加工痕は認められない。

出土遺物(第25図、図版23)

96~104は弥生土器である。

甕形土器(96~100) 96・97は貼り付け口縁のもので、96は口縁端部下端に刻目文を、頸部に13条



第21図 C区土層図

の沈線文を施す。97は頸部に14条の沈線文を施す。98は口縁部片でやや内傾するものである。99は2条(以上)の沈線文下に刺突文を施す。100は平底の底部である。

壺形土器(101~104) 101・102は肩部片で、101は沈線文1条が、102は有軸羽状文が施される。103・104は平底の底部で、103はやや立ち上がりを持つ。

時期：出土遺物から弥生時代前期と考える。

溝

SD 1 (第26図、図版21)

調査区北東部のA 2~C 3区に位置する。東西方向ではあるがやや北に偏る。規模は上場幅90cm、深さ8~33cm、検出長5.6mを測る。断面形状は楕円状を呈する。埋土は黄褐色砂質土の単一層である。遺物は石製品が溝東端より出土した。土器の出土はない。

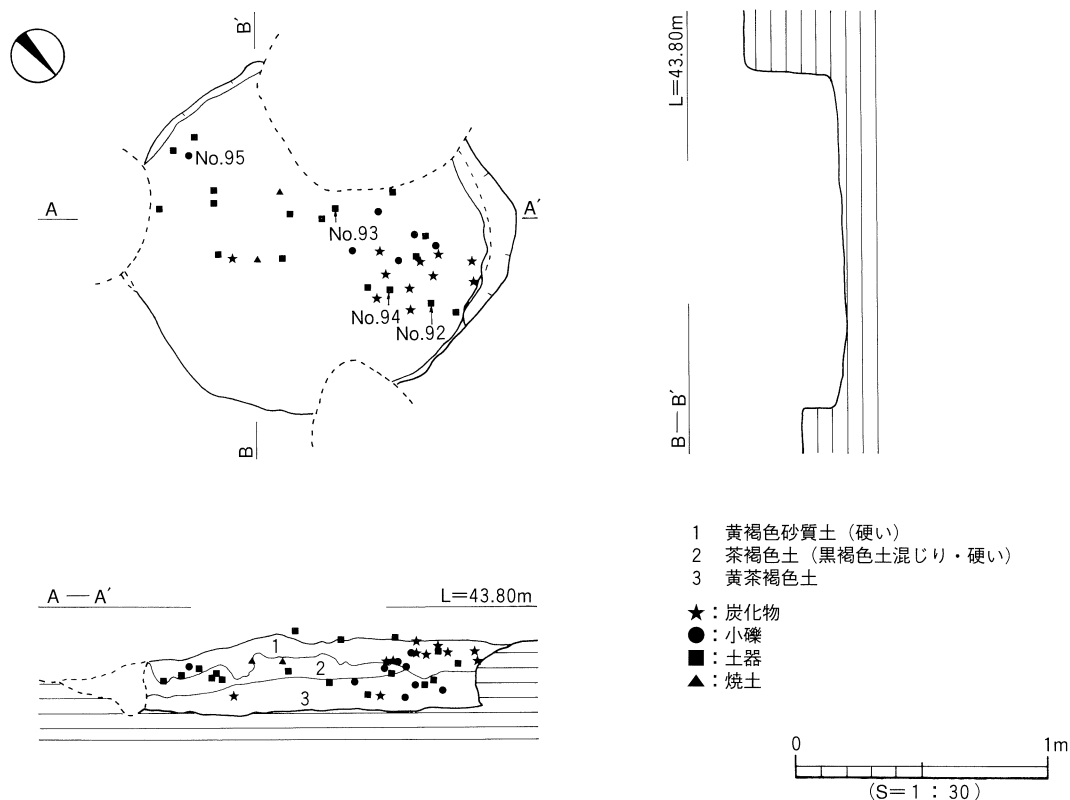
出土遺物(第26図、図版23)

105は打製石鏃で2/3程度の残存である。a・b面とも素材面が残り縁のみ細部調整される。法量は残存長2.7cm、幅1.1cm、重量は0.42gを測る。石材はサヌキトイドである。

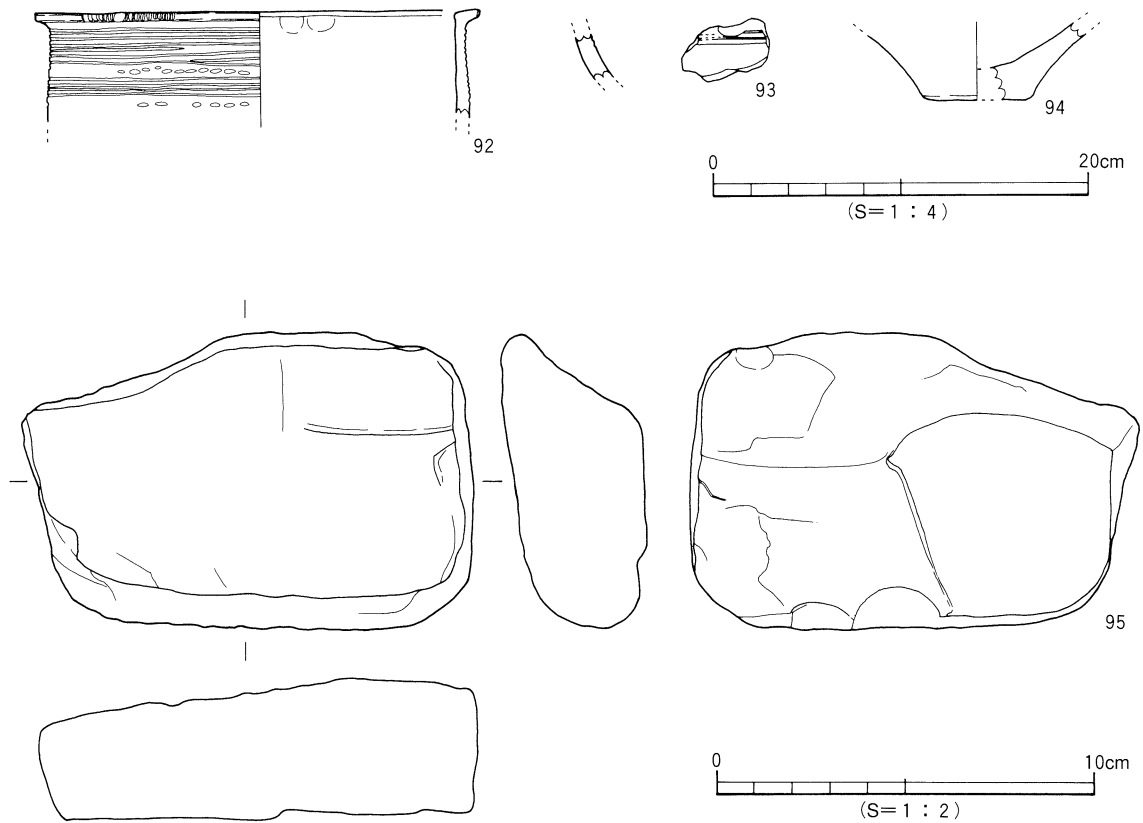
時期：石鏃が出土したこと、埋土より弥生時代の遺構と考えられる。

SD 2 (第26図、図版21)

調査区中央東寄りのB 3・4区に位置する。方向はほぼ東西方向である。規模は上場幅58~126cm、深さ10~18cm、検出長3.2mを測る。断面形状はレンズ状を呈する。埋土は2層に分層される。1層



第22図 C区SK 1 測量図



第23図 C区SK1出土遺物実測図

明黄灰色砂質土、2層明黄色砂質土である。遺物は1層より5～20cm大の角礫が出土したが、西、東端部では出土しなかった。土器の出土はない。

時期：埋土より近・現代遺構と考える。

SD3 (第26図、図版22)

調査区南西部のC4～D4に位置する。東西方向ではあるがやや南に偏る。規模は上場幅1.2m、深さ1m、検出長3.5mを測る。断面形状は「U」字状を呈する。埋土は、1層淡黄色土、2層乳灰色砂(礫混)である。遺物は2層より10～20cm大の角礫多数出土した。この角礫の混入は、溝と同じ方向に岩脈があり畑地造成時にこの岩脈を掘削し埋め戻したものと考える。

時期：埋土より近・現代遺構と考える。

(4) トレンチ内出土遺物 (第27図)

T1出土(106・108) 106は黒灰褐色土(包含層)より出土した。弥生土器の高杯形土器である。口縁端部は内外方に拡張し、外端面に刻目を施す(弥生時代中期)。108は第I層より出土した。須恵器の甕形土器である。外反する口縁部は端部を折り曲げ玉縁状におさめる(6C末～7C初頭)。

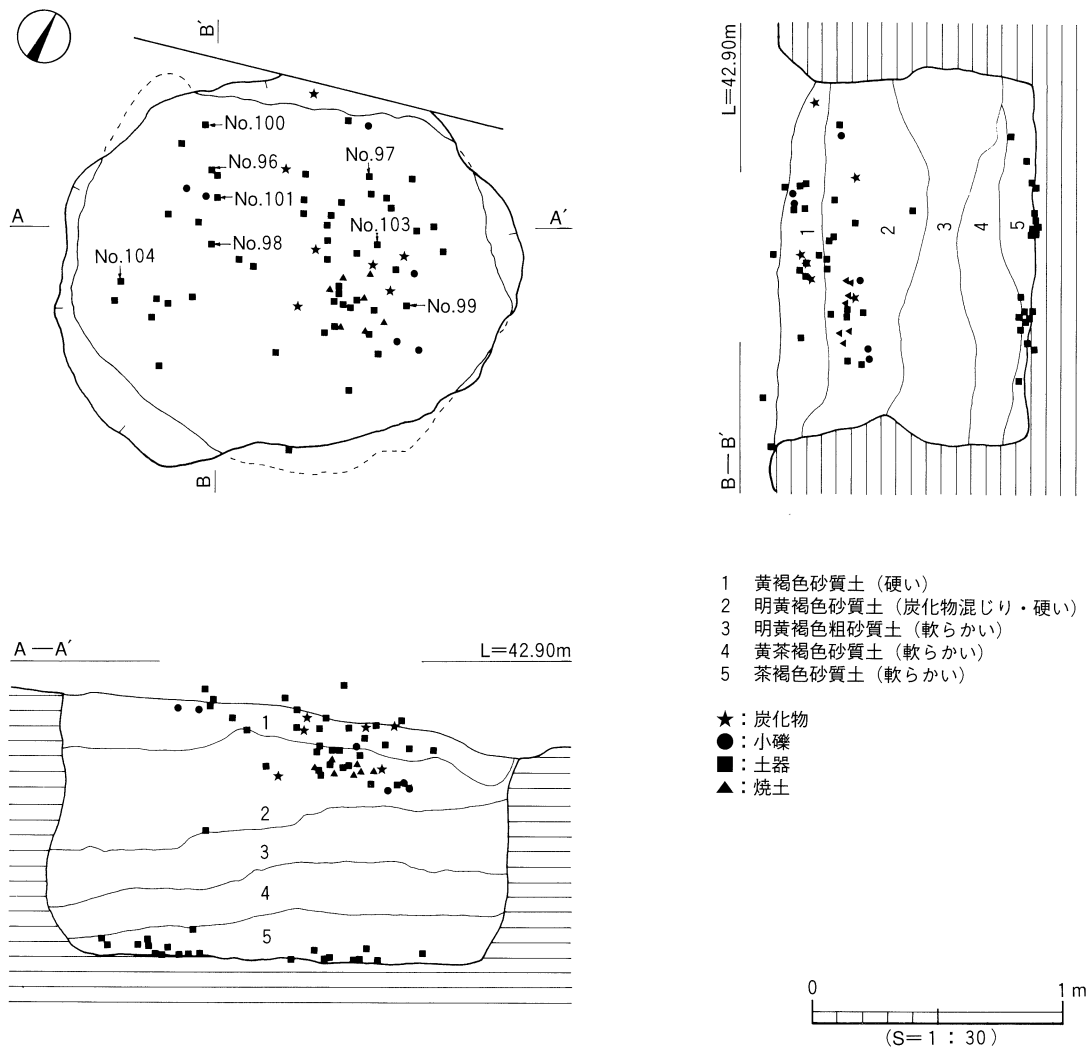
T11出土(107) 107は第I層より出土した。須恵器の杯身である。立ち上がりは内傾し、端部は尖る。受け部は外方へ延びる(6C末～7C初頭)。

4. 小結

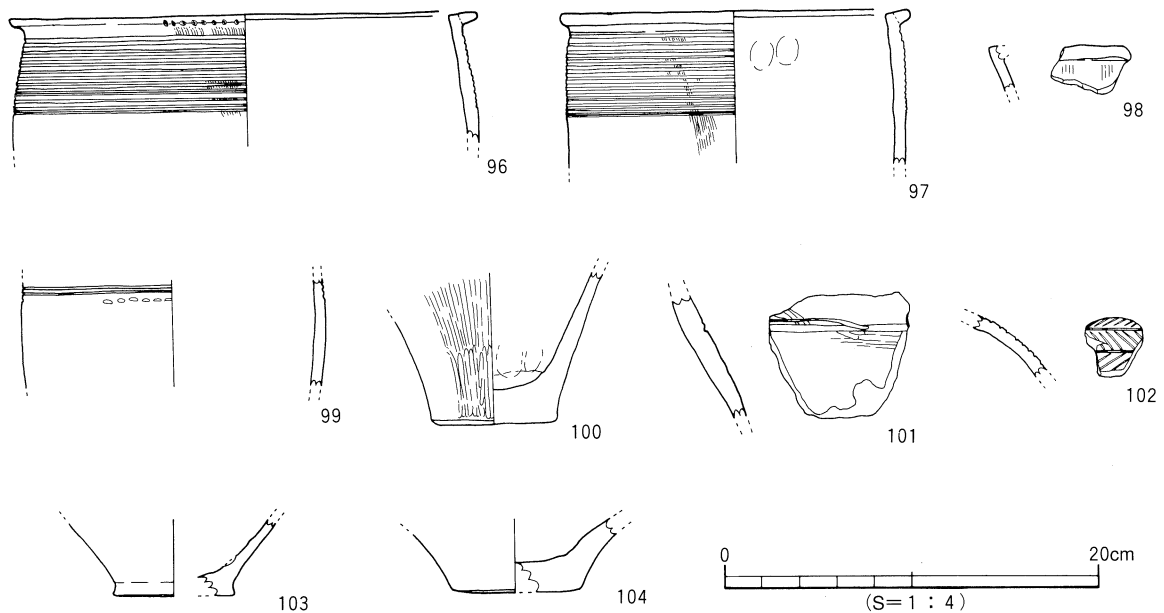
今回の調査では調査の目的の一つである古墳の検出はされなかった。しかし、弥生時代から近・現代に至る遺構、遺物を検出することができた。

(1) A区

礫石密集部は、調査地及び周辺地でみられる花崗岩が密集したもので、礫石中より縄文土器片が出土したが、このような遺構の検出は他に類例がないため、比較検討ができなく、今回の調査では性格時期ともに明確にできなかった。調査地周辺及びA区の西上方の尾根上には数基の古墳の存在が確認されている。これら古墳との関連性の有無、或いはそれ以前の祭祀にまつわる遺構なのか、解明は以後の調査による課題となった。



第24図 C区SK 2 測量図



第25図 C区SK 2 出土遺物実測図

(2) B区

古代

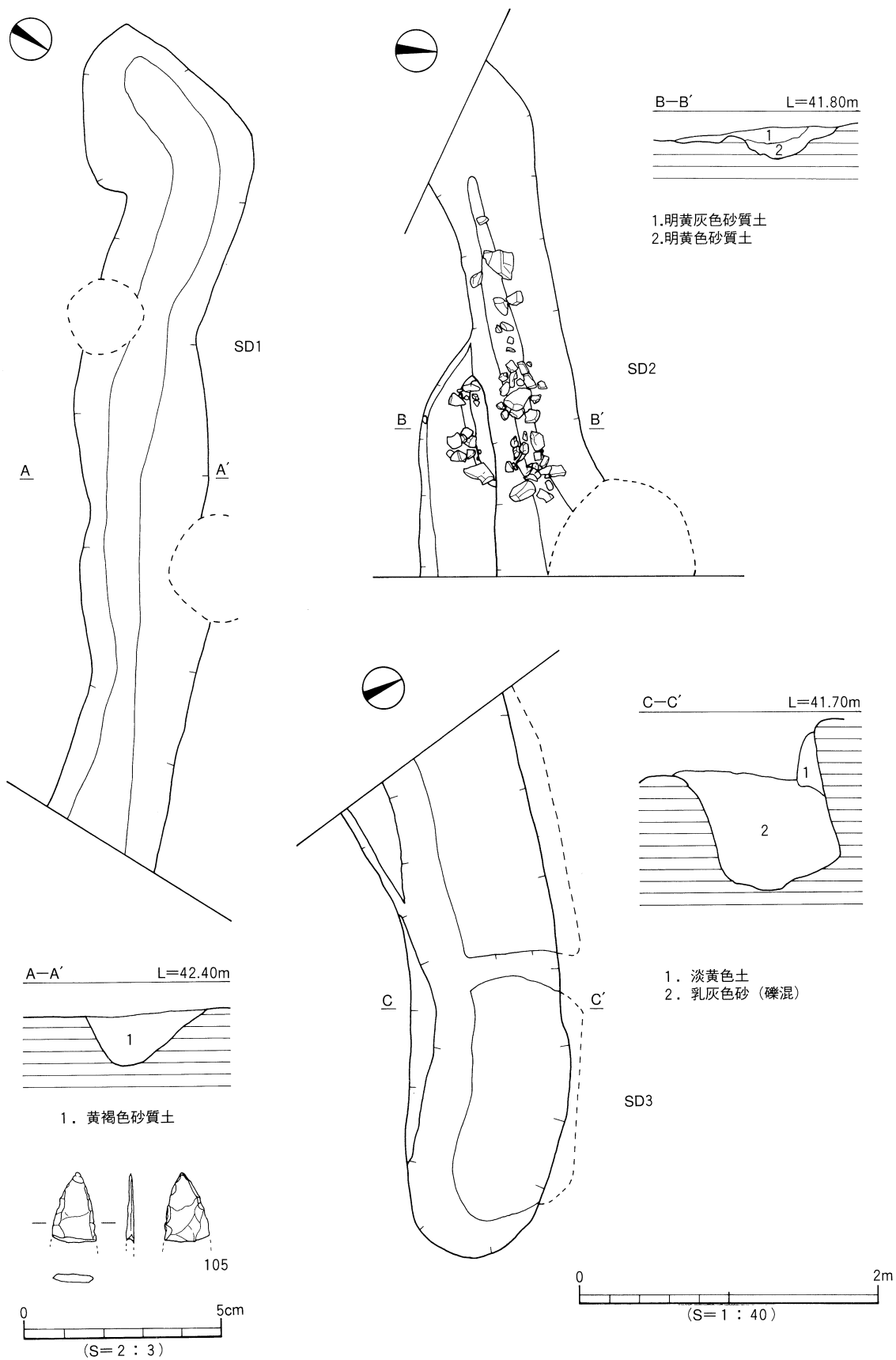
古代の遺構は検出されていないが、3層より遺物が出土したことは、古代に於いて何らかの土地の利用がされたものと考えられる。

古墳時代

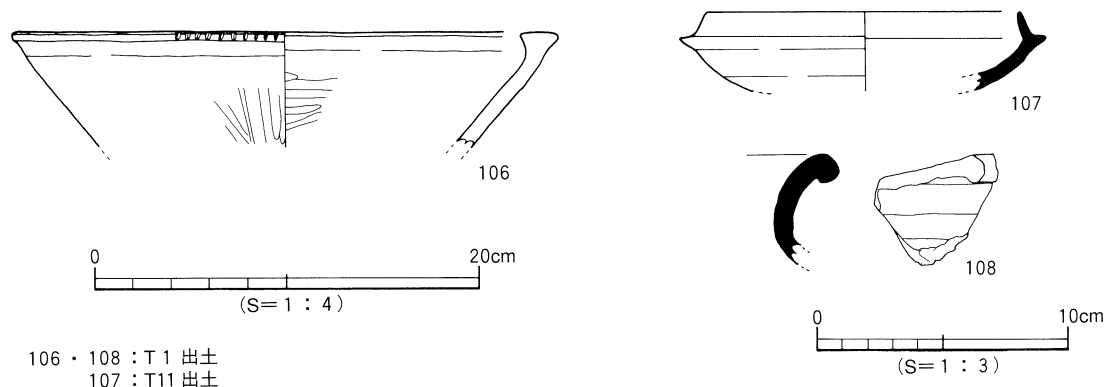
4層上面にて検出された土坑1基は、遺構の性格は不明であるが、出土遺物から古墳時代中期に位置づけられる。1次調査地で検出された遺構より新しい時期のものであるが、同時代の遺構の検出は1次調査地の遺跡の範囲の一部と考えられる。しかし、遺物の出土状況、遺構の残存状況、近現代の耕作地整備時の削平を強く受けていることなどから遺構は少ないと考えられる。

弥生時代

4層から出土した弥生土器の甕形土器は、口縁部はL字状を呈し端部に刻目、頸部に多条沈線文、刺突列点文が施されるもの、断面三角形の凸帯が付くものがみられた。底部は若干立ち上がりをもつ平底、くびれの上げ底のものであった。壺形土器は、口縁端部はやや肥厚されるもの、口縁内面に凸帯が付くもの、頸部には凸帯、沈線文が、底部は平底と若干上げ底のものでみられた。これらの土器は弥生時代前期末から中期中葉に比定されるものである。これらの遺物の出土から、出土状況が谷間地形に流入、堆積したものであること、北側尾根部のC地区で土坑、溝が検出されたことも含めて、調査区周辺には当該期の遺構の存在は十分に考えられる。また3層中より出土した石鏃、剥片は本来これらの時期のものと考えられる。剥片は大分県姫島産の石材である。この剥片が出土したことにより、他地域との交流があったものと考えられよう。



第26図 C区SD1.2.3測量図・SD1出土遺物実測図



第27図 トレンチ出土遺物実測図 (T1・11)

(3) C区

C区で検出した土坑は遺構の深さに違いがあるが、出土する遺物の種類が類似することから同じ性格のものと考ええる。

松山市石風呂町に所在する鶴ヶ峠遺跡では尾根の周りより計28基の貯蔵穴が検出されている。平面形状は円～楕円形で、規模は1～1.5m、深さ0.8～1.3mを測り、断面形状は袋状を呈している。今回検出された2基の土坑も、鶴ヶ峠遺跡とは遺構数に多差があるが、遺構の立地、規模、平・断面形状、時期などが同じことなどから貯蔵穴と考える。

[参考文献]

- 宮崎泰好 1991 『祝谷6丁場遺跡調査報告書1』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
- 梅木謙一・宮内慎一 1993 「山越遺跡2次調査」『山越・久万の台の遺跡』松山市教育委員会・
(財)松山市埋蔵文化財センター
- 栗田正芳・河野史知・宮脇和人 1993 『古照遺跡6次調査』松山市教育委員会・(財)松山市埋蔵文化財センター
- 梅木謙一 1994 「来住廃寺14次調査地出土の弥生土器」『来住・久米地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・(財)松山市埋蔵文化財センター
- 宮内慎一 1995 『松山大学構内遺跡Ⅱ第3次調査』松山市教育委員会・(財)松山市埋蔵文化財センター
- 松山市資料集編集委員会 1987 「鶴ヶ峠遺跡」『松山市史料集』

遺構・遺物観察表 一凡 例一

(1)以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2)遺構の一覧表中の出土遺物は略記した。

例) 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器

(3)遺物観察表の記載について。

法量欄()：復元推定値。

調整欄：土器の各部位名称を略記した。例) 口→口縁部、口端→口縁端部、口下→口縁直下、胴上→胴部上位、胴中→胴部中位、胴下→胴部下位。

胎土・焼成欄：胎土欄は混和済を略記した。例) 砂→砂粒、微砂→微砂粒、石→石英、長→長石、金→金ウンモ

() 内の数値は混和済粒子の大きさを示す。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表 1 A 区礫石密集部観察表

	地区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	面積 (㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
	A 3~ D 6	不明	不明	6.5×6×0.15×0.55	約36	赤褐色土	縄文	?	類例なし

表 2 B 区溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規模 (m) 長さ×幅×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D 3~E 3	皿状	3.1×1×0.04~0.14	明灰褐色 砂質土		近代~現代	

表 3 B 区土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C 2	不整形 楕円形	播鉢状	1.24×0.77×0.46	濃青灰色粘性土 (やや黒味)	弥生・土師	古墳	

表 4 C 区土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C 2	楕円形	逆台形状	1.43×1.40×0.37	黄褐色砂質土	弥生・炭化物 剥片・川原石 礫石	弥生前期	
2	C 1・C 2	楕円形	袋状	1.81×1.50×1.01	黄褐色砂質土	弥生・炭化物 剥片・川原石 礫石	弥生前期	

遺物観察表

表5 C区溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A 2 ~ C 3	播鉢状	5.6×0.90×0.08~0.33	黄褐色砂質土	石製品	弥生時代	
2	B 3・B 4	レンズ状	3.2×0.58~1.26×0.18	明黄灰色砂質土		近・現代	
3	C 4・C 5・D 4	U字状	3.52×1.18×1.00	淡黄色土		近・現代	

表6 A区礫石密集部出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	鉢?	残高 6.6	幅広い沈線。 外面は部分的に縄文が残る。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	にぶい黄橙色	微砂~砂 ◎		23

表7 B区3①層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
2	壺	底径 (8.7) 残高 3.8	脚は低く、「ハ」字状に開き、 内端が接地する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(0.5~1) ◎		
3	甕	底径 (6.6) 残高 3.2	ややくびれをもつ上げ底の底部。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	橙色	石・長(0.5~2) ◎		

表8 B区3①層出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
4	石 鏃	完 形	サヌキトイド	2.6	1.7	0.5	2.0	(平基式)	23
5	剥 片		黒 曜 石	2.4	2.4	0.9	5.3	姫島産	23

表9 B区3②層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 施 文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
6	壺	残高 7.0	強く屈曲する肩部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(0.5) 微砂 ◎		
7	壺	残高 3.5	肩部片。 凹線1条と刺突文を施す。	ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
8	甕	口径 21.6 残高 4.8	外反する口縁部。 端部は丸くおさめ内端を屈曲させる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(0.5) 微砂 ◎	自然釉	
9	甕	残高 4.5	沈線2条(以上)と刺突列点文を施す。	ハケ目	ナデ (指頭痕)	淡黄色 にぶい黄橙色	石(1) 長(0.5) ◎		

太山寺経田遺跡 2次調査

表10 B区SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
10	壺	口径(10.6) 残高 11.2	緩やかに外反する口縁部。 頸部内面に接合痕。	ヨコナデ ⑧ハケ(7本/cm)	ヨコナデ	黄茶色	石・長(1) ◎		
11	壺	口径(12.0) 残高 5.7	内湾して立ち上がる口縁部。 口縁端部は、内傾し突出する。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	長(0.5~1) ◎		23
12	壺	口径(10.6) 残高 4.0	やや内湾して立ち上がる口縁部。 口縁端部は尖る。	ヨコナデ	摩滅の為不明	灰白色	長(0.5~2) ◎		
13	壺	口径(16.0) 残高 4.2	やや外反する口縁部。 口縁端部は先細る。 甕の口縁部片か。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	浅黄橙色	長(0.5~1.0) ◎		
14	甕	残高 6.0	外反する口縁部。 端部に面を持つ。	①ナデ ⑧摩滅の為不明	ナデ ⑧摩滅の為不明	浅黄橙色 橙色	石(0.5~2) 長(0.5~3) ◎		
15	壺	口径(19.7) 残高 (5.3)	複合口縁。 拡張部は、やや内傾する。	摩滅の為不明	①ナデ ⑧摩滅の為不明	浅黄橙色・橙色 浅黄橙色	石・長(0.5~3) ◎		
16	壺	口径(18.2) 残高 6.1	複合口縁。 拡張部は、やや内傾する。	ヨコナデ	ヨコナデ (指頭痕)	浅黄橙色	石・長(0.5~4) ◎		
17	壺	残高 6.5	肩部片。 器壁は薄い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	橙色 にぶい橙色	石・長(0.5~4.5) ◎		
18	甕	口径(17.0) 残高 2.5	折り曲げ口縁。 口縁端部下端に刻目。 胴部に沈線5条(以上)	ヨコナデ ①指頭痕	①ナデ 摩滅の為不明	灰茶色 黒色	石・長(1~2) ◎		
19	甕	底径(7.8) 残高 5.0	わずかに上げ底を呈する。	⑧下ミガキ ⑧ナデ	ナデ (指頭痕)	暗赤茶色 暗灰色	石・長(1~2) 多 ◎		
20	甕	底径(10.2) 残高 6.2	わずかに上げ底を呈する。	⑧ミガキ ⑧ナデ	摩滅の為不明	にぶい赤褐色 褐灰色	石・長(0.5~3) 金 ◎		
21	壺	口径(17.4) 残高 2.7	外反する口縁部。 口縁端部に沈線、刻目を施す。 内面に貼り付け凸帯。	摩滅の為不明	ヨコナデ	乳黄茶色	石・長(1~2) 多 ◎		
22	壺	残高 2.2	口縁部片。 内面に貼り付け凸帯。	ナデ	ナデ	灰白色	石(0.5~2) 長(1~2) ◎		

表11 B区4①層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
23	甕	口径(25.0) 残高 6.0	口縁部下に指頭押圧後刺突文を 加えた凸帯。	マメツ	マメツ	橙色	長(0.5~3) ◎		23
24	甕	残高 3.7	沈線6条(以上)。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	明赤褐色 褐色	長(0.5~3) ◎		
25	甕	残高 3.6	貼り付け口縁。	⑧ナデ 摩滅の為不明	⑧ナデ 摩滅の為不明	にぶい褐色 黒褐色	長(0.5~1) 微砂 ◎		
25	甕	底径(6.0) 残高 3.6	上げ底の底部。	ヨコナデ 指ナデ	摩滅の為不明	灰白色 暗褐色・黒褐色	長(0.5~4) 微砂 ◎		
27	甕	底径(6.0) 残高 3.5	上げ底の底部。	ナデ	ナデ (指頭痕)	明赤褐色 にぶい赤褐色	長(0.5~4) ◎		
28	壺	口径(14.0) 残高 2.1	外反する口縁部。 端部に面をもつ。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	浅黄橙色 黄橙色	石(0.5~3) 長(0.5~2) ◎		

遺物観察表

B区4①層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
29	壺	底径(8.0) 残高 4.0	平底の底部。 外面に工具痕。	ナデ	摩滅の為不明	灰白色 浅黄橙色	長(0.5~3) 砂 ◎	黒斑	
30	壺	底径(8.0) 残高 3.2	平底の底部。	ナデ	摩滅の為不明	赤褐色 灰黄褐色	石(1) 長(0.5~1.5) ◎		
31	壺	底径(9.0) 残高 2.4	平底の底部。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	橙色	長(0.5~1.5) ◎		
32	高坏	口径(19.0) 残高 2.0	口縁部片。 端部は内外方に肥厚させる。	摩滅の為不明	ナデ	橙色 灰白色	石(0.5~1.5) 長(0.5~2) ◎		

表12 B区4②層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
33	甕	口径(25.0) 残高 5.1	L字状口縁。 口縁端部は丸い。 頸部に断面三角形の凸帯。	ヨコナデ	①ヨコナデ ミガキ	橙色 にぶい橙色	長・石(0.5~1.5) 微砂 ◎		23
34	甕	口径(21.6) 残高 3.2	L字状口縁。 口縁端部は丸い。 頸部に断面三角形の凸帯。	ナデ	摩滅の為不明	にぶい橙色	石(0.5~2.5) 長(0.5~1) ◎		23
35	甕	口径(10.4) 残高 4.9	折り曲げられた口縁は短い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	橙色・褐色 橙色	石(1~3) 長(0.5~2) ◎		
36	甕	残高 1.4	折り曲げられた口縁は短い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰赤色	長(0.5~1) 微砂 ◎		
37	甕	底径 6.0 残高 5.1	上げ底の底部。 外面に工具痕が残る。	①下 摩滅の為不明 ②下 ヨコナデ	摩滅の為不明	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(0.5~5) ◎		
38	甕	底径 5.5 残高 5.1	若干くびれる上げ底。 外面に工具痕が残る。	①下 摩滅の為不明 ②下 ナデ	摩滅の為不明 (指頭痕)	にぶい橙色 灰白色	石(0.5~5) 長(0.5~2) ◎	黒斑	
39	甕	底径(5.8) 残高 4.5	くびれの上げ底。	①下 ミガキ ②下 ナデ	ナデ	橙色	長(0.5~2) 微砂 ◎		
40	壺	口径(20.6) 残高 1.4	肥厚させる口縁端部。 外端面に波状文。 内面に斜格子文(4条1組)。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 橙色	長(0.5~1.5) 微砂 ◎		
41	壺	口径(16.4) 残高 1.8	口縁部片。 口縁端部はナデにより下端が下垂する。	ヨコナデ (指頭痕)	ヨコナデ	にぶい橙色	石(1) 長(0.5~1) ◎		
42	壺	残高 5.2	大きく外反する口縁を持つものと思われる。指頭挿入された断面三角形の凸帯。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石(1~1.5) 長(0.5~1) ◎		
43	壺	残高 2.6	頸部片。 内面凸帯。 外面は1部ハケ目が残る。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	石(0.5~3) 長(0.5~1) ◎		
44	壺	残高 2.2	頸部片。 内面凸帯。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	明黄褐色 黄橙色	長(1) 砂 ◎		
45	壺	底径(9.0) 残高 4.6	やや突出する平底の底部。	ハケ目(6本/cm)	摩滅の為不明 (指頭痕)	赤橙色 にぶい橙色・灰白色	石(1~2) 長(0.5~2) ◎		
46	壺	底径(7.2) 残高 2.5	やや突出する平底の底部。	ハケ目(10本/cm)	摩滅の為不明	橙色・にぶい 橙色	石・長(0.5~4)		
47	壺	底径(8.0) 残高 3.9	平底の底部。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	にぶい橙色・橙色 灰白色	石(1~1.5) 長(0.5~1) ◎		

太山寺経田遺跡 2次調査

B区4②層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
48	壺	底径(5.8) 残高 4.5	平底の底部。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	橙色 にぶい橙色	長(0.5~5) ◎		
49	甕	口径(21.6) 残高 3.2	貼り付け口縁。 6条の沈線文、2段の刺突列点文、7条の沈線文が巡る。	摩滅の為不明 (指頭痕)	摩滅の為不明	淡黄色	長(0.1~3) ◎		23
50	甕	口径(10.4) 残高 4.9	口縁外端面に刻目。 沈線3条(以上)が巡る。 貼り付け口縁か。	ナデ	ナデ	灰白色	石(1~2) 長(1) ◎		
51	甕	残高 1.4	折り曲げ口縁。	ハケ目	摩滅の為不明	褐灰色 黒褐色	長(0.5~1.5) 微砂 ◎		
52	甕	残高 1.4	頸部片。 3条(以上)の沈線文。	ナデ	ナデ (指頭痕)	淡黄色	石(1) 長(0.5~1) ◎		
53	甕	残高 1.4	頸部片。 4条(以上)の沈線文。 11条の刺突列点文。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石(1~1.5) 長(0.5~1) ◎		
54	甕	底径(5.8) 残高 4.5	平底の底部。 焼成後に穿孔。 甌に転用。	ハケ目→ナデ	ナデ	にぶい橙色 明赤褐色	石・長(0.5~1) ◎	黒斑	
55	甕	底径(5.8) 残高 4.5	やや突出する底部は、若干上げ底。	摩滅の為不明	ナデ (工具痕)	にぶい橙色 灰白色	石(0.5~3.5) 長(0.5~3) ◎		
56	甕	底径(5.8) 残高 4.5	くびれをもつ上げ底。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	長(0.5~1) 砂 ◎		
57	壺	残高 5.2	頸部片。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	黄橙色	石(0.5~3.5) 長(0.5~2) ◎		
58	壺	残高 2.6	胴部片。3条(以上)の沈線文、 指頭挿圧後刺突が施された凸帯 文2条、5条(以上)の沈線文。	ナデ	ナデ	灰白色	石・長(0.5~2) ◎		23
59	壺	底径(7.2) 残高 2.5	若干上げ底の底部。	摩滅の為不明	ナデ (指頭痕)	浅黄橙色 灰白色	石(1~1.5) 長(0.5~1.5) ◎		
60	壺	底径(8.0) 残高 3.9	やや上げ底の底部。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰白色 灰黄褐色	長(0.5~4) ◎	黒斑	

表13 B区4③層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
61	甕	残高 1.9	頸部片。 6条(以上)の沈線文。	ナデ	摩滅の為不明	浅黄橙色	長(0.5~1) ◎		
62	壺	口径(22.0) 残高 3.9	外反する口縁部。口縁端部は、 外方に面をもつ。	ナデ	ミガキ	にぶい橙色	石(0.5~4.5) 長(0.5~3) ◎		
63	壺	口径(17.4) 残高 2.4	口縁部片。 口縁端部は外方に面をもち、下 端が肥厚する。	ナデ (口端)摩滅の為不明	ナデ	橙色	長(0.5~3) 微砂 ◎		
64	壺	残高 1.7	口縁部片。 口縁端部は外方に面をもち、下 端が肥厚する。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	浅黄橙色 橙色	長(0.5~1) ◎		
65	高坏	口径(29.8) 残高 3.7	坏口縁部片。 口縁端部は内外に拡張し、外端 面に刻目。	ハケ目(8本/cm) ◎回転ナデ	ハケ目(8本/cm) ◎回転ナデ	にぶい橙色	石(0.5~1.5) 長(0.5~1) ◎		23

遺物観察表

C区SK-2出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
98	甕	残高 2.4	口縁部片。	ハケ→ナデ	摩滅の為不明	黄茶色	石・長(1) 金 ◎		
99	甕	残高 5.7	頸部片。 2条(以上)の沈線文。 1条の刺突列点文。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	黄茶色	石・長(1) ◎		
100	甕	底径 6.8 残高 8.1	平底の底部。	ミガキ	ナデ (指頭痕)	黄赤褐色	石・長(1~3) ◎		
101	壺	残高 6.5	肩部片か。 1条の沈線。	ミガキ	摩滅の為不明 (剥離が著しい)	黄茶色	石・長(1~3) ◎		23
102	壺	残高 3.2	肩部片。 有軸羽状文(貝殻、二枚貝)。	ナデ	ナデ	乳黄灰色	石・長(1~2) ◎		23
103	壺	底径 6.8 残高 4.0	突出する平底の底部。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	赤茶色	石・長(1~2) ◎		
104	壺	底径 6.8 残高 4.0	平底の底部。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	赤茶色 黄茶色	石・長(1~3) ◎		

表20 C区SD-1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
105	石 鏃	2/3	サヌキトイド	2.7	1.1	0.2	0.42		23

表21 T-1・11出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
106	高坏	口径(28.6) 残高 6.2	坏部口縁部片。 口縁端部は内外に拡張。 外端面に刻目。	ミガキ	ミガキ	橙色	石(0.5~2.5) 長(0.5~4) ◎		
107	坏身	口径(12.8) 残高 2.8	立ち上がりは内傾し端部は尖る。 受部は外方に伸びる。	回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	灰色	長(0.5~4) 微砂 ◎		
108	甕	残高 4.4	外反する口縁部は端部を折り曲 げ玉縁状におさめる。	ナデ	摩滅の為不明	灰色 灰白色	長(0.5~4) 微砂 ◎		

第Ⅳ章

太山寺経田遺跡

— 3 次 調 査 —

第Ⅳ章 太山寺経田遺跡 3次調査

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1995（平成7）年1月25日、松山市農林土木課より松山市太山寺町乙694-2外における農道新設工事にあたり、当該地の埋蔵文化財確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No.10片廻遺跡(弥生時代)太山寺古墳群 片廻古墳群 素鷲神社」内にあり、現況は果樹園として利用されている丘陵地で、尾根筋と谷間を通る農道からなる。近隣地では、これまでに数多くの発掘調査が実施されている。

これらのことから、文化教育課は埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲・性格を確認するため、平成7年4月4日～同年5月31日の間、試掘トレンチ（以下、T1～T16と呼称）を16箇所設定し確認調査を実施した。確認調査の結果、T1・T2では遺構、T14では遺物包含層を検出した。

文化教育課と農林土木課の二者は当該地における遺跡の取り扱いについて協議を行い、開発工事によって失われる遺跡について、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

調査地は、松山平野北西部太山寺丘陵の東側、標高44～57mの緩斜面上に立地する。この太山寺丘陵上には、周知の古墳群が数多く所在する。また接続する太山寺経田遺跡1次調査地及び2次調査地からは、縄文時代、弥生時代前期、古墳時代、中世の遺物が出土し、住居址、土坑、溝状遺構、集石遺構が確認されている。今回の調査は周囲のデータを踏まえ、集落関連遺構の広がりや古墳の確認を主目的とした。

T1からT2にかけてをA区、T14付近をB区と称し、文化教育課の指導のもと、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、農林土木課及び周囲地権者の協力を得て1995（平成7）年6月1日から8月31日の3ヶ月間、本格調査を実施した。

(2) 調査組織

調査地 松山市太山寺町乙694-2 外

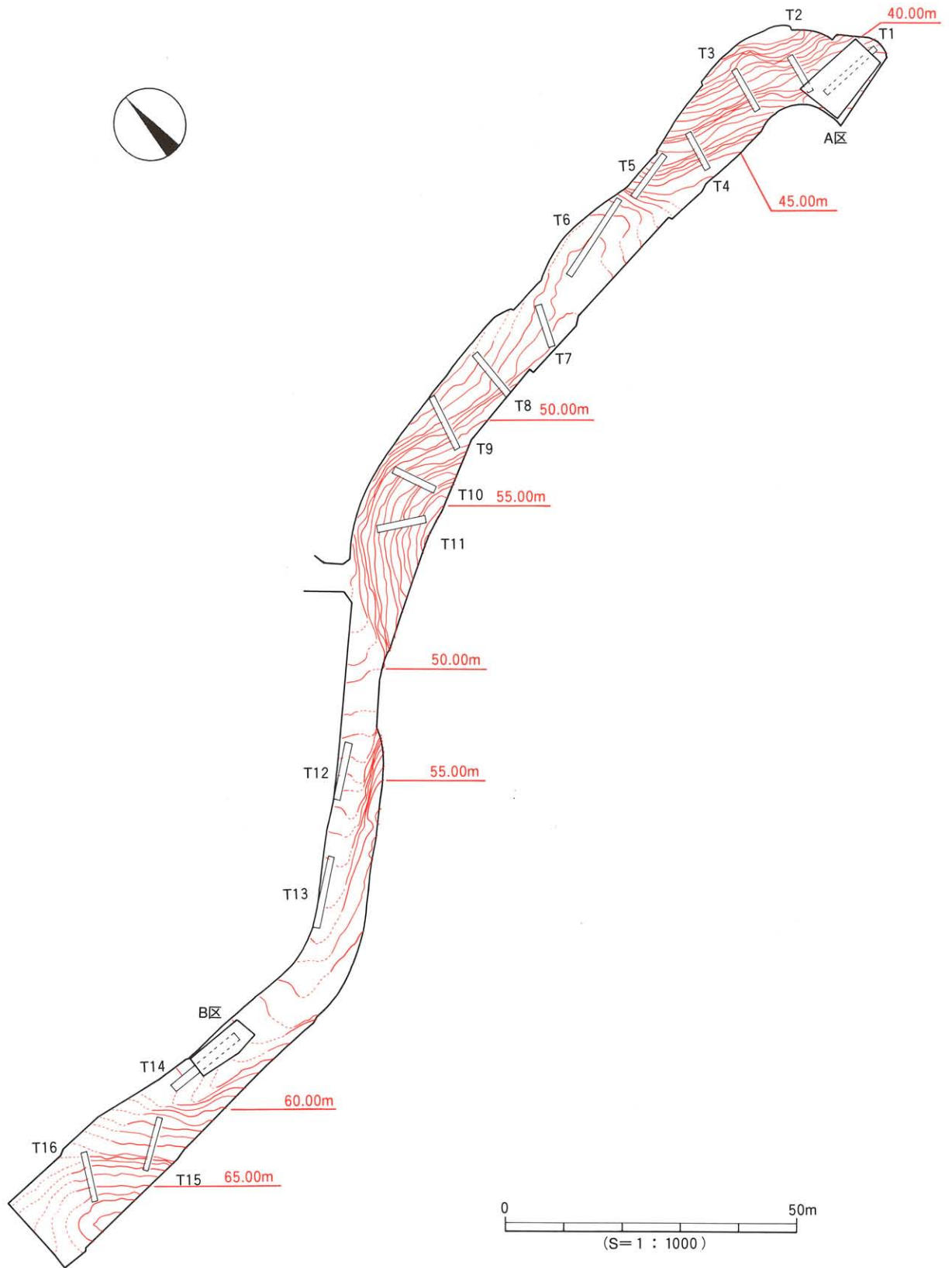
遺跡名 太山寺経田遺跡 3次調査

調査期間 平成7年6月1日～同年8月31日

調査面積 2,500m²

調査担当 山本健一・武正良浩

調査作業員 市山 積、岩本 美保、木下奈緒美、後藤 公克、酒井 直哉、重松 吉雄、
関 正子、武田 俊昭、多知川富美子、田中 茂樹、坪内 宏美、萩野ちよみ、
広沢 忠、松田 常義、村上真由美、矢野 久子、吉井 信枝、好川昇三郎 ほか



第1図 調査地位置図

2. 層位

調査区の現状はA区、B区共に柑橘畑である。山の尾根部からなるA区と谷部からなるB区に分かれる。立地状況の違いから、層位は上層の一部を除いてほぼ異なる様相を見せている。

A区

調査区内の基本層位は、上層から第1層明灰黄色砂質土、第2層淡黄灰色砂質土、第3層茶褐色土、第4層茶褐色砂質土、第5層黄茶褐色砂質土(地山)である。調査に先立ち調査地の南東コーナーに任意の基準点を設け、磁北方向に4mのグリットを設定した。グリットは南から北へA・B・C、東から西へ1・2・3・4とし、A1、A2、A3……として表記した。

第1層; A区全域で見られる。現代の耕作土で、厚さ10~60cmを測る。

第2層; 耕作に伴う造成土である。ほぼA区全域で見られ、厚さ4~60cmを測る。

第3層; 8~20cmの推積で土質はやや硬く微粘性である。遺物の出土はない。

第4層; 4~90cmの推積である。遺物の出土はない。

第5層; 地山層である。上位は黄燈色を呈し、中位はやや茶色が増し、下位では茶褐色を呈する。土質は1~3mm大の砂粒を呈し、緻密ではあるが上位は脆い。中位ではやや硬くなり、下位では砂粒岩盤層である。10~50cmの厚さを測る。

B区

調査区内の基本層位は、上層から第1層明灰黄色砂質土、第2層淡黄灰色砂質土、第3層淡黄茶色土、第4層暗灰褐色砂質土、第5層黒褐色粘土質、第6層淡黄灰褐色土、第7層灰色砂質土、第8層灰色粘土、第9層茶褐色粘質土である。調査に先立ち調査地の南東コーナーに任意の基準点を設け、磁北方向に2mのグリットを設定した。グリットは南から北へA・B、東から西へ1・2……とし、A1、A2、A3……として表記した。

第1層; B区全域で見られる。現代の耕作土である。厚さ4~25cmを測る。

第2層; A区同様、耕作に伴う造成土である。厚さ15~30cmを測る。

第3層; 10cmの推積である。遺物の出土はない。若干の違いはあるものの、A区の第3層に対応するものとする。

第4層; 10~20cmの推積である。弥生土器片、土師器片、須恵器片を包含している。

第5層; 8~30cmの推積である。弥生土器片、須恵器片を包含している。

第6層; 2~12cmの推積である。B区東壁にかかる一部で見られる。石斧片1点が出土した。

第7層; 5~40cmの推積である。遺物の出土はなく、岩盤が風化したものと思われる。

第8層; 4~20cmの推積である。遺物の出土はない。

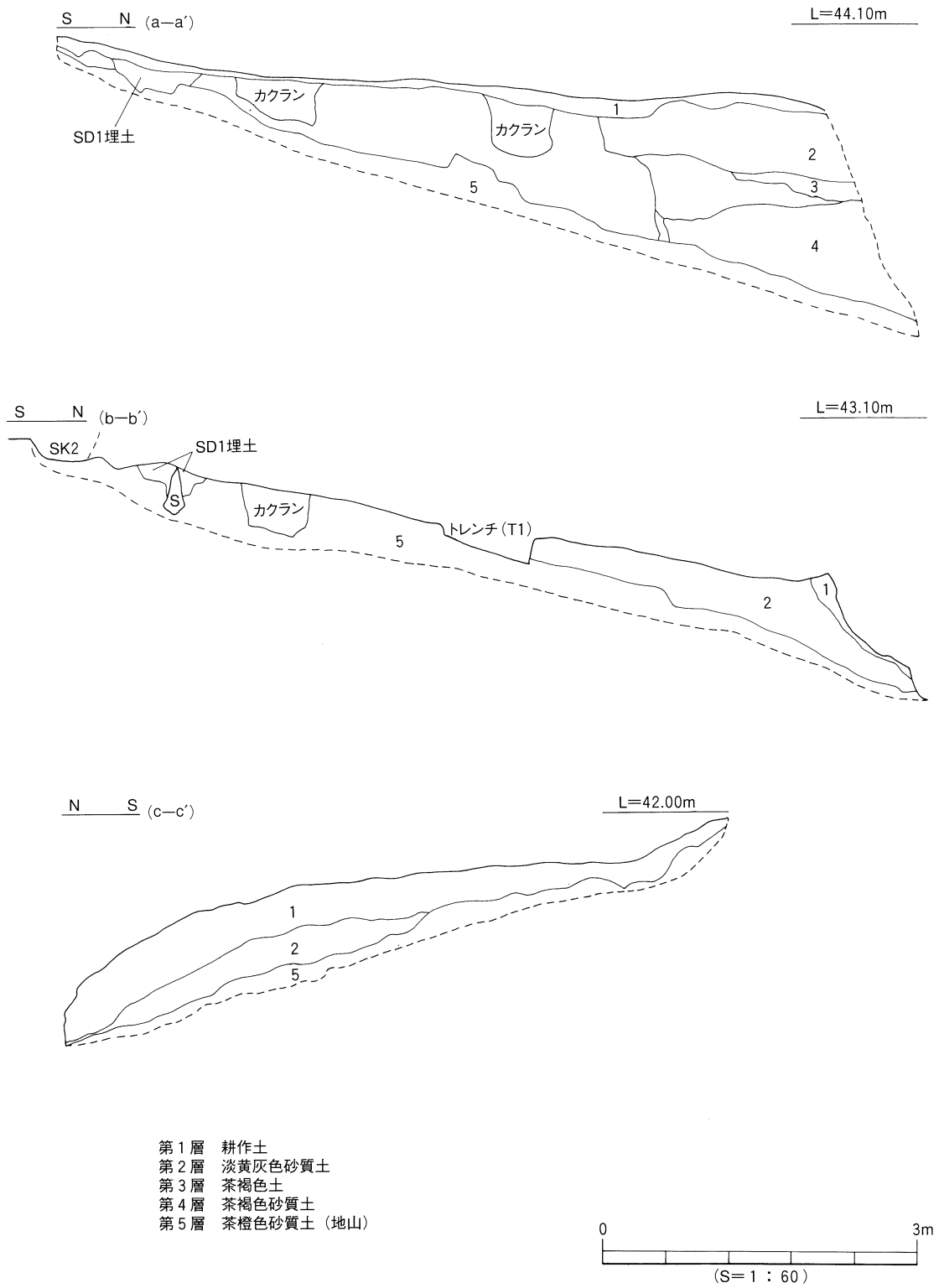
第9層; 10~50cmの推積である。

3. 遺構と遺物

(1) A区

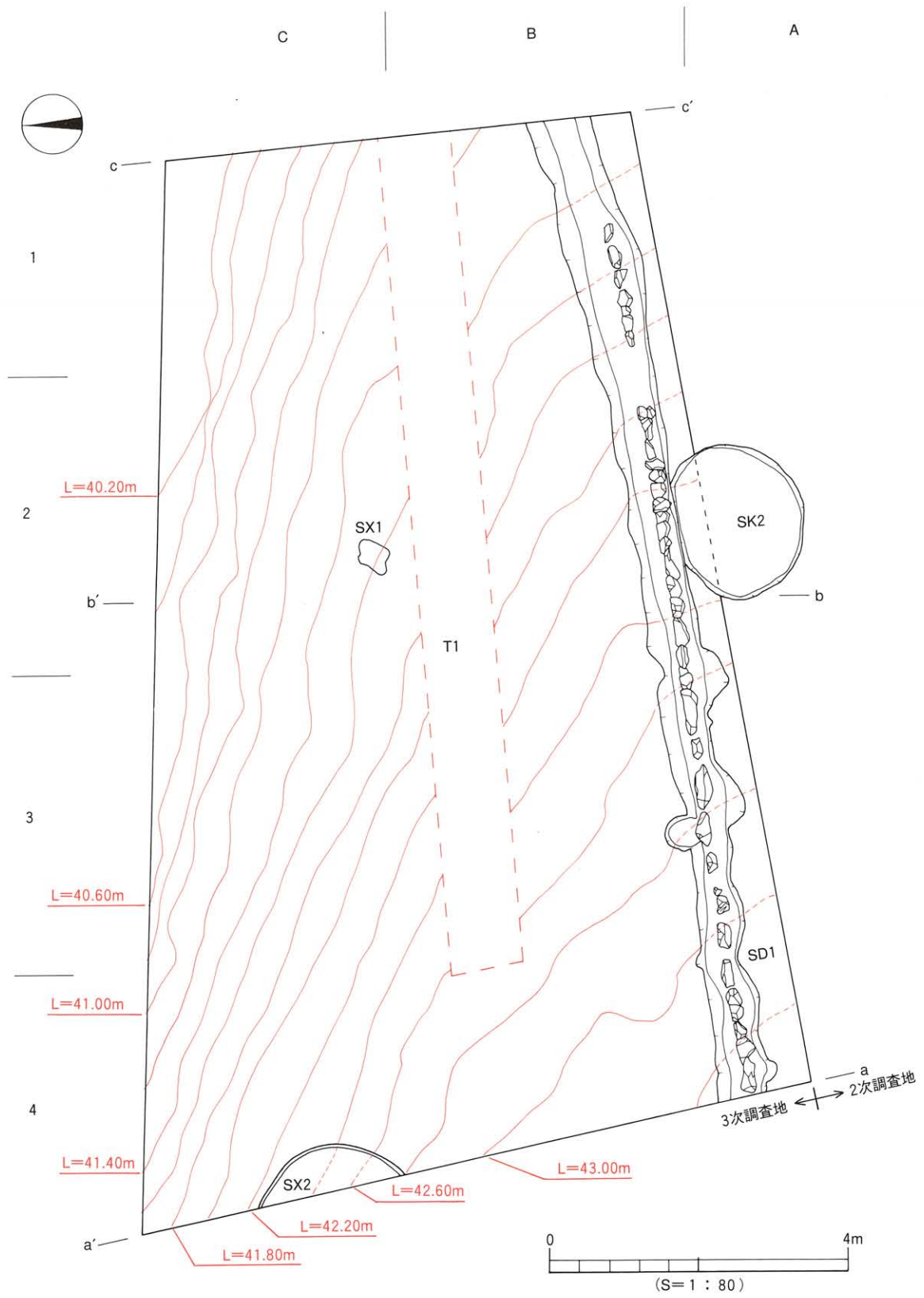
A区は、調査地南東部の尾根筋の緩斜面に位置する。調査区の層位は第1層耕作土、第2層淡黄灰色砂質土、第3層茶褐色土、第4層茶褐色砂質土、第5層黄燈色砂質土~茶褐色砂粒岩盤(地山)であ

太山寺経田遺跡 3次調査

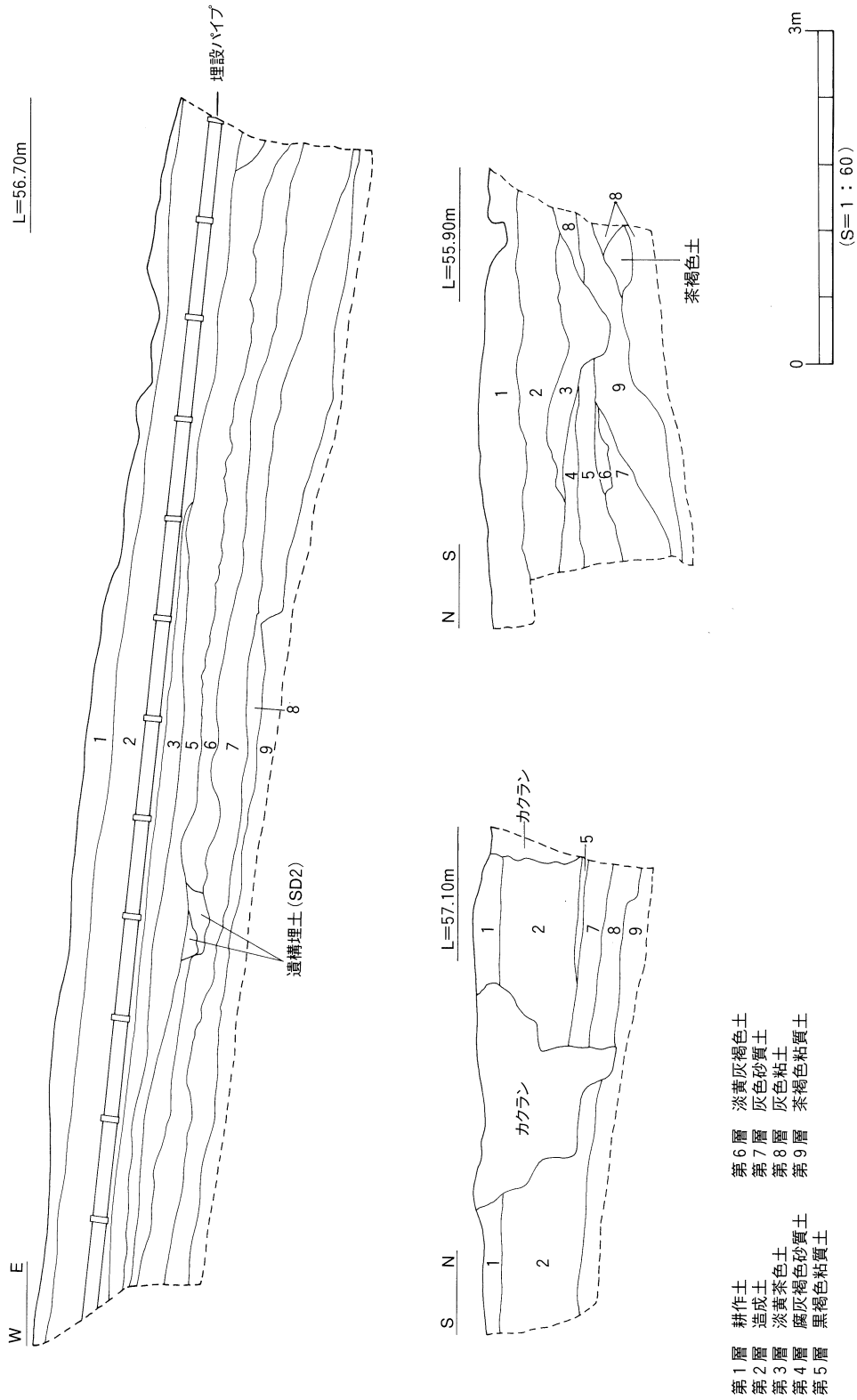


第2図 A区調査区壁土層図

遺構と遺物



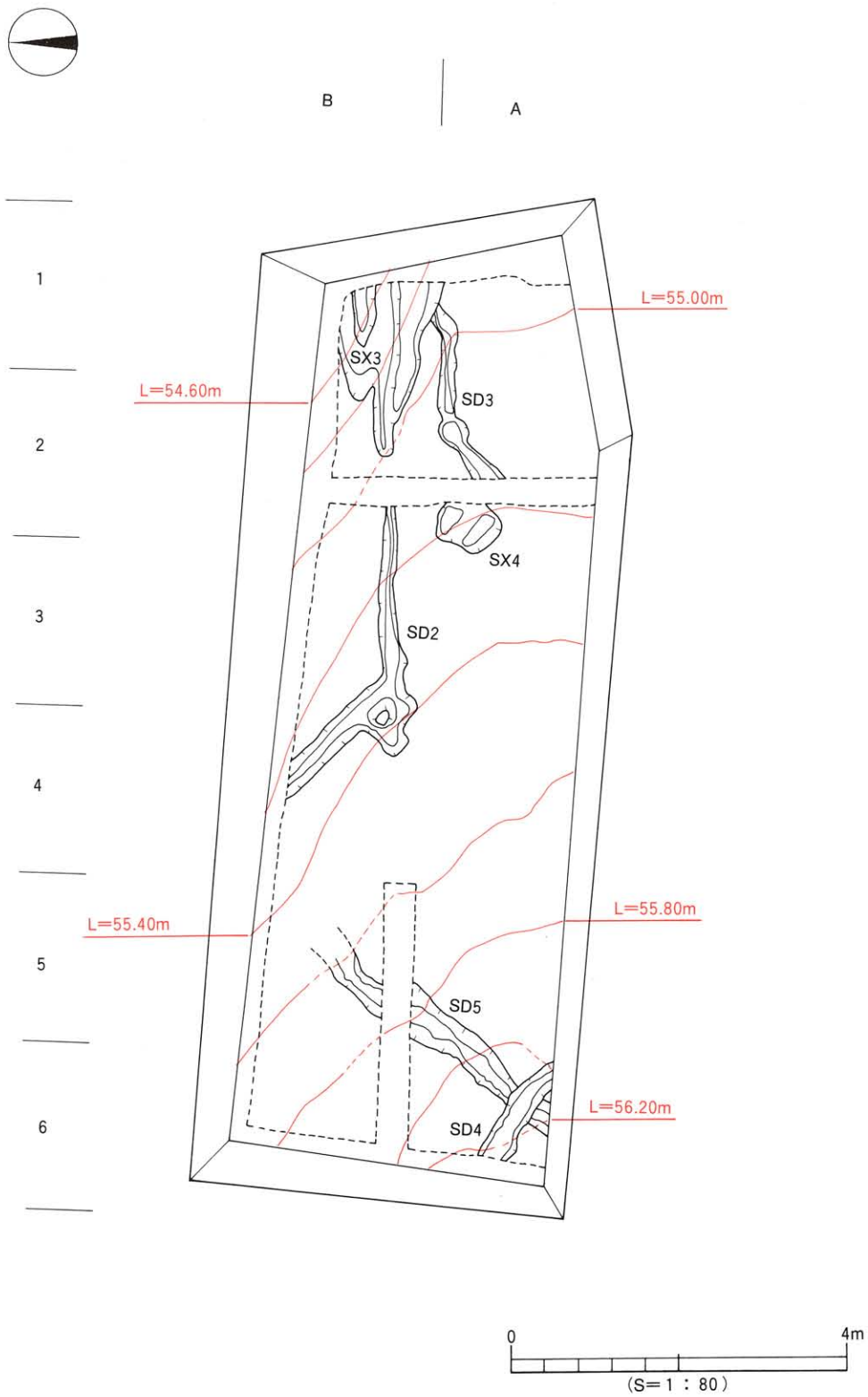
第3図 A区遺構配置図



- 第1層 耕作土
- 第2層 造成土
- 第3層 淡黄茶色土
- 第4層 腐灰褐色砂質土
- 第5層 黒褐色粘質土
- 第6層 淡黄灰褐色土
- 第7層 灰色砂質土
- 第8層 灰色粘土
- 第9層 茶褐色粘質土

第4図 B区調査区壁土層図

遺構と遺物



第5図 B区遺構配置図

る。第2層上面で東西に続く溝状遺構（内部に石列）を検出した。また、試掘トレンチT2の西壁で遺物を包含する窪みが確認されていたが、調査区西側は既存農道であり、西側への調査区拡張は避けた。なお、A区東側への広がりには確認できなかった。

また、南側にて土坑の一部が検出された(註)。

遺物は、耕作土中及び造成土中から弥生土器片、土師器片、須恵器片が出土している。

SK2 (第3図)

調査区南側、A・B2区に位置する。南側4/5は太山寺経田遺跡2次調査になる。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長さ1.81m、幅1.5m、深さ1.01mを測る。断面形状は袋状を呈する。埋土は黄褐色砂質土。(詳細はP93に記載)

時期：弥生時代前期

SD1 (第3図)

調査区南側にて、東西に伸びる溝状遺構(SD1)を検出した。検出長は13.4m、幅50~98cm、深さ36cmを測る。断面形状は逆台形状を呈する。溝状の中央から人頭大の並列礫石を検出。

時期：第1層耕作土直下、第2層上面の検出であり、土地境界を意図した近・現代の遺構と考えておきたい。

SX1 (第3図)

調査区中央、C2区に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、検出規模は長さ52cm、幅40cm、深さ60cmを測る。埋土は灰黄茶色土(焼土混じり)。

時期：不明

SX2 (第3図)

調査区西側、C4区に位置する。トレンチT2内で確認された窪みである。平面形は半円形を呈し、検出規模は長さ2m、幅63cm、深さ60cmを測る。埋土は淡黄灰茶色土である。遺物は弥生土器片が出土した。

時期：A区内から弥生時代前期の遺物が採取されていること、同時期の遺構に近距離であることより弥生時代前期以降と考える。

(2) B区

B区は、調査地西部の東方向へ開口する谷間部に位置する。調査は第7層上面までを層位に従い掘り下げを行い、第8層、第9層はトレンチ掘りにより調査を行った。調査の結果、三層に分かれる遺物包含層を確認した。第4層から第5層までは弥生土器、土師器、須恵器を包含している。出土量は少なく弥生土器片、土師器片は磨滅を受けているものが多い。第6層中からは、石斧1点が出土した。

遺構は第6層上面にて溝状遺構4条、性格不明遺構2基を検出した。

SD2 (第5図)

調査区北側、B2~4区に位置する。規模は検出長3.6m、幅0.4m、深さ5cmを測る。断面形態は舟底状である。埋土は明黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。

時期：不明

SD3 (第5図)

調査区南東、A1・2区に位置する。規模は検出長2.1m、幅0.36m、深さ9cmを測る。断面形態

は舟底状である。埋土は灰色砂質土である。遺物は出土していない。

時期：不明

SD4 (第5図)

調査区南西、A6区に位置する。規模は検出長1.28m、幅0.36m、深さ16cmを測る。断面形態は舟底状である。埋土は灰色砂質土である。遺物は須恵器片が出土した。

時期：出土した遺物から古墳時代以降と考えられる。

SD5 (第5図)

調査区西側、A6・B5区に位置する。規模は検出長3.8m、幅0.62m、深さ15cmを測る。断面形態は舟底状である。埋土は暗灰色砂質土である。遺物は弥生土器片が出土した。

時期：出土した遺物から弥生時代以降と考えられる。

SX3 (第5図)

調査区北東、B1・2区に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、検出規模は長さ2.05m、幅1.14m、深さ13cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

時期：不明

SX4 (第5図)

調査区中央、A2区に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、検出規模は長さ0.8m、幅0.6m、深さ17cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

時期：不明。ただし、埋土が同一であることよりSX3と同時期と考えられる。

包含層出土遺物 (第6図)

ここでは遺物包含層や出土地点が特定できないものを取り上げる。

A区 表採(1)：1は弥生時代前期の壺形土器の底部。わずかな上げ底を呈す。

B区 第4層(7)：7は土師器の甕形土器口縁部である。

第5層(4・5・8)：4は弥生時代中期の高坏口縁端部。内外方に拡張され水平口縁を呈する端部片。5は弥生時代中期の壺形土器底部。平底を呈す。8は須恵器の壺口縁部。直線的に外反する口縁部の内外面に施釉。

第6層(9)：9は弥生時代の伐採斧。石材は蛇紋岩系。

グリッド(2・3)：2は弥生時代中期の甕形土器口縁部。口縁端面が上方にわずかに拡張される。3は弥生時代後期の壺形土器口縁部。ゆるやかに外反し、端部はやや肥厚される。

表採(6)：6は弥生時代中期の甕形土器底部。くびれの上げ底を呈す。

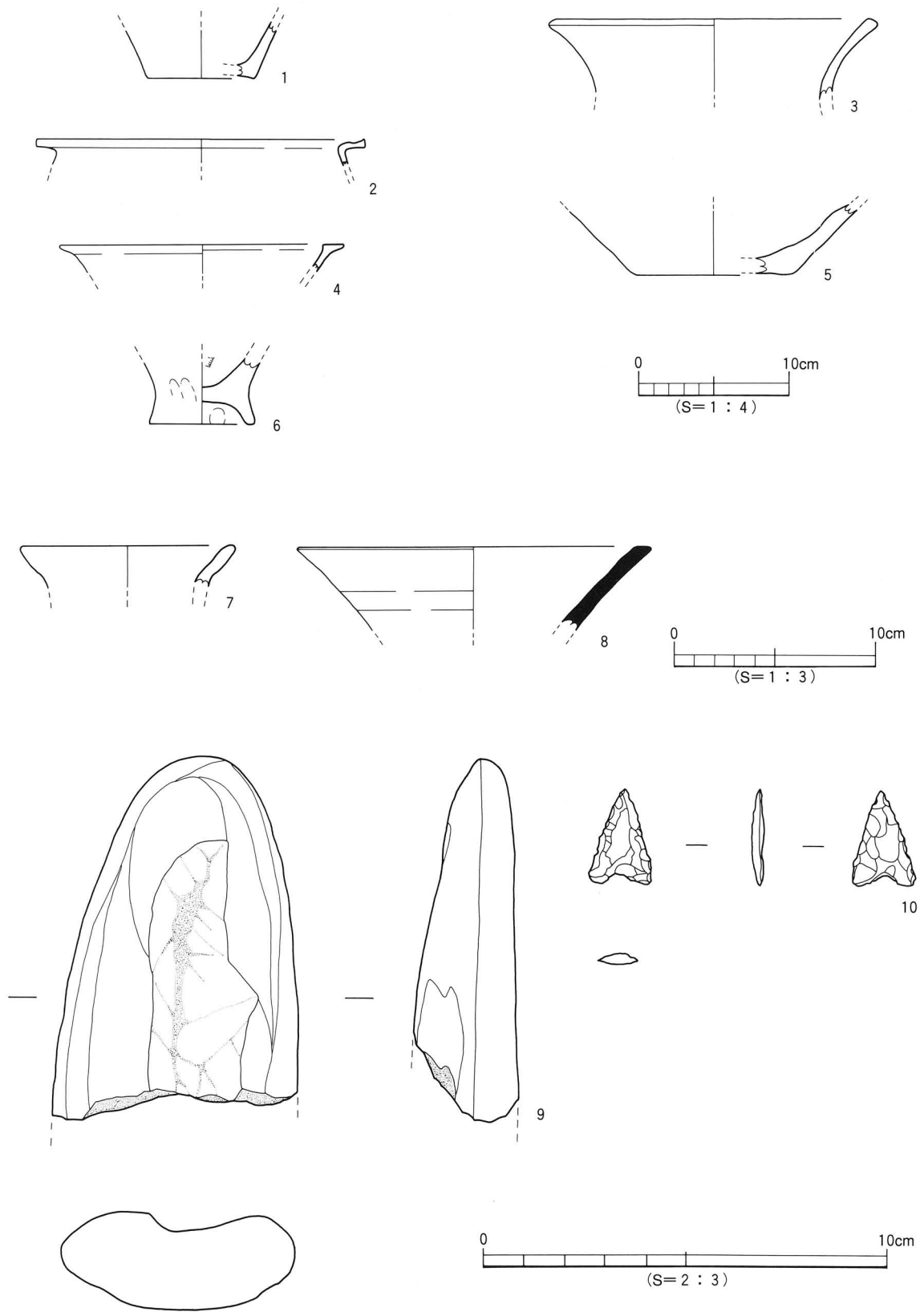
その他 表採(10)：10は試掘調査対象地内で採集されたサヌカイト製の打製石鎌である。

4. 小結

(1) A区

残存率が低い遺構が顕著であった。耕作による削平や風雨による流失が考えられる。弥生時代前期の土坑(註)と調査区西壁にて検出された性格不明遺構と焼土坑と近現代の区画溝であった。

太山寺地区は果樹栽培に適した低丘陵が多い。果樹栽培による旧地形の変更が今回の調査においても顕著に表れた結果となった。今後は遺跡の残存状況の把握と古墳の分布調査等も必要であろう。



第6図 出土遺物実測図

(2) B区

本調査において、弥生時代から近現代に至る遺構・遺物を検出した。その中でも特に興味深いのは、B区から検出された遺物包含層である。出土量が少ないことより、この谷間部が土器や石器の廃棄場になるかどうかは判断しがたい。しかしながら調査区の西側丘陵上に住居跡を含む居住空間が存在した可能性はある。遺構内一括資料とは異なる谷間の遺物包含層からの出土であるが、堆積層も安定し分層できたことは、今後の貴重な資料となるものである。

(註) 今回の3次調査地は前回の太山寺経田遺跡2次調査地の隣接地に位置する。そのため2次調査にて部分検出であったSK2の残部が検出された。

遺構・遺物観察表 一凡 例一

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物は略記した。

例) 弥生→弥生土器、須恵→須恵器

(3) 遺物観察表の記載について。

法量欄 () : 復元推定値。

形態・施文欄: 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴→胴上半、天→天井部。

胎土・焼成欄: 胎土欄は混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表1 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A区 A4~B1	逆台形状	13.40×0.98×0.36	灰白色	礫 石	近現代	
2	B区 B2~B4	舟底状	3.60×0.40×0.05	明黄褐色砂質土	無	不 明	
3	B区 A2・3	舟底状	2.10×0.36×0.09	灰色砂質土 (黒褐色粒混)	無	不 明	
4	B区 A6	舟底状	1.28×0.36×0.16	灰色砂質土	須恵器片	古墳時代以降	
5	B区 B5~A6	舟底状	3.80×0.62×0.15	暗灰色砂質土	弥生土器片	弥生時代以降	

太山寺経田遺跡 3次調査

表 2 土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A区 B2	楕円形	袋状	1.81×1.50×1.01	黄褐色砂質土	弥生土器、炭化物、剥片、川原石、礫石	弥生前期	

表 3 性格不明遺構一覧

土坑(SX)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A区 C2	不整楕円	レンズ状	0.52×0.40×0.60	灰黄茶色土 (赤褐色混)	無	不明	
2	A区 C4	半円形	逆台形状	2.0×0.63×0.6	淡黄灰茶色土	無	不明	
3	B区 B1・2	不整楕円	波板状	2.05×1.14×0.13	黒褐色粘質土	無	不明	
4	B区 A2	不整楕円	波板状	0.80×0.60×0.17	黒褐色粘質土	無	不明	

表 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	壺	口径(7.0) 残高 3.8	わずかな上底を呈す。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	橙色 にぶい黄橙色	密(長・石) ○	前期	
2	甕	口径(21.8) 残高 1.8	口頸部片。口縁端面が上方にわずかに拡張される。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	にぶい黄色 淡黄色	密(長) ○	中期中葉	
3	壺	口径(21.8) 残高 5.4	ゆるやかに外反する口縁部。端部はやや肥厚される。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	橙色 橙色	密(長・石) ○	後期後半?	
4	高坏	口径(18.8) 残高 1.9	口縁部-内外方に拡張。水平口縁。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	にぶい橙色 橙色	密(石) ○	中期中葉	
5	壺	底径(10.0) 残高 4.6	平底で大型の底部。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	粗(長・石) ○	中期中葉	
6	甕	底径(7.0) 残高 4.4	くびれの上げ底。	摩滅の為調整不明 指頭圧痕のみ看取	⑧ナデ	橙色 明黄褐色	密(長・石) ○	中期中葉	
7	土師甕	口径(10.7) 残高 3.1	口縁端部は丸く仕上げる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	橙色 橙色	密(長) ○		
8	須恵壺	口径(17.6) 残高 4.2	内外面共に施釉。直線的に外反する口縁部。端面は水平に仕上げられる。	回転ナデ	回転ナデ	黒色 灰色	密(長) ○		

表 5 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
9	石斧 (伐採斧)	1/2 (刃部欠損)	蛇紋岩系	(9.1)	6.1	2.4	192.6		
10	石鏃	完存	サヌカイト	2.4	1.45	0.25	0.82	抉り 3mm	

第V章

太山寺経田遺跡

－ 4 次 調 査 －



第V章 太山寺経田遺跡4次調査

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1995（平成7）年11月27日、松山市農林土木課より松山市太山寺町1934番地他における農道新設工事にあたり、当該地の埋蔵文化財確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No.10片廻遺跡（弥生時代）、太山寺古墳群、片廻古墳群、素鷲神社」内にあり、太山寺山塊には前期から後期までの古墳が多数分布している。

当該地の北1.5kmに位置する高月山古墳群は7基の古墳で構成され、そのうちの1基（2号墳）は前期古墳である。2号墳は長方墳で、水銀朱塗彩の箱式石棺を主体部とする。墳墓掘り方内には鉄剣、鉄先、鉄斧が、周溝内からは底部穿孔の壺と銅鏃1点が出土している。

北2kmに位置する坂浪古墳群中の塔ノ口山古墳は箱式石棺を主体部とし、内行花文鏡、画像鏡の舶載鏡片2面が出土しているが、詳細は明らかではない。

南1kmに位置する鶴ヶ峠古墳群では、20数基の古墳が調査され、6～7世紀の横穴式石室や小竪穴式石室を主体部とする円墳が検出されている。

さて、太山寺経田遺跡では、すでに3次の調査が実施されている。弥生時代から近世までの集落関連遺構が検出され、住居址、土坑、溝、集石遺構が確認されている。

これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1996（平成8）年9月4日～同年10月18日の間、（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は申請地内に15本のトレンチ（T1～15）を設定し、試掘調査を実施した。

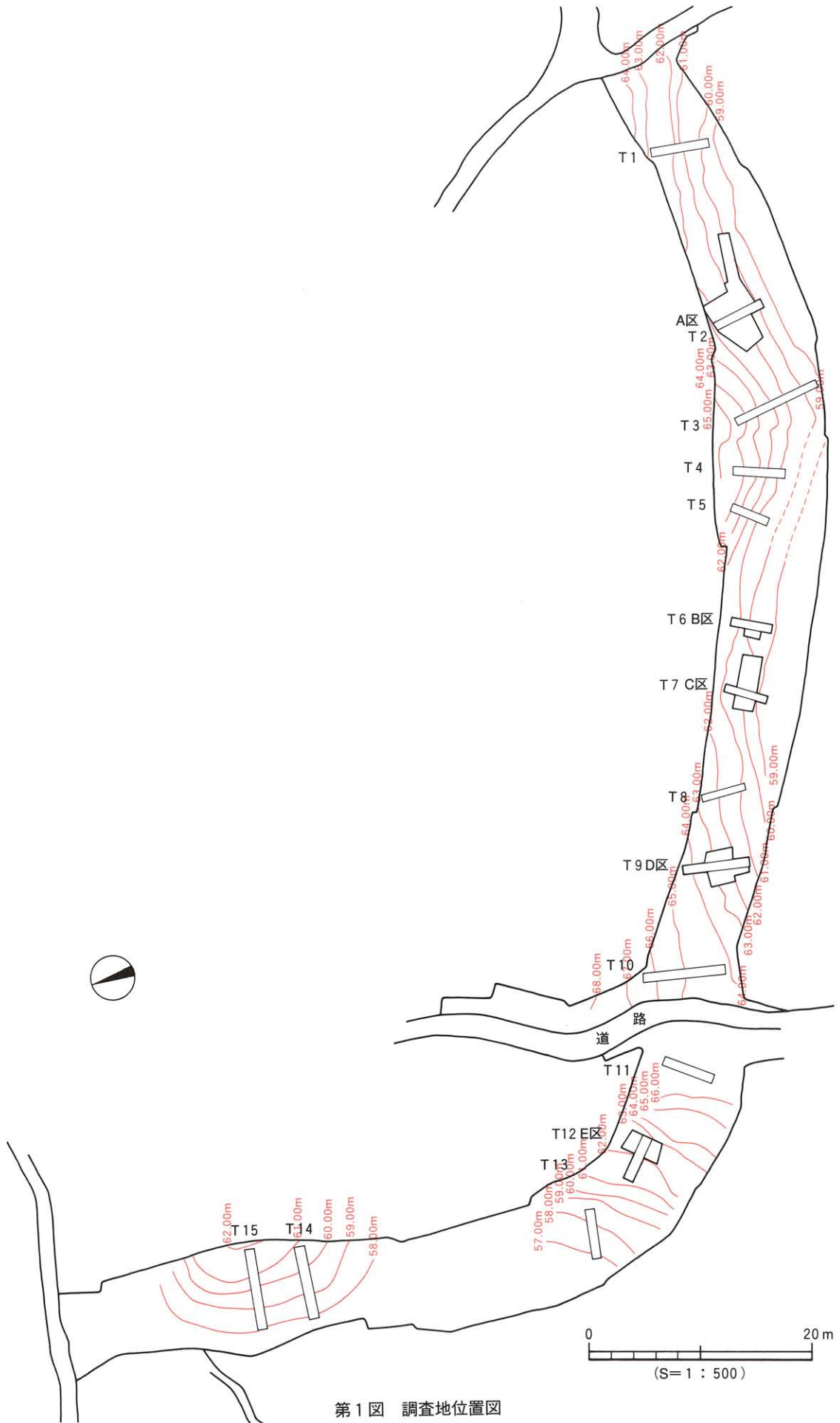
試掘調査の結果、T2・6・7・9・12からは列石2基と集石状遺構4基を検出した。また、T6からは須恵器片3点、T7では弥生土器片4点、T8では土師器片1点が出土し、さらには中近世の土師器片1点を表採した。

これらの結果を受け、文化教育課と申請者の両者は遺跡の取り扱いについての協議を重ね、農道新設工事に伴って消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することになった。今回の調査では、集落関連遺構の範囲を確認することを調査目的とし、文化教育課の指導のもと、埋文センターが主体となり、T2・6・7・9・12を中心に調査を実施した。なお、T2はA区、T6はB区、T7はC区、T9はD区、T12はE区と称し、1996年10月21日より本格調査を実施した。

(2) 調査の経緯

1996（平成8）年10月21日、手掘りによる表土剥ぎ取り作業をA～E区の順番で開始する。試掘調査の結果をもとに地表下35～120cmまで掘り下げを行う。

11月5日、A～E区の遺構検出を開始する。11月6日にはA～E区の地形の測量を開始し、11月7日には測量を完了する。



第 1 図 調査地位位置図

11月8日、A区上段・下段の遺構測量を開始する。11月11日、C区の遺構測量を開始し、11月12日にはA～E区の遺構配置図の測量を完了する。11月13日、B区の遺構測量を開始。11月15日、D区の遺構測量を開始する。11月18日、E区の遺構測量を開始する。11月20日、全調査区の遺構測量を完了する。

11月21日、A～E区の遺構完掘写真を撮影し、現場作業を完了する。

11月22日、出土遺物や調査用具などを撤去する。

(3) 調査組織

調査地 松山市太山寺町1934番地他

遺跡名 太山寺経田遺跡4次調査地

調査面積 2,800m²

調査期間 1996(平成8)年10月21日～同年11月22日

調査担当 水本 完児、河野 史知

2. 層位

調査地は、松山平野北西部太山寺丘陵の東側、標高56.50～68mの緩斜面上に立地する。調査時には果樹園として利用されていた。

基本層位は、第Ⅰ層腐葉土(表土)、第Ⅱ層茶色土、第Ⅲ層明茶色土、第Ⅳ層暗茶色土、第Ⅴ層黄色土、第Ⅵ層岩盤(地山)である。

第Ⅰ層は、厚さ35～120cmを測り、調査地全域で検出した。T6・7・9・12の中位～下位では角礫が数点出土し、E区の下層からは集石状遺構を検出する。

第Ⅱ層は、厚さ20～105cmを測り、T1～3・6・7・13で検出した。

第Ⅲ層は、厚さ20～60cmを測り、T1・11・12で検出した。

第Ⅳ層は、厚さ60～160cmを測り、T9・10で検出した。T9では、礫が上層から1点と中層から数点出土している。

第Ⅴ層は、厚さ20cmを測り、T1で検出した。

第Ⅵ層は、T1～15の全域にある。

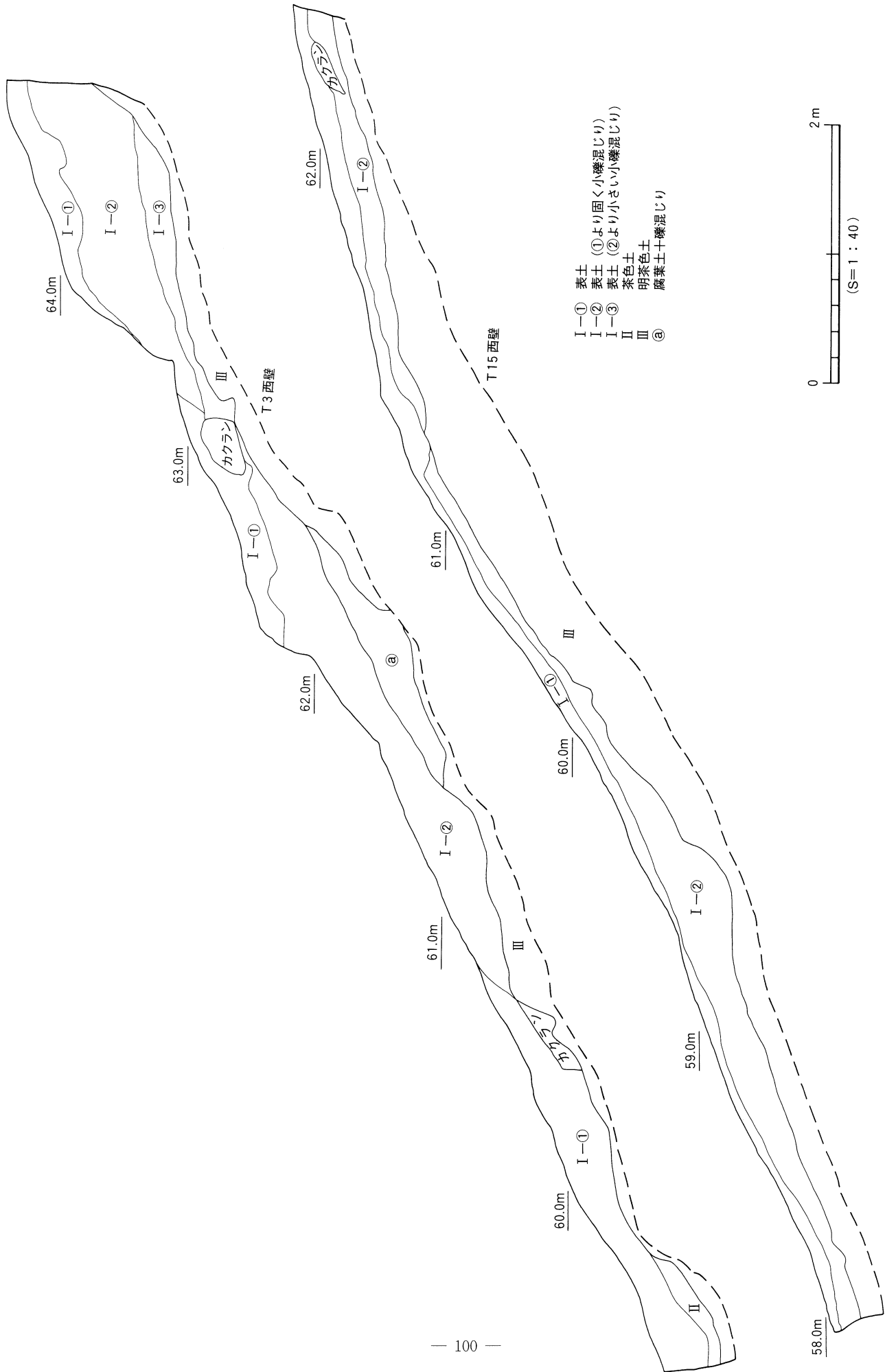
遺構は、第Ⅰ層より集石状遺構1基、第Ⅱ層より石列2条と集石状遺構3基を検出している。

3. 遺構と遺物

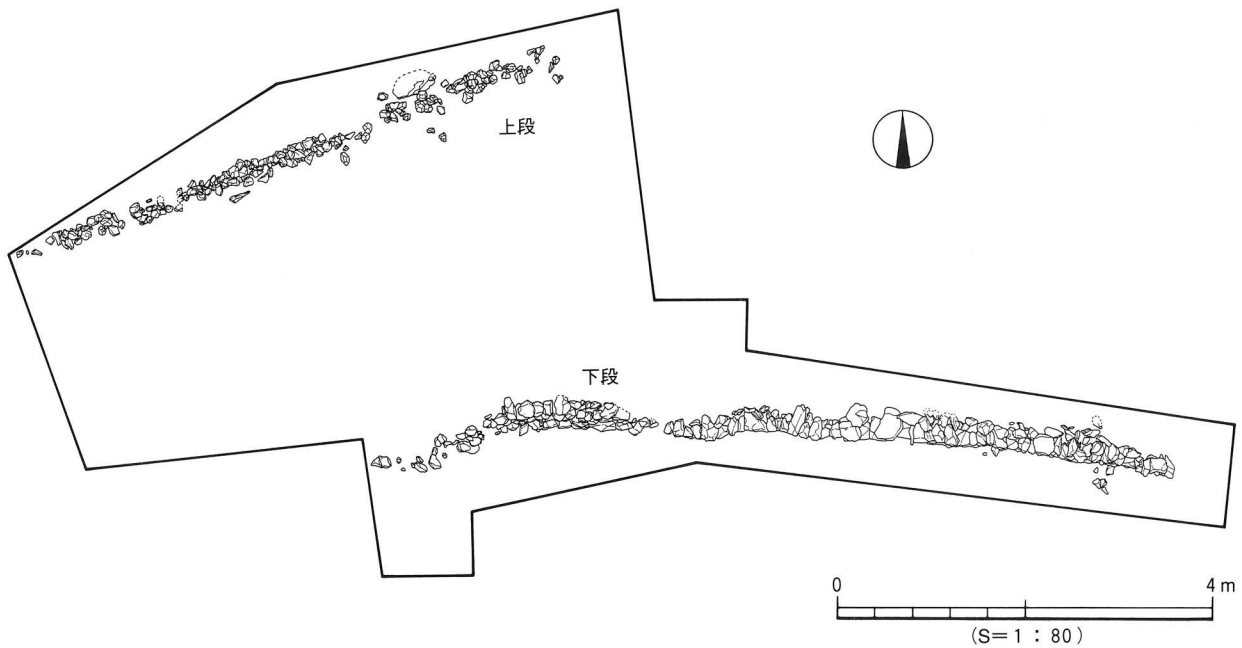
(1) A区

調査地東側の丘陵斜面に位置し、調査面積は35.8m²である。調査地は上下段に分かれる。上段では第Ⅱ層下から石列を検出した。規模は東西6.2m、南北0.23mを測る。石は7～35cm大の角礫で、石列の厚みは5～10cmを測り、3～4列に並んでいる。遺物は出土しなかった。

下段では第Ⅱ層中位から石列を検出し、規模は、東西8.5m、南北0.35mを測る。石の大きさは10～30cm大で、石列は2～3列で6段に石が積み、高さは70cmを測る。遺物は、石列東側の地山付近



第2図 T3・T15西壁土層図



第3図 A区測量図

から弥生土器片が2点出土している。

(2) B区

調査地中央東側の丘陵南斜面に位置し、調査面積は 5.7m^2 である。第Ⅱ層中からは集石状遺構を検出し、規模は東西 0.75m 、南北 2.1m を測る。石は $10\sim 25\text{cm}$ 大の角礫で、集石の厚みは $5\sim 15\text{cm}$ を測り、1ヶ所に並べられた状態で検出された。遺物は出土しなかった。

(3) C区

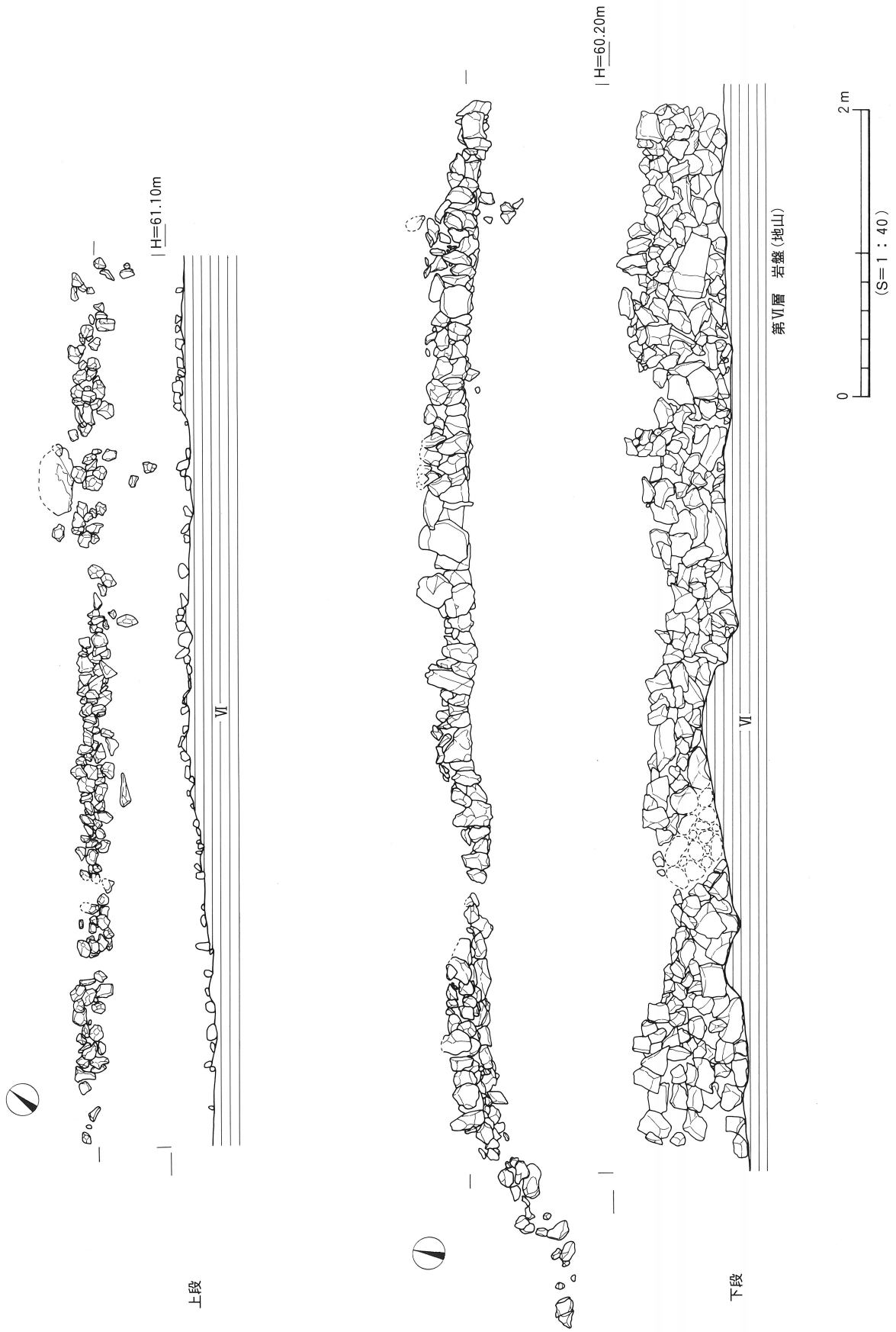
調査地中央の丘陵南斜面に位置し、調査面積は 15.4m^2 である。第Ⅱ層上位からは集石状遺構を検出した。規模は東西 4.7m 、南北 1.6m を測る。石は $5\sim 25\text{cm}$ 大の角礫で、集石の厚みは $5\sim 20\text{cm}$ を測り、3ヶ所に並べられた状態で検出された。遺物は出土しなかった。

(4) D区

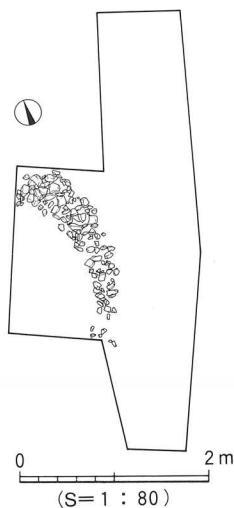
調査地中央の丘陵南斜面に位置し、調査面積は 14.0m^2 である。第Ⅱ層下位からは集石状遺構を検出し、規模は東西 2.8m 、南北 1.85m を測る。石は $10\sim 30\text{cm}$ 大の角礫で、集石の厚みは $5\sim 20\text{cm}$ を測り、集石は散乱している状態で検出された。遺物は第Ⅱ層中から弥生土器片が1点出土している。

(5) E区

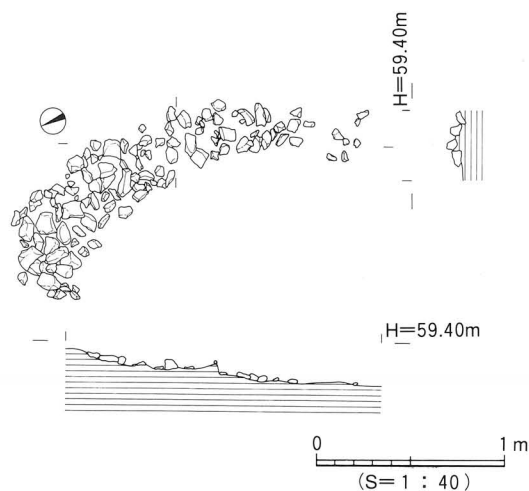
調査地西側の丘陵南西斜面に位置し、調査面積は 16.5m^2 である。第Ⅰ層中位からは集石状遺構を検出した。規模は東西 0.8m 、南北 2.6m を測る。石は $5\sim 20\text{cm}$ 大の角礫で、集石の厚みは $5\sim 10\text{cm}$ を測



第4図 A区列石測量図



第5図 B区測量図



第6図 B区集石測量図

り、集石は並べられた状態で検出された。遺物は出土しなかった。

4. 小結

本調査では、石列と集石状遺構を検出し、弥生時代から中・近世の遺物が出土した。

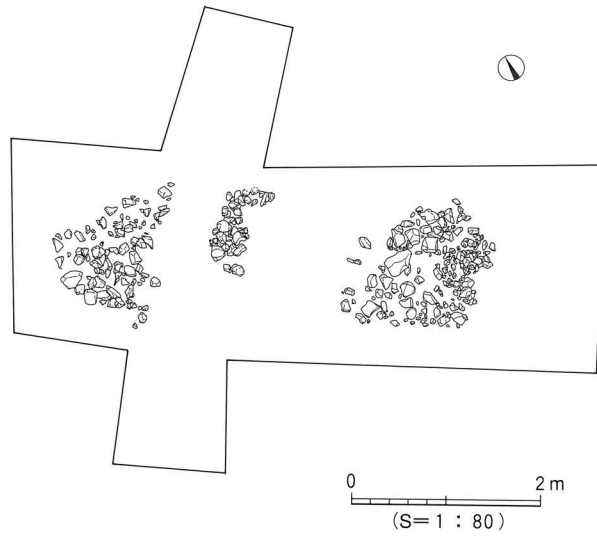
遺物は、弥生土器片、須恵器片、土師器片、中近世の土師器片（土師皿）が出土したが、小片のため図化していない。

石列は、A区で検出し、A区の上・下段では石列が斜面に対して垂直方向に延びており、意識的に構築されたことが解る。ただし、遺物がなく性格や時期は特定できなかった。

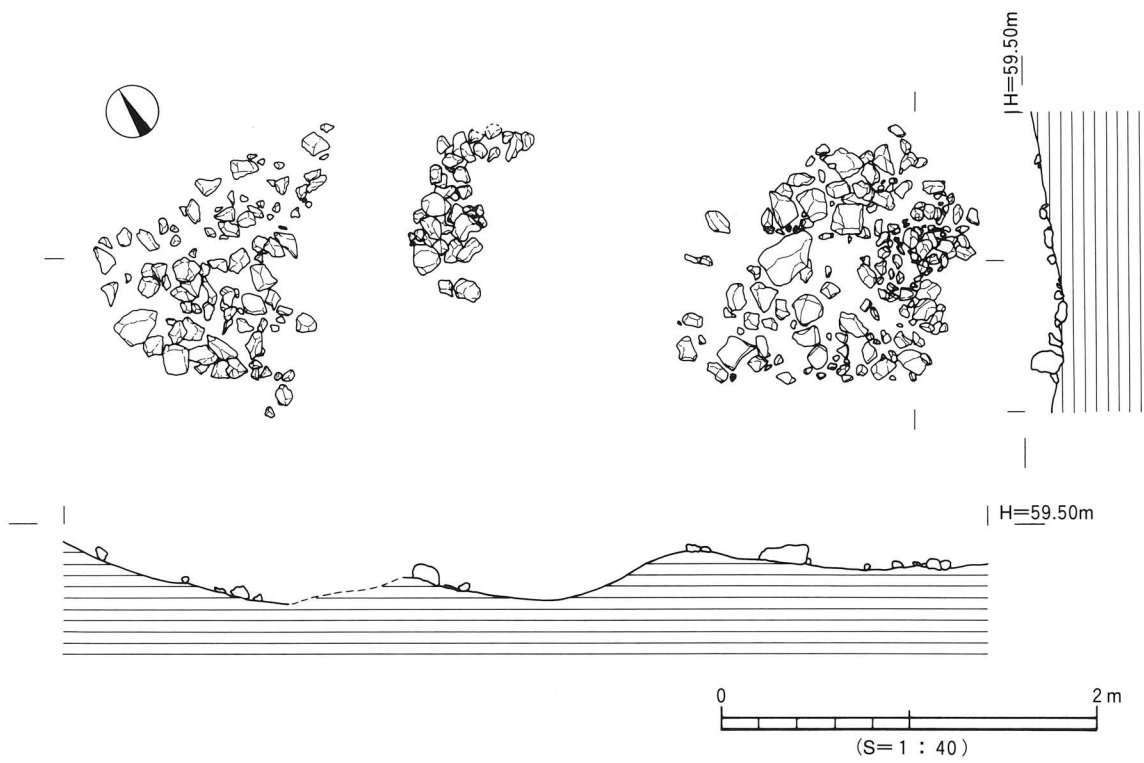
集石状遺構は、B・C・E区に密集し、D区には散乱した状態で検出された。B・C・E区の集石は、意識的に構築されていると考えられるが、掘り方は確認できなかった。遺物は、D区の第Ⅱ層中位から弥生土器片が1点出土したが、この土器は後世に流れ込んだものと思われ、性格や時期を決定するに至らない。D区の集石は石が散在し、B・C・E区の検出状況とは異なるため、意識的に構築されたものではないと考えられる。

今回、検出した石列は太山寺経田遺跡1次調査地でも検出している。1次調査では、石列の用途は区画施設に使われたと考えられ、時期は陶磁器片の出土より、中近世に比定されている。また、集石状遺構は太山寺経田遺跡2次調査地において検出され、集石状遺構の用途と時期は不明であった。

以上、太山寺経田遺跡4次調査の報告をしてきた。今回の調査では、1・2次調査で検出した遺構と同じものを確認し、各々が広範囲にわたる遺構であることを確認することができた。また、両者は今回の調査においても性格を特定することができなかった。よって、これ等の遺構の広がりや性格を解明することが今後の調査課題といえる。

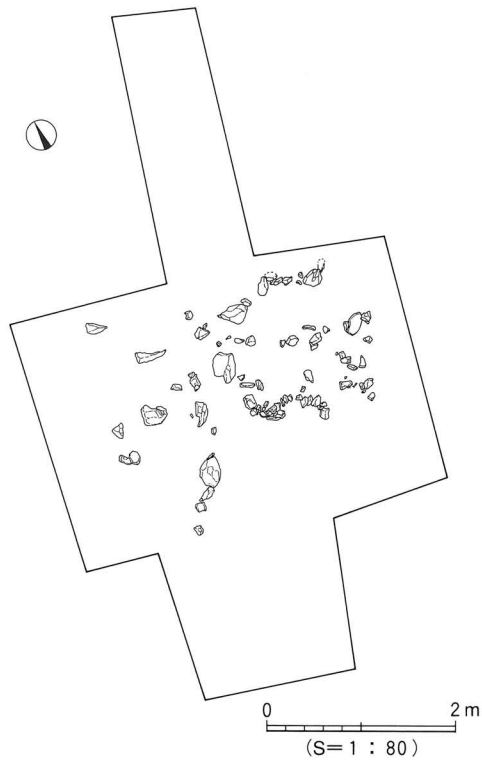


第7図 C区測量図

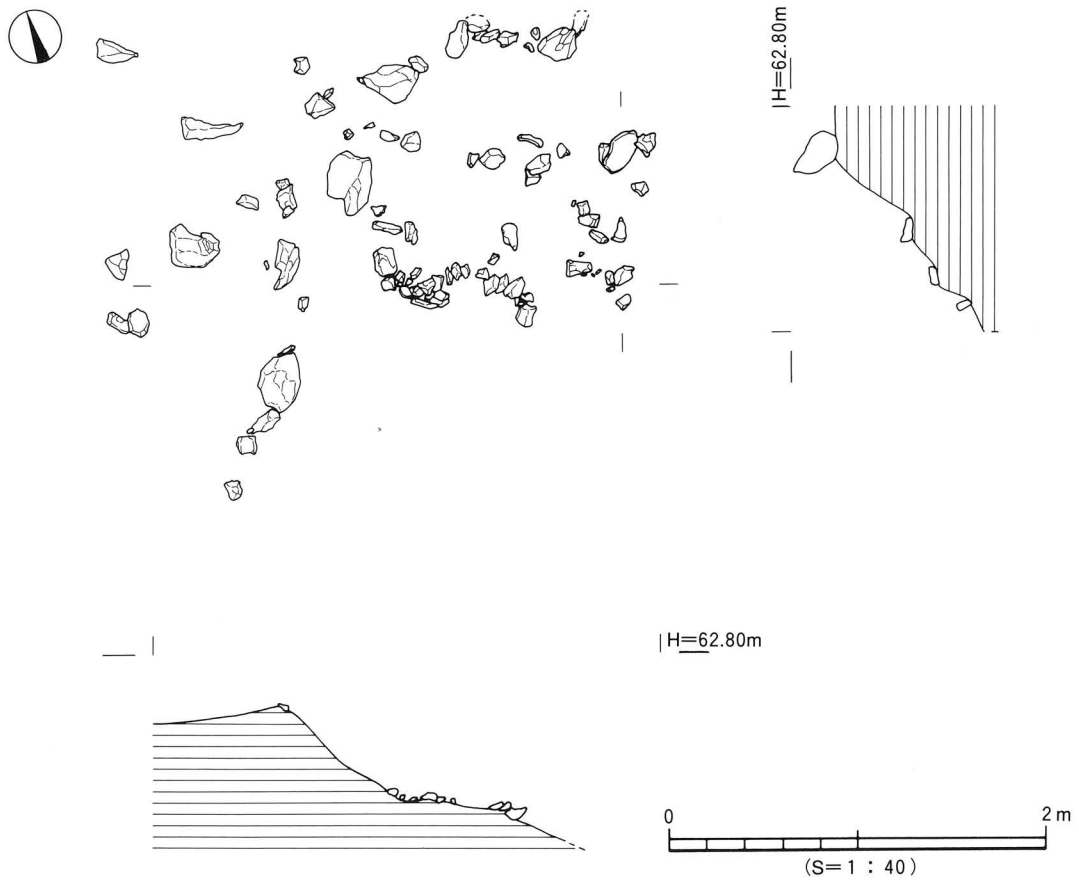


第8図 C区集石測量図

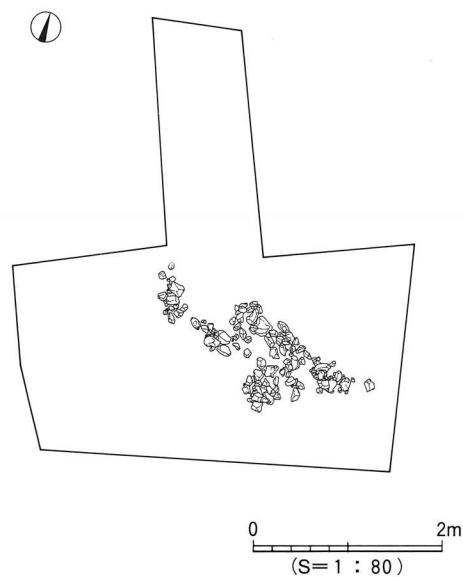
小 結



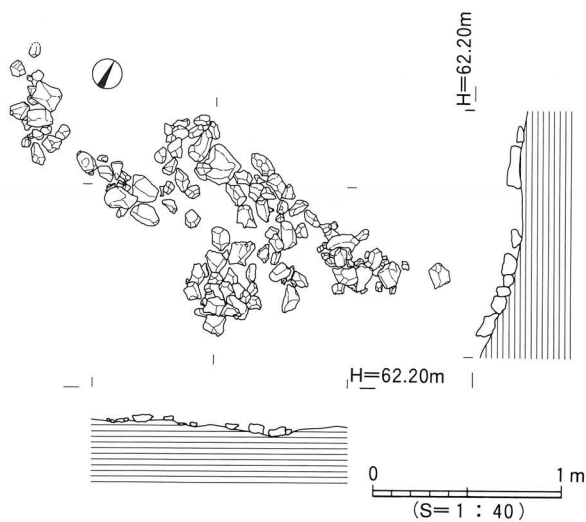
第9図 D区測量図



第10図 D区集石測量図



第11図 E区測量図



第12図 E区集石測量図

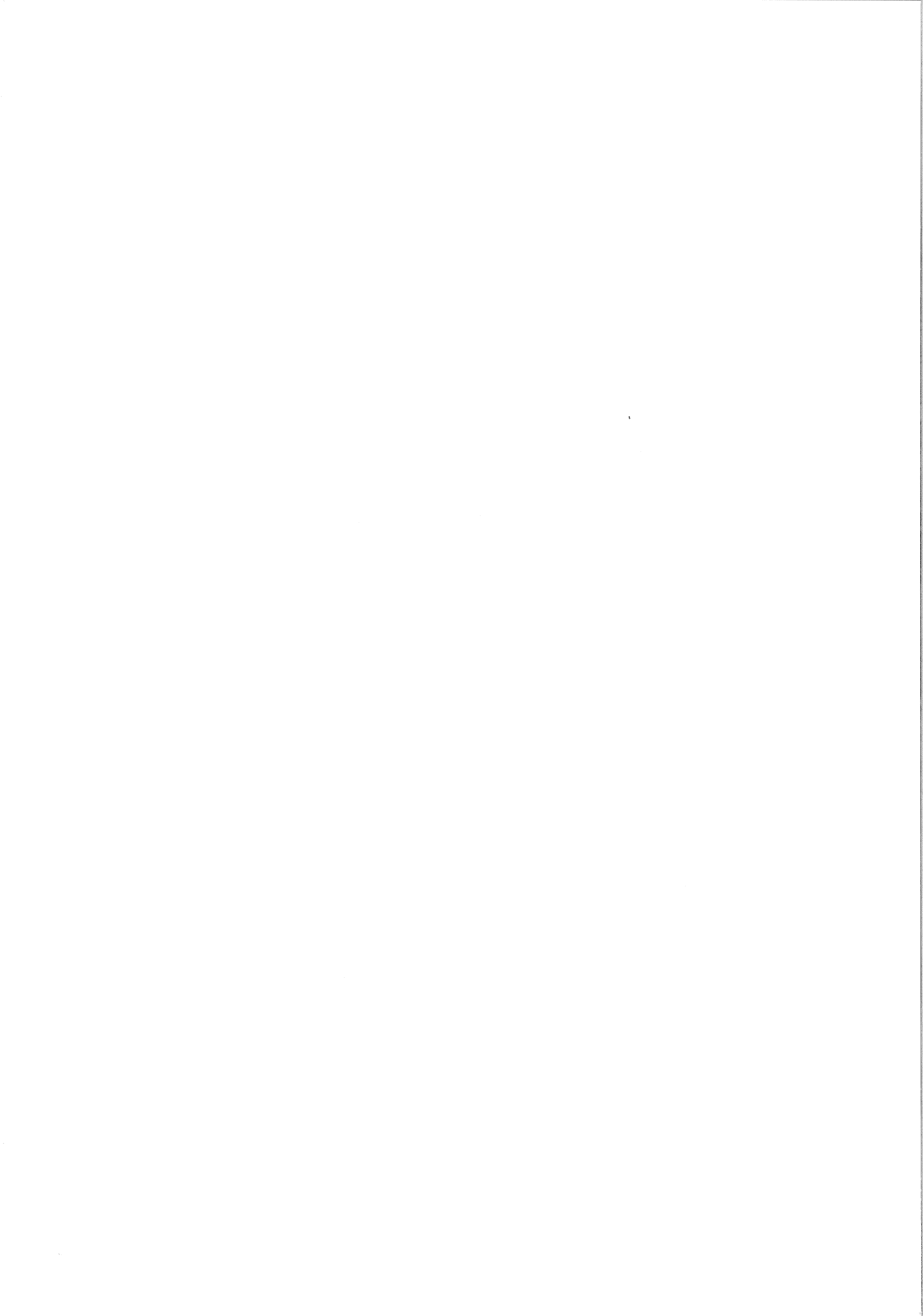
[参考文献]

- 山本健一 1996 「太山寺経田遺跡 3 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 山本健一 1995 「太山寺経田遺跡 2 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田正芳 1994 「太山寺経田遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 池田学・宮崎泰好 1989 「船ヶ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
- 宮崎泰好 1988 『高月山古墳群調査報告書』松山市教育委員会
- 西尾幸則 1986 「鶴ヶ峠古墳群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県教育委員会
- 阪本安光 1984 『松山市船ヶ谷遺跡』愛媛県教育委員会

第Ⅵ章

太山寺経田遺跡

— 5 次 調 査 —



第Ⅵ章 太山寺経田遺跡5次調査

1. 調査の経過

(1) 調査の経緯

1997(平成9)年7月9日、松山市農林水産部農林土木課より松山市太山寺町1981外における団体営農道整備にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課(以下、市教委と称する)に提出された。

申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「10片廻遺跡(弥生時代) 太山寺古墳群 片廻古墳群 素鷲神社」内にある。これまでに申請地周辺では、数多くの発掘調査が実施されており、周知の遺跡地帯として知られている。申請地の南東には、1993年から太山寺経田遺跡が確認・調査されている。これらの調査によって、縄文時代、弥生時代前期、古墳時代、中世の各期の遺物が出土し、石列、集石、土坑等の遺構が検出されている。これらの遺物と遺構の存在は、当遺跡を含めた周辺に当該期の遺跡が展開していたことを推測させるものである。

これらのことから、市教委と(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋文センターと称する)は当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1997(平成9)年11月4日から同年12月5日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、土師器、須恵器、瓦器の破片、サヌカイト製の打製石器が出土し、遺物包含層を2カ所で確認し、東西方向にのびる石列を検出した。このことから、当該地における本格調査の必要性があるとの結論に達し、埋文センターが主体となり、申請者ならびに関係者各位の協力のもと、1997(平成9)年12月15日から本格調査を開始した。

(2) 調査の組織

調査地 松山市太山寺町1981他

遺跡名 太山寺経田遺跡5次調査地

調査期間 1997(平成9)年12月15日～1998(平成10)年1月30日

調査面積 2,000m²

調査担当 栗田茂敏 加島次郎

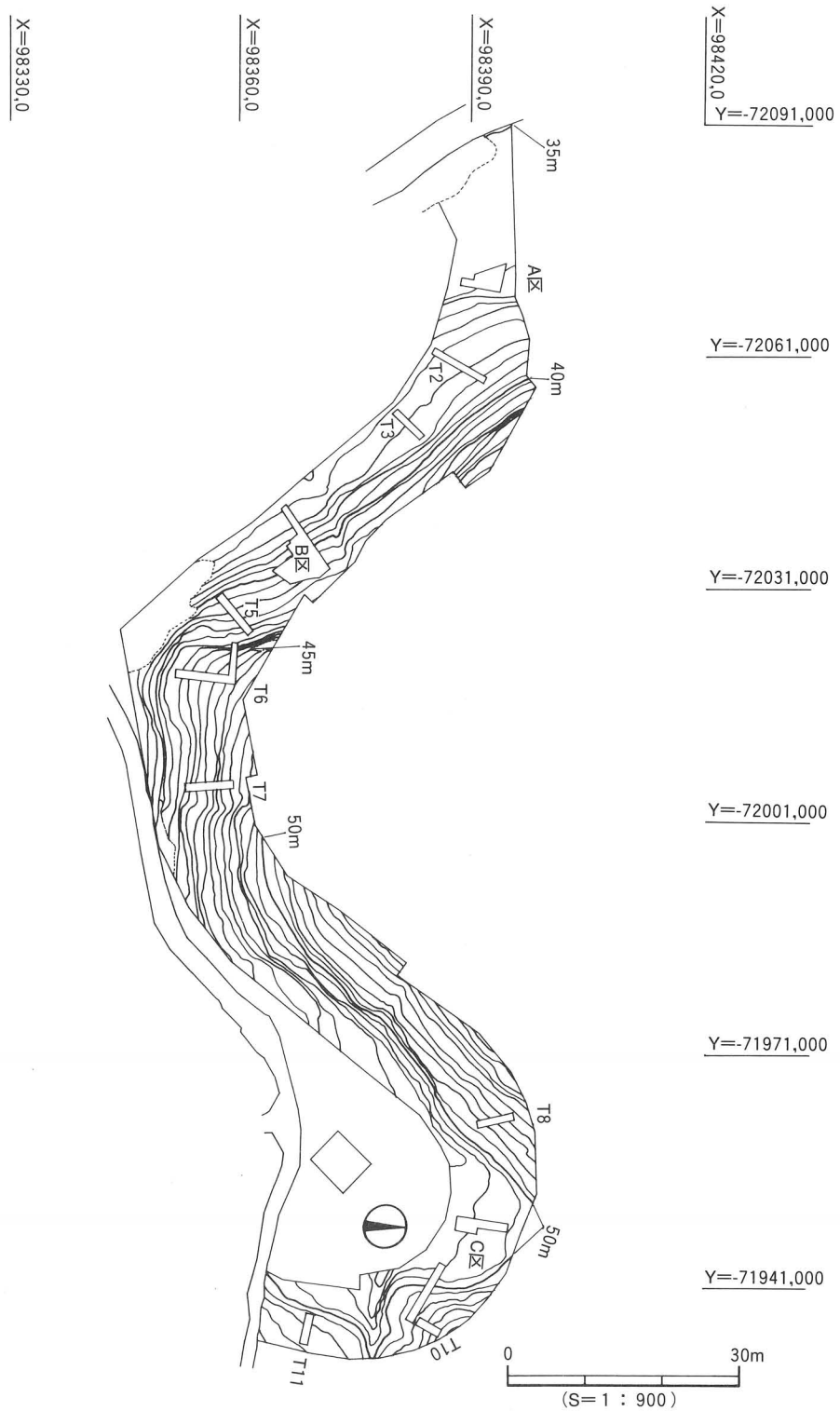
調査作業員 栗林和孝、岡崎政信、保島秀幸、田中茂樹、岡良茂、灘野紀弘、相原勇、渡辺常信、宮内徹、丹生谷道代、矢野久子、多知川富美子 ほか

発掘調査は、平成9年12月15日から開始した。調査地が丘陵谷部の斜面に位置することから、調査は地形測量(50cmコンター測量を含む)をおこないながら、トレンチ設定をおこなった。発掘区は、試掘調査時に遺物包含層を確認したT1、遺物包含層と石列を確認したT4の2本のトレンチを拡張して設定した。T1拡張区を「A区」、T4拡張区を「B区」と呼称することとした。さらに調査地の南東にT6～T10を設定し、遺跡の有無と性格等の把握に務めた。トレンチは幅1mとし、調査地を横断する形で設定した。表土層以下の精査を進めたところ、基盤層の落ち込みを検出した。なかに

はトレンチの深さが1 mに達するところがあったため、最終的には幅0,5mで深掘りを実施した。基盤層を検出した段階で25cmのコンター測量をおこなった。T 9 では暗渠状の石列を確認したため、拡張し「C区」と呼称した。暗渠状の石列検出後、著しい湧水におそわれC区の実測は困難をきわめた。設定した11の調査区の図面や写真等を記録し、調査を終えたのは平成10年1月30日である。2月2日

からは埋蔵文化財センターにて報告書作成のための基礎的な整理作業を始めた。

整理作業は、記録図面・記録写真の整理と、出土遺物の整理に大別される。記録図面・記録写真の整理は、台帳を作成し、図面の合成を通して比較検討を加え、各調査区の埋土の対応関係を調べた。これらの基礎的な整理作業を同年3月末までおこない、4月からは、本格的に報告書の作成にとりかかり、全ての作業を同年8月に終えた。



第1図 地形測量図 [コンター測量は地表面、50cm毎]

2. 層位

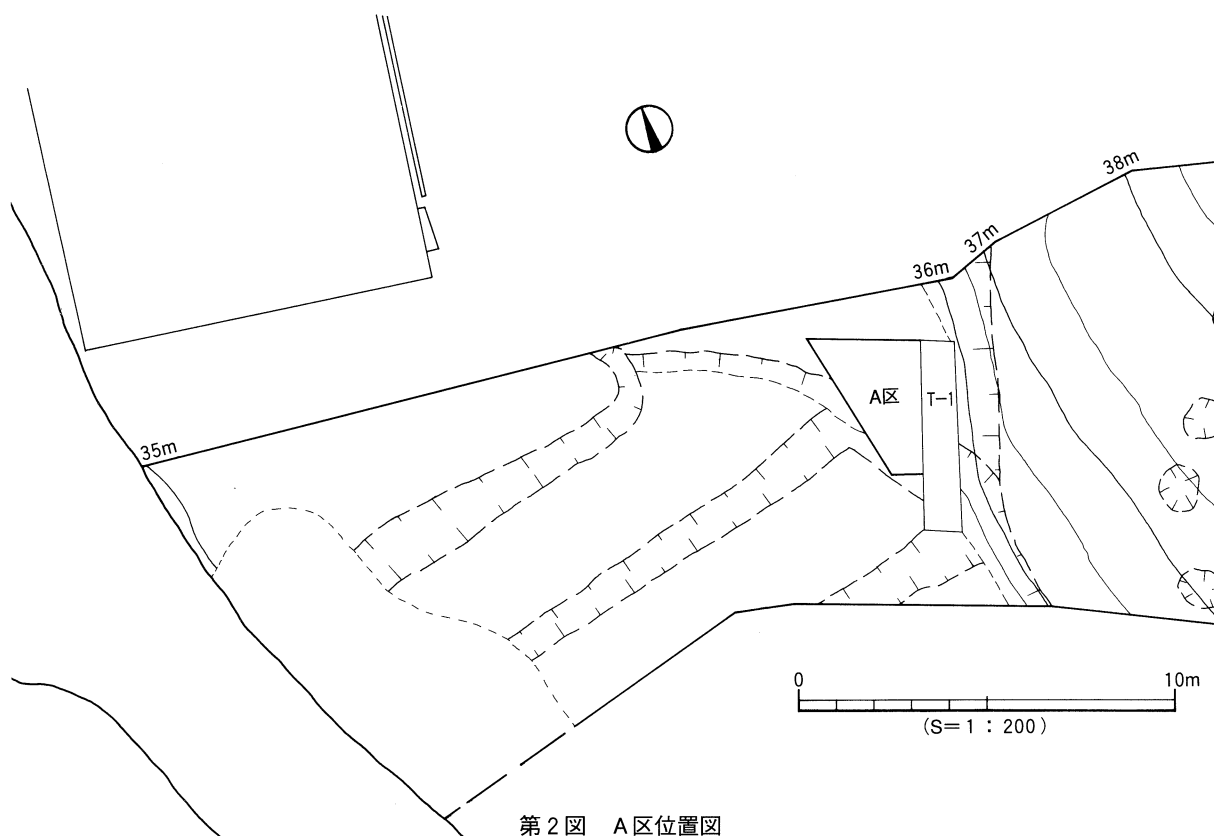
本調査区における基本土層は3層である。表土層（Ⅰ層）下には、基盤層が風化したパイラン土層（Ⅱ層）が30～50cm堆積しており、調査区の中には1m以上の堆積を測るものもある。Ⅲ層は花崗岩で構成された基盤層であり、南にむけて急傾斜していることが確認されている。後述するB区の包含層は、このⅡ層とⅢ層の間に堆積していた12世紀後半～13世紀代の遺物包含層である。

3. 遺構と遺物

(1) A区

A区は、調査対象区の最西端に設定した調査区である。調査当初、長さ5m、幅1mのトレンチを設定していたが、その後、西に拡張し「A区」と呼称することとした。掘り下げをおこなったところ、7層に大別された。7層付近からは著しく湧水が認められ、調査中にトレンチの壁が崩落したので、危険と判断して7層以下の掘り下げは中止した。

1層は腐植土層。2～4層は暗灰色土と燈色土の互層である。いずれも粘性のある土であり、灰色土は旧水田層、燈色土は旧水田層床土と考えられる。出土遺物から近現代の水田に関わる土層である。このことは古老の話と符合する。すなわち、T1より西側は昭和初期頃まで水田として利用され、米の出来高も比較的多かったという。しかし、幾たびかの川の氾濫によって水田に壊滅的被害が出た



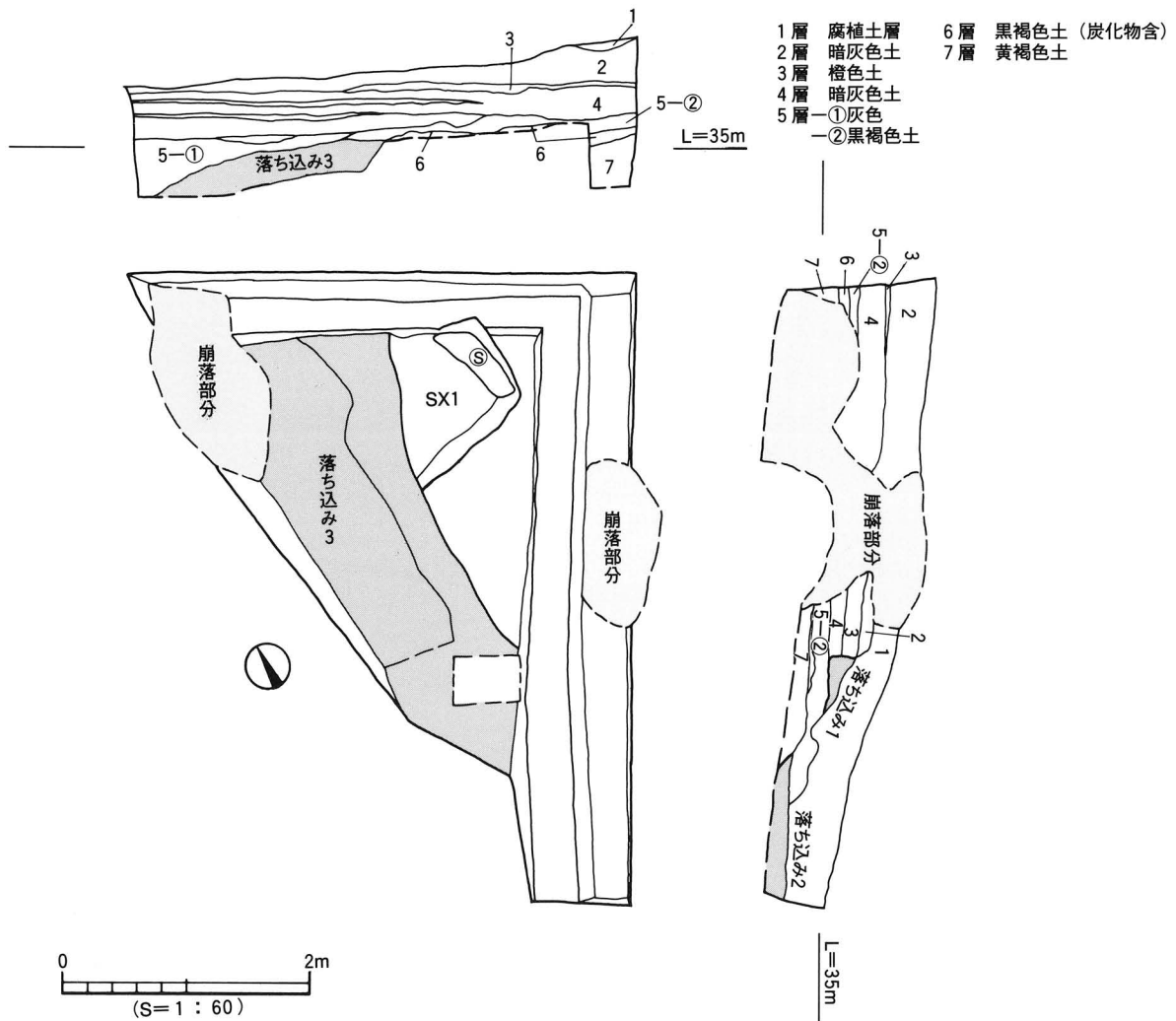
ために水田を止め畑として土地利用したという証言である。2層上面では段カットされた箇所（落ち込み1）が確認された。

5層は上部（5-①層）が灰色砂質土、下部（5-②層）が黒褐色土である。6層は粘性があり一部に炭化物を含む黒褐色土である。層厚4～10cmを測り、細片ながら土師器あるいは弥生土器と考えられる土器が数点出土した。ただし、遺存が悪く図化できない。本層上面で落ち込み2、落ち込み3、SX1を検出した。7層はややしまりがある黄褐色土である。

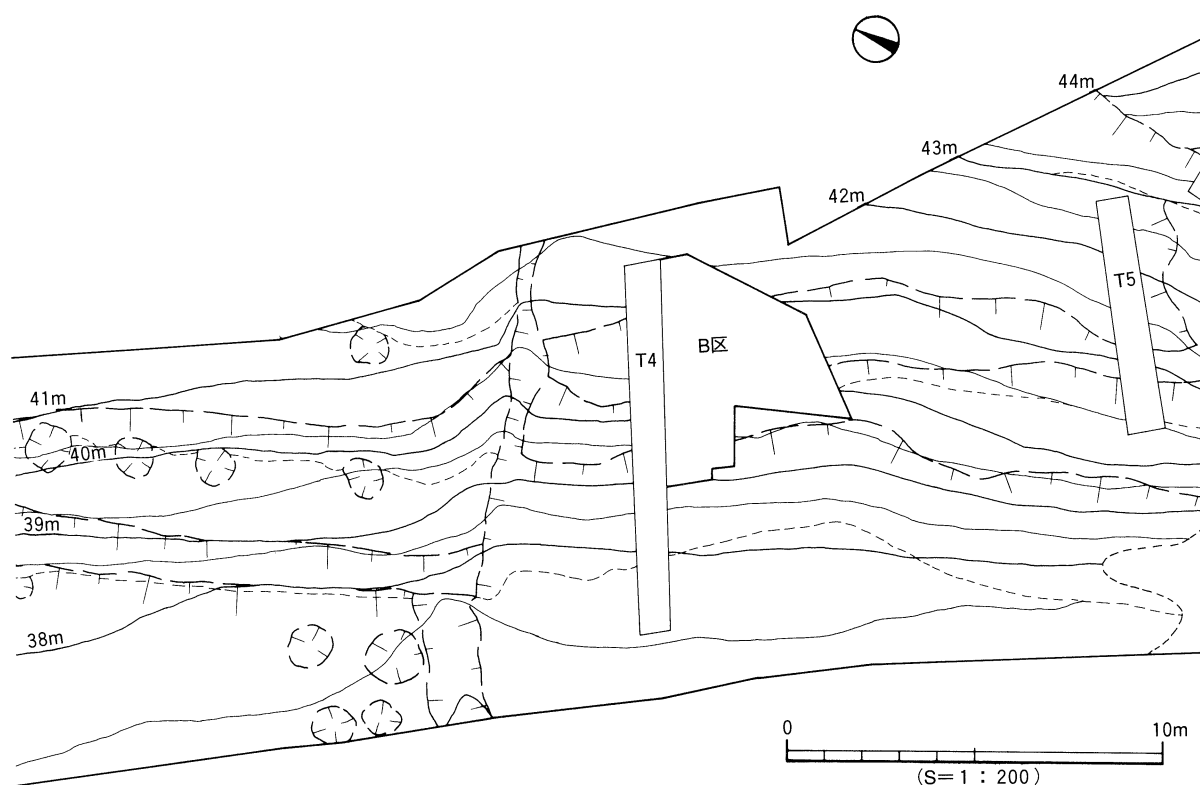
SX1 6層上面で検出された長方形を呈する土坑状の落ち込みである。規模は長軸1,2m、短軸0,8m、深さ0,3mを測る。南西部は落ち込み3で切られる。埋土は灰色土であり、多量の有機質を含んでいる。

(2) B区

B区はT3の南東18m地点に設定した調査区である。当初は東西1m、南北10mの細長い調査区であった。20～30cmの腐植土層（現、表土層）の下には、第2層淡茶褐色土があり層厚30～80cmを測る。



第3図 A区測量図



第4図 B区位置図

第2層中で南北に続く石列を検出した。トレンチの壁面を詳細に観察したが石列に伴う掘り込みは確認されていない。トレンチの北には層厚5～50cmの第3層淡黒褐色土が堆積していた。粘性を帯び、炭化物を一部含んでいた。断面観察では、上下に分層可能であったが出土遺物のなかに接合関係が認められるものがあったことから一層として扱うこととした。第4～6層はトレンチの南端付近にのみ認められた土層である。いずれもバイラン土であり、上層にいくに従い水平堆積に近くなる。

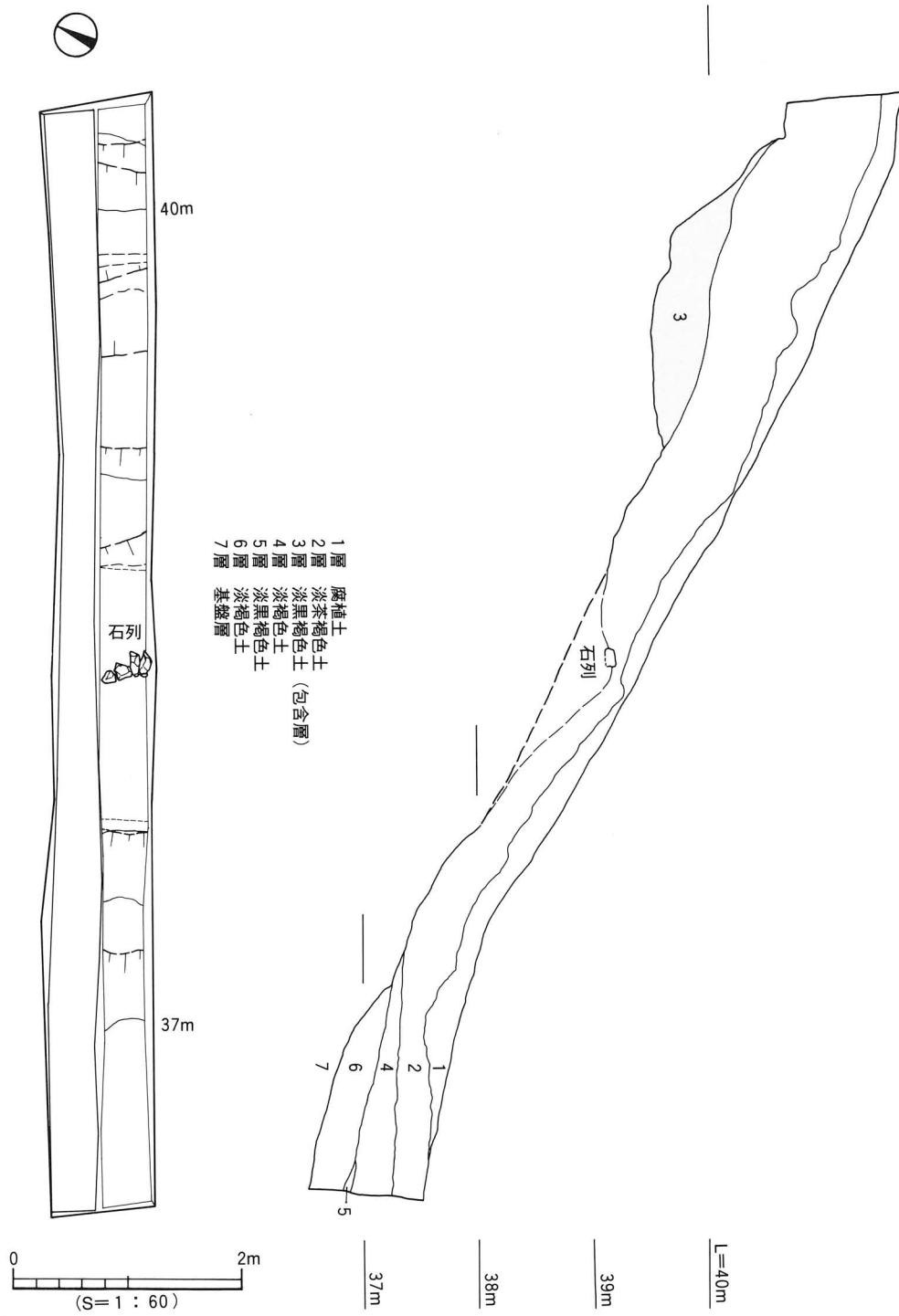
遺物は1層から瓦片、瓦器片、土師器皿、2層から土師器皿・坏、磁器片、寛永通宝、石器、鉄滓が出土した。3層からは亀山焼きと考えられる大甕破片、土師器皿・坏、三足付き羽釜片が出土した。3層からは比較的まとまりのある12世紀後半～13世紀代の遺物が認められる。第4層以下は無遺物であった。なお、石列と第3層を確認した段階でトレンチを東方向に拡張し「B区」と呼称して調査を進めた。

石列 石列は2層中における検出である。ほぼトレンチの長軸に直交する形で続くものと想定されたため、B区として石列の続きを精査したが遺存状態が悪く検出できなかった部分がある。石列は石の長軸が南北方向を指し、かつ石の上面がほぼ水平になるように据え置かれていた。石は角のとれた丸みのあるものが多用されている。2層中の検出であり、石列北方向に基盤層の傾斜変換がみられることから、ここでは土地の区画を意図した近・現代の石列と考えておきたい。

出土遺物 (第10図2～7、10、11)

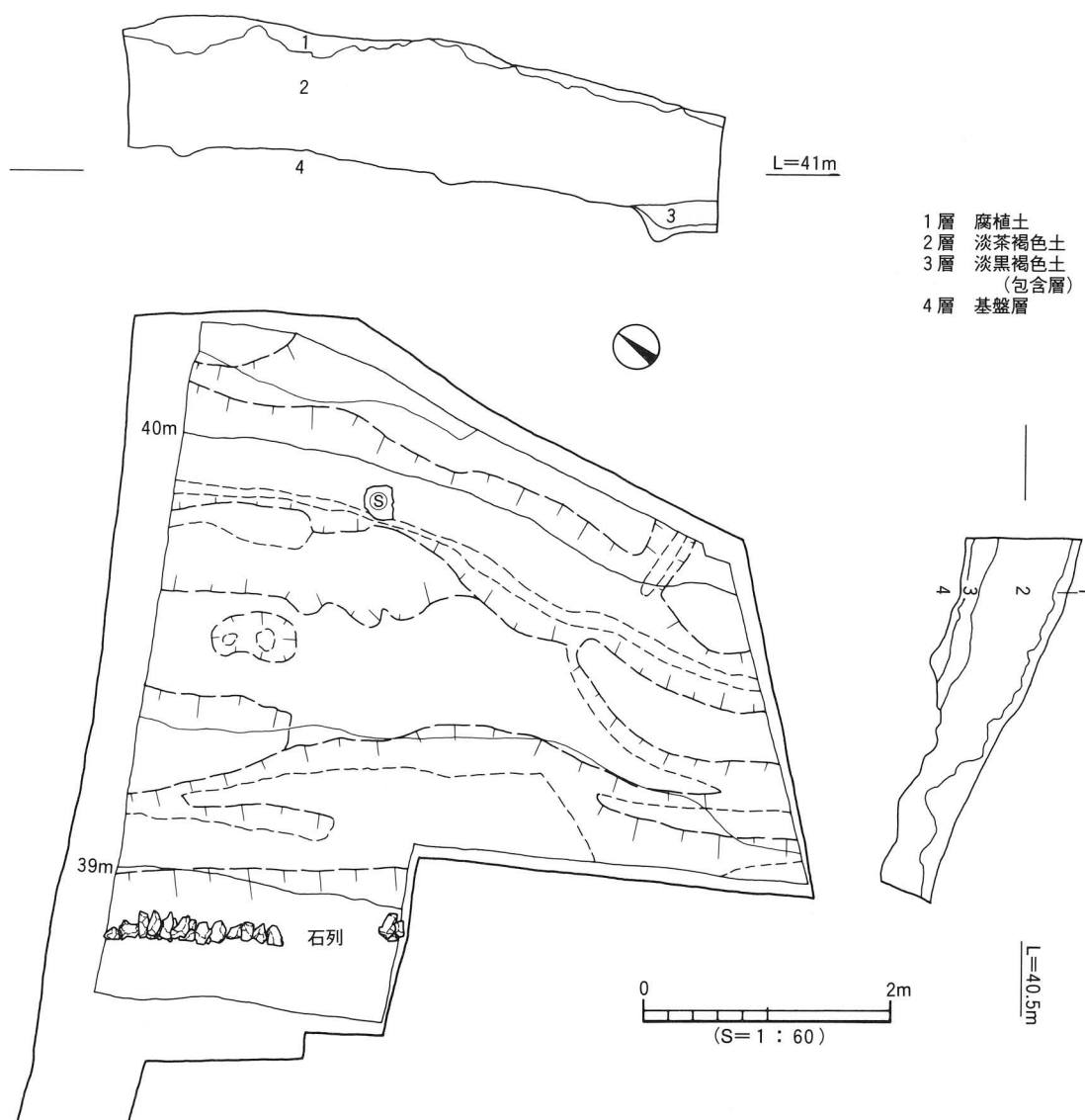
2は1層出土の皿である。底部は円盤形の貼付高台状を呈している。底外面は静止糸切り離しが認

められる。3～5は皿である。5～7は3層出土遺物である。5は皿、6は坏、7は亀山焼きの大甕
 であろう。10・11は鉄器である。10は用途不明の鉄器である。11は一部を欠く鉄滓である。



第5図 T4測量図〔コンター測量は7層上面、50cm毎〕

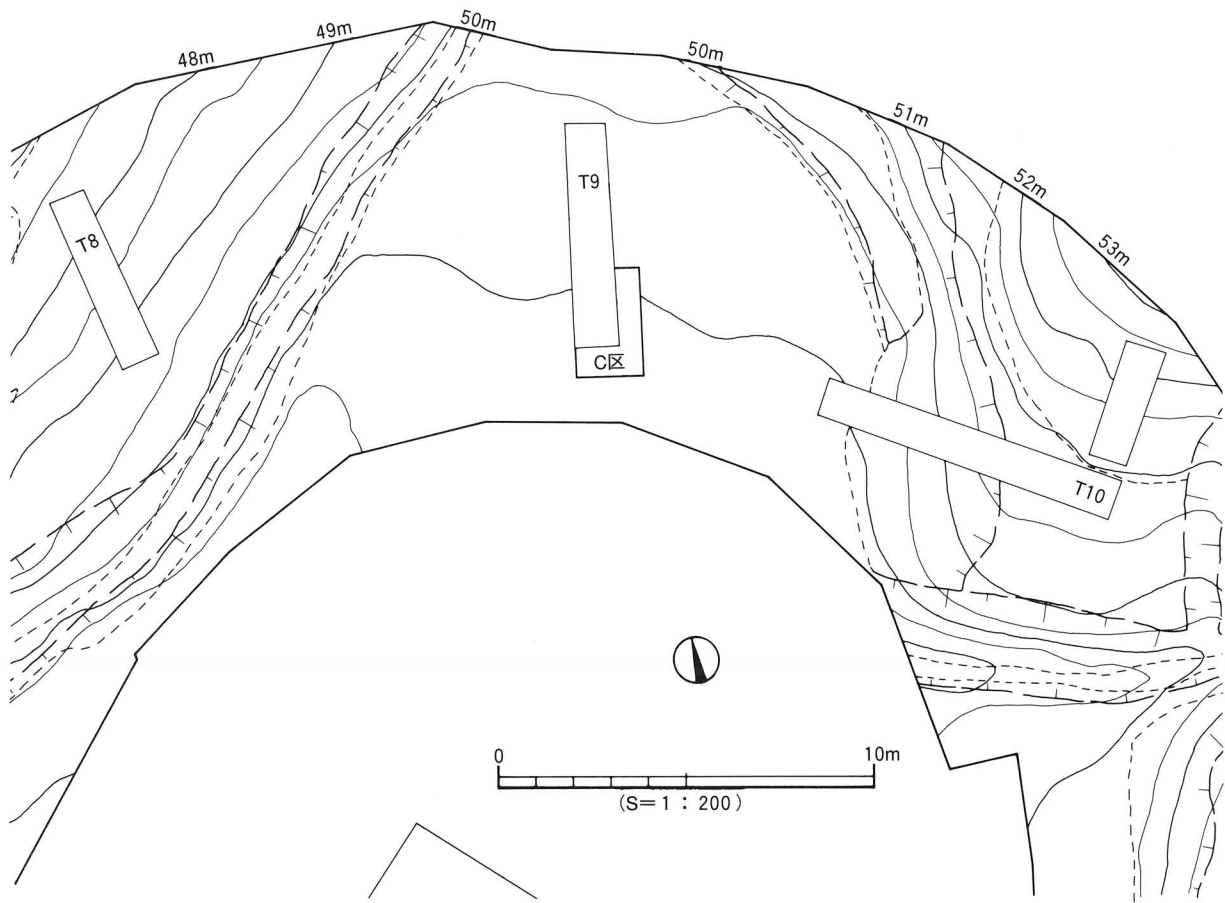
遺構と遺物



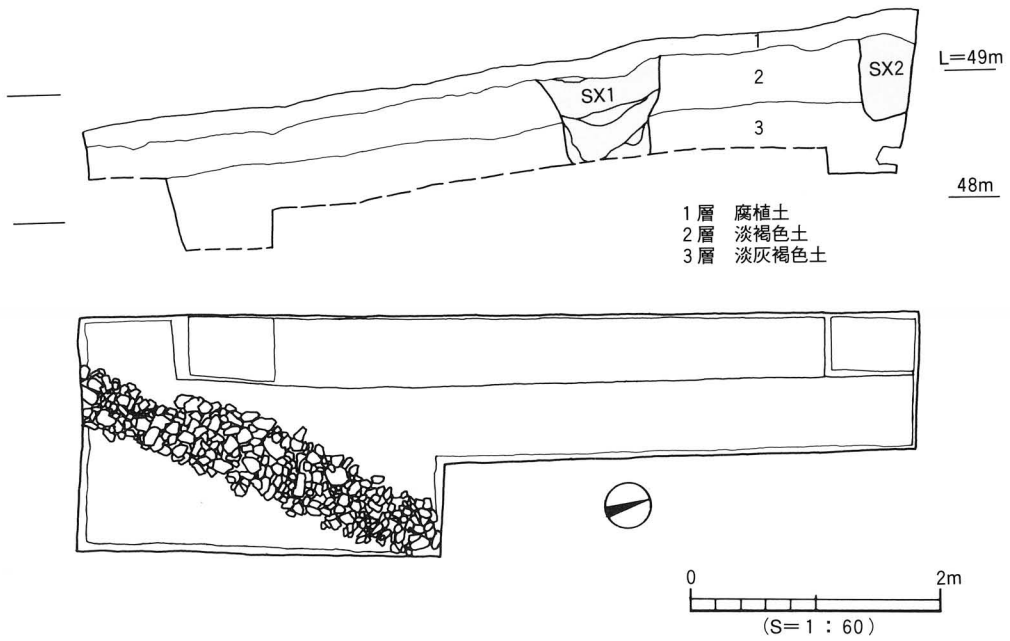
第6図 B区測量図〔コンター測量は4層上面、50cm毎〕

(3) C区

C区はT 8の東11m地点の谷部に設定した調査区である。当初東西1 m、南北6 mの細長いトレンチを設定していた。10~20cmの腐植土層(現、表土層)があり、その下には第2層淡褐色土が30~40cm堆積していた。本層上面で性格不明遺構(SX)を2基検出した。第3層は淡灰褐色土が50~80cm堆積しており、本層上面で集石状の石の集まりを検出した。なお、本層を掘り下げ中から湧水が認められたためトレンチの南北端を深掘りし調査の効率化を図ろうとした。この段階で調査区を南東に拡張し「C区」と呼称することとした。拡張した結果、石の集まりは北東~南西に続く暗渠状の石列であることが明らかとなった。さらに湧水はこの暗渠を中心に認められ、暗渠が現在に至ってもなお機能していることが解った。著しい湧水によってC区は完全に水没し、測量は困難を究めた。遺物は2層から白磁の皿が出土している。近・現代に時期比定されることから、暗渠も同一時期のものと判断しておきたい。

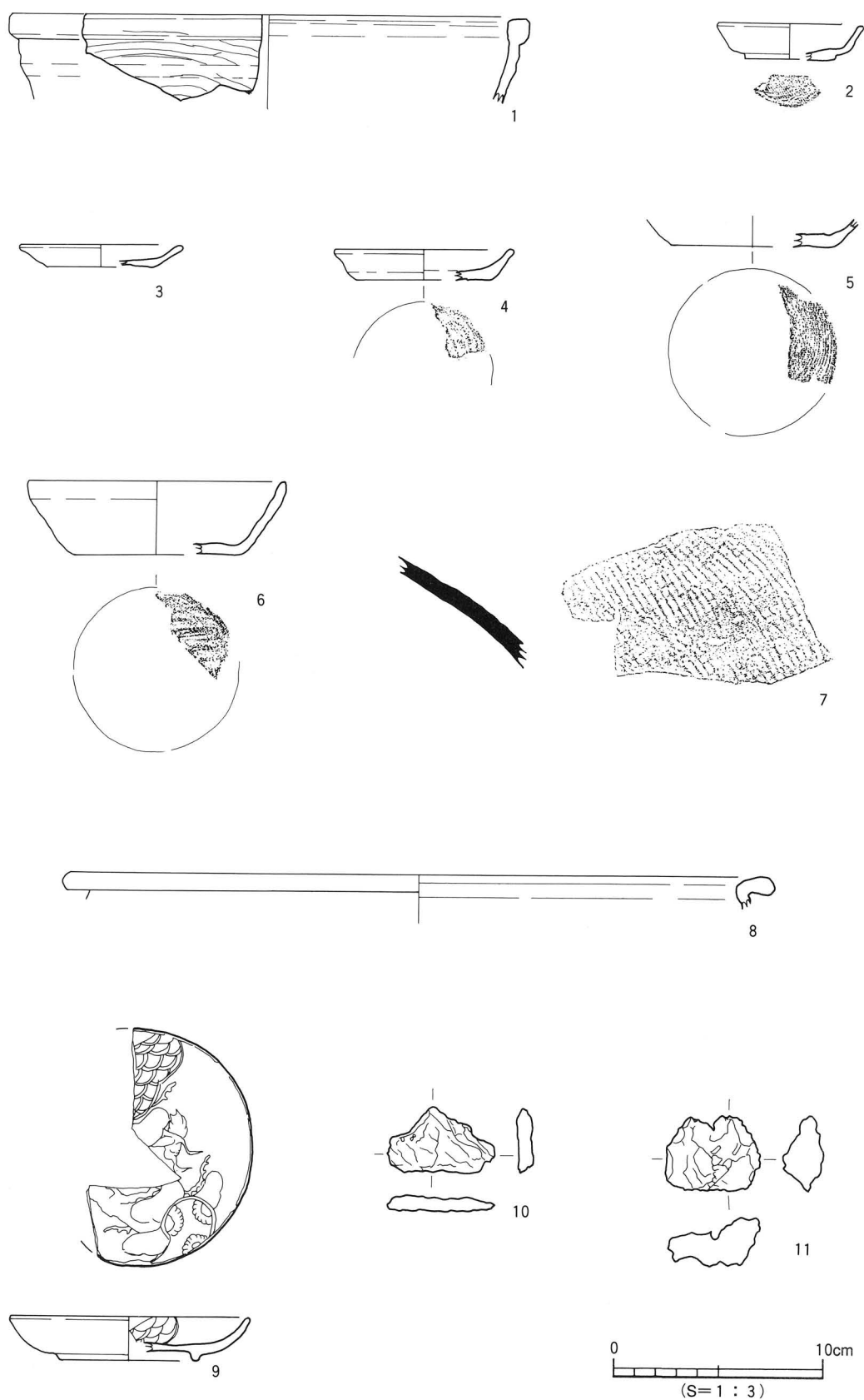


第7図 C区位置図



第8図 C区測量図

遺構と遺物



第9図 出土遺物実測図

4. 小結

本調査では、対象区の地形測量とトレンチ調査を実施した。その結果、三つの成果を挙げることができた。第一にB区で確認された第3層の遺物包含層の検出である。遺物の出土量が少なく、基盤層が急傾斜をもつことから、本層はトレンチ北方向からの二次堆積によって形成されたものと想定される。B区北側の高所には当該期の遺構が展開する可能性が指摘できよう。

第二に検出された石列の時期と性格をある程度特定出来たことである。B区の石列は近・現代の区画石列、C区の石列は現代の暗渠施設であることを明らかにし得た。同遺跡1～4次調査で検出されている石列や集石の時期や性格を考えていく上で参考となるものである。

第三に調査対象地西端がかつて水田として機能していたこと、果樹園として造成した際にバイラン土を二次的に盛ったことが明らかとなったことである。このことは当地の土地利用を具体的に示す資料である。

当地周辺は太山寺古墳群として周知されてはいるが、具体的な古墳の様相を明らかにする機会に恵まれていない。また、当該期の集落や生産遺跡の様相も不明の部分が多く、これらは今後実施される本格調査の課題として挙げられよう。

表1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	鉢	口径(24.4) 残高 4.0	磁器。	ヨコナデ	ヨコナデ	密	◎	T2-2層	
2	皿	口径 6.8 器高 1.7 底径 (4.4)	土師質。底部は円盤形の貼り付け高台。	マメツ 底静止糸切り	マメツ	長(1) クサリ礫	○	T4-1層	
3	皿	口径 (7.8) 器高 1.0 底径 (5.0)	土師質。	マメツ	マメツ	石(3)	△	T4-3層	
4	皿	口径 (8.4) 器高 1.5 底径 (6.4)	土師質。	ヨコナデ 底糸切り	ヨコナデ	石・長(1) 金	○	B区-2層	
5	皿	底径 (7.9) 残高 1.4	土師質。底部片。	マメツ 底糸切り	マメツ	石・長(2) 金	○	B区-3層	
6	坏	口径(12.0) 器高 3.5 底径 (8.0)	土師質。	ヨコナデ 底回転糸切り	ヨコナデ	密	○	B区-3層	
7	甕	残高 5.0	須恵質。亀山焼。	タタキ	ヨコナデ	密	◎	B区-3層	
8	鍋	口径(33.0) 残高 1.5	口縁片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密	◎	T6-2層	
9	皿	口径(11.2) 器高 2.1 底径 (6.4)	白磁皿。	施釉	施釉	密	◎	T9-2層	

表2 出土遺物観察表 鉄製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
10	不 明	完 存		3.1	5.1	0.8		T4-1層	
11	鉄 滓	一 部 欠		3.6	4.5	2.3		T4-3層	

第Ⅶ章 ま と め

本書では、太山寺町における太山寺経田遺跡（1～5次調査）について報告を行った。

ここでは、調査成果と今後の調査課題をあげ、本書のまとめとする。

1. 縄文時代

縄文時代では、遺構に伴うものでないが縄文土器の出土が挙げられる。それは、2次調査地A区の礫石密集部から後期～晩期にかけての鉢形土器片である。出土土器片は、遺構構築段階に混入したと思われる。遺構自体の年代等については明らかにできていないが、周辺に縄文時代の遺構が存在している可能性を示唆している貴重な資料である。縄文時代の遺跡には第Ⅰ章でも列記している様に、太山寺山塊の北・東部域の丘陵や平野域等で遺跡が確認されており、今後、同山塊の南域でも縄文遺跡が存在している可能性が考えられる。

2. 弥生時代

弥生時代では、特に前期末～中期初頭にかけての貯蔵穴が検出された事が挙げられる。2次調査地C区並びに3次調査地A区で検出されているものである。丘陵上の貯蔵穴には、本遺跡南西の鶴ヶ峠遺跡にみられ、本遺跡の貯蔵穴も含め好資料である。

また、各調査地での良好な包含層の確認や破片ではあるが弥生土器片の出土、3次調査地B区の伐採斧の出土など、周辺に集落遺跡の存在が高い資料といえ注目される。今後の周辺の調査に期待するものである。

3. 古墳時代

まず、1次調査地B区の竪穴住居址（SB1）が挙げられる。中期前半と考えられる壺・甕・高坏の土師器が住居址内からまとまって出土している。これらは、松山平野内の古墳時代の土器資料として貴重な資料である。

また、各調査地では古墳に伴う遺構の検出はみなかったが、須恵器片の出土や溝・土坑等の遺構検出は、本遺跡周辺に古墳や当該期の集落が明らかに存在しているものを示唆する資料であり、今後、周辺域の調査に期待するものである。

4. 中近世

中世では、1次調査A区溝（SD1）から13世紀代と思われる土師器杯と和泉型瓦器椀片が出土している。また、5次調査B区では、12世紀後半～13世紀前半の包含層（3層）が確認され、4次調査でも土師器片の出土が見られ、本遺跡周辺には中世集落が存在している可能性がある。

近世では、1～5次調査地のいづれからも石列・集石・暗渠等が検出されている。これら遺構は、出土土器や層位等から江戸時代以降のものであることが、調査によって明らかにされている。1次調査では、陶磁器片・寛永通宝等から石列が江戸時代の初め頃から構築されており、5次調査では近現

ま と め

代に構築されたものであることが解明できている。これは、江戸時代に入って経田池周辺の平野部に近い丘陵の開墾がはじまり、徐々に山間部へと生産域が拡大していった事が解る。また、暗渠施設には1次調査地D区・5次調査地C区が挙げられる。他は遺構は、土地の区画的要素が強いものと思われ、丘陵全域にこれら区画的施設が江戸時代以降の開墾行為の所産として残っている可能性が高い。使用されている石材は、本遺跡が所在する丘陵で容易に入手できるものである。

2次調査地A区の礫石密集部は、古墳との関連性、或いはそれ以前の祭祀にまつわる遺構か、または、江戸時代以降の開墾行為による投棄か、不明な点があり今回の調査範囲では確認できていない。今後の調査課題となっている。

以上のように、本調査では、縄文時代から近現代にいたる土器の出土し、丘陵上の弥生時代・古墳時代・中世の生活址の一部や近世以降の遺構が検出されるなどの成果があり、調査地周辺が生活・生産の場として現代まで連綿と営み続けられていた様相がみられ、太山寺周辺の歴史解明の一資料を得ることができた。

写 真 图 版

写真図版例言

1. 遺構の撮影は、各調査担当者及び大西朋子が行った。

使用機材：

カメラ ニコンニューFM2
アサヒペンタックス67
トヨフィールド45A
レンズ ズームニッコール 28～85mm
ペンタックス67 55mm他
スーパーアンギュロン 90mm他
フィルム プラスXパン・ネオパンSS・エクタネロームEPP

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ トヨ/ビュー45G
レンズ ジンマーS 240mm他
ストロボ コメット/CA-32・CB2400 (バンク使用)
スタンド トヨ/無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム プラスXパン

3. 白黒写真の現像と焼き付けは、一部を除いて大西が行った。

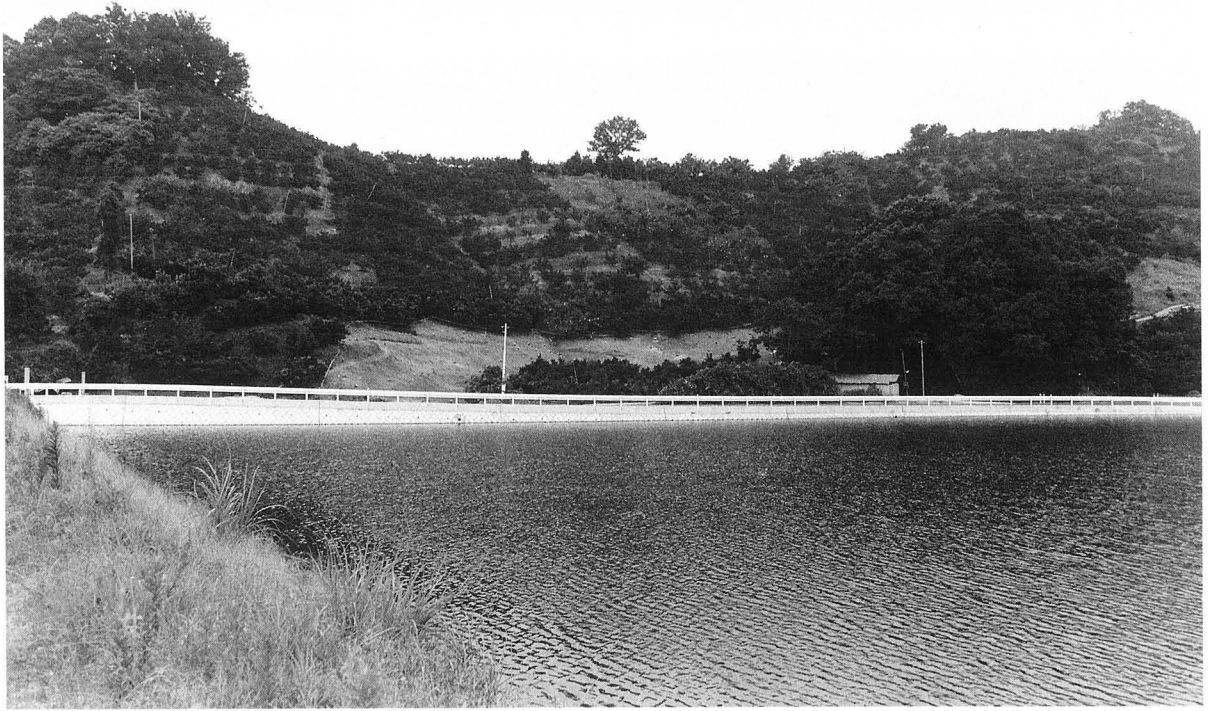
使用機材：

引き伸ばし機 ラッキー450MD
ラッキー90MS
レンズ エル・ニッコール 135mm
エル・ニッコール 50mm
印画紙 イルフォードマルチグレードIVRC
フィルム現像剤 コダックD-76・HC110

【参考】

『埋文写真研究』V01. 1～10

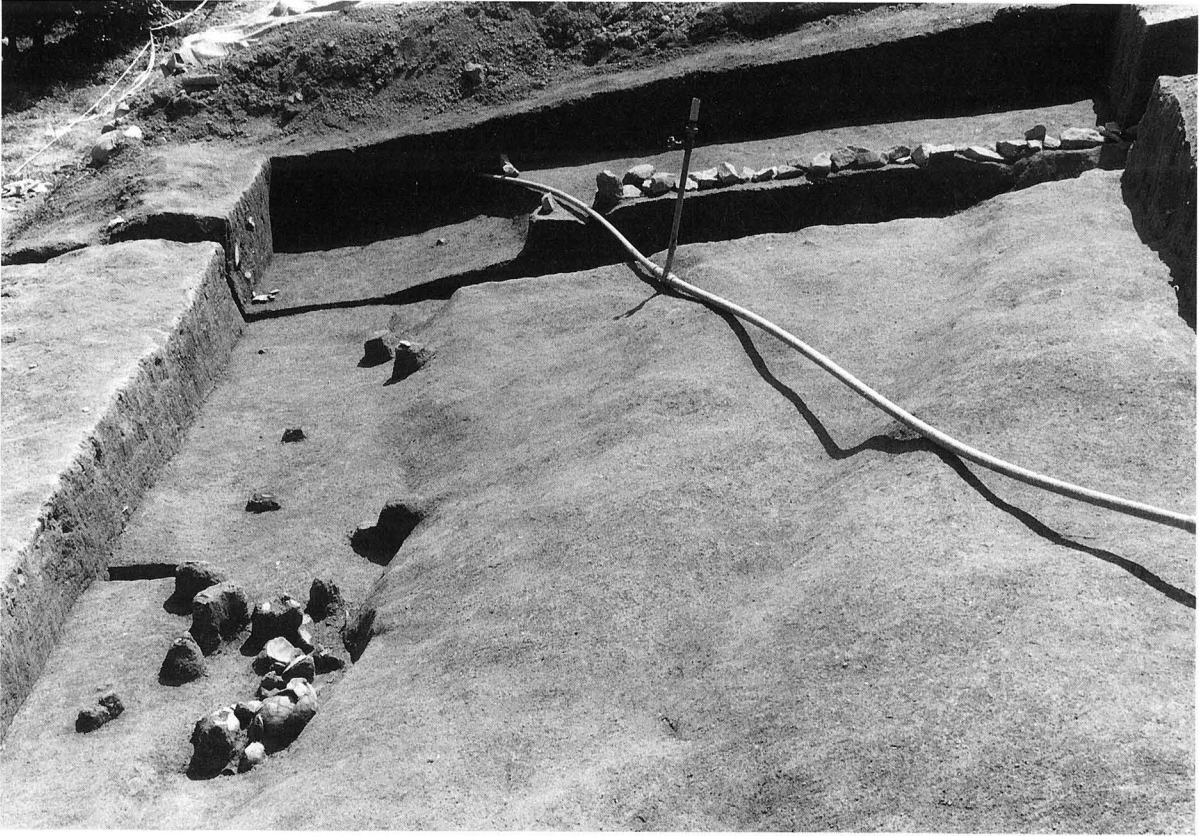
(大西朋子)



1. 調査地遠景（東より）



2. 調査前全景（南東より）



1. A区遺構検出状況（北より）



2. A区SD 1 遺物出土状況（東より）



1. A区遺構完掘状況（北より）



2. B区遺構検出状況（南東より）



1. B区北部拡張後、遺構検出状況（北東より）



2. B区SB1遺物出土状況（北東より）



1. B区SD 1・2 磔出土状況（北東より）



2. B区遺構完掘状況（南東より）



1. C区遺構完掘状況（北より）



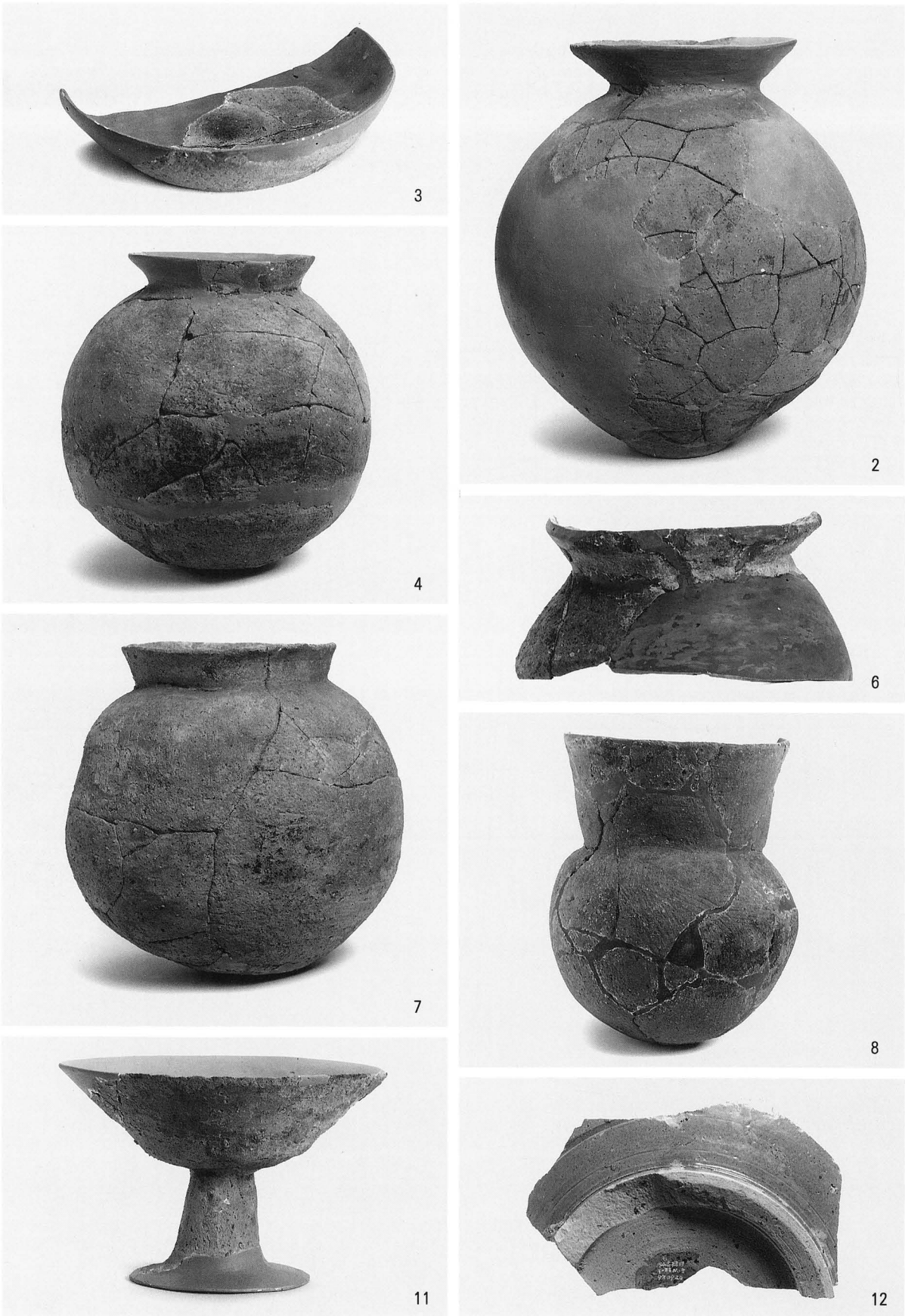
2. D区遺構検出状況（北西より）



1. D区石列交差部礫配置状況（北より）



2. D区遺構完掘状況（北西より）



1. A区SD 1出土遺物(2)、SD 2出土遺物(3)、B区SB 1出土遺物(4、6~8、11)、石列出土遺物(12)



1. 調査地全景（北より）



2. 調査前風景〔北部〕（南より）



3. 調査地南部伐採状況（南より）



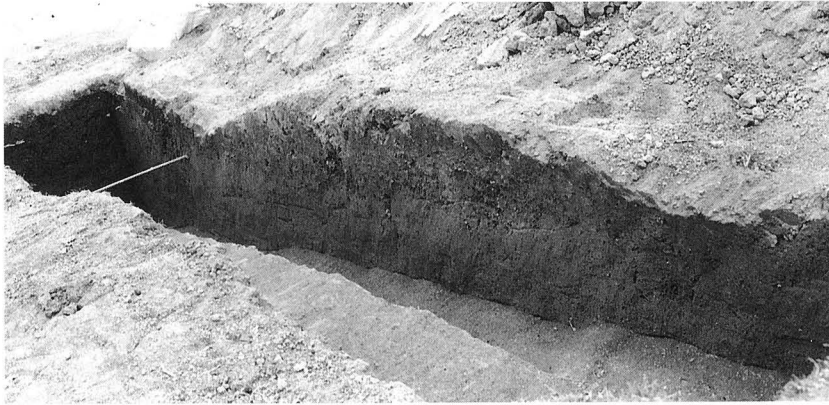
4. 調査地南部伐採状況（南東より）



5. 調査地中央伐採状況（南より）



1. T2土層（東より）



2. T8土層（北西より）



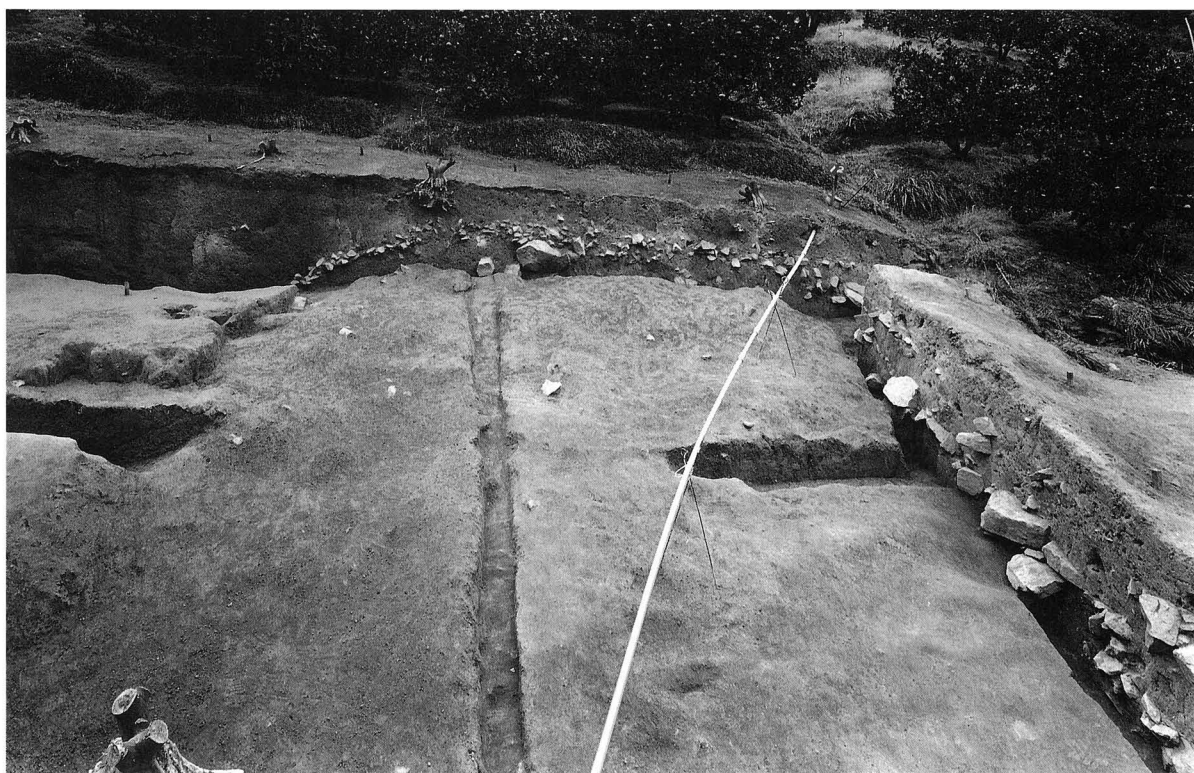
3. T14土層（北東より）



5. T20土層（北西より）



1. A区完掘状況（北より）



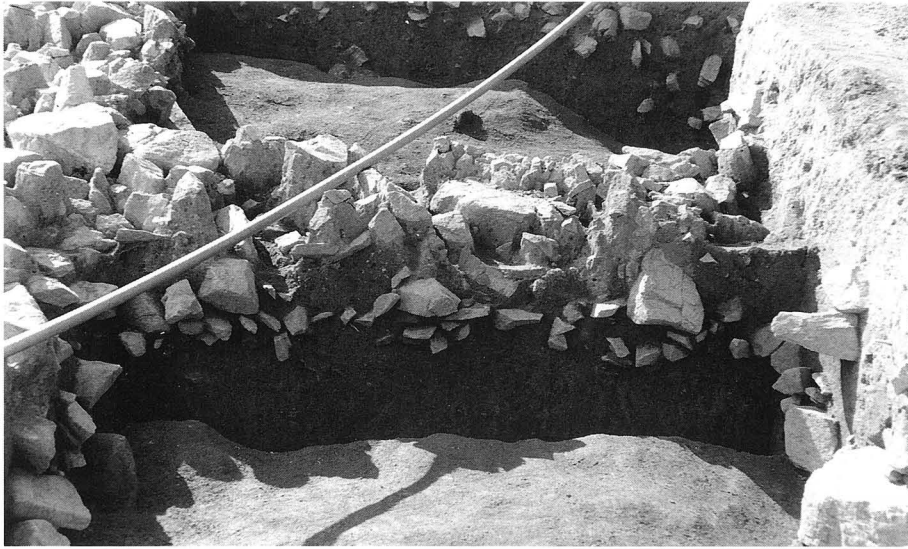
2. A区西壁土層（東より）



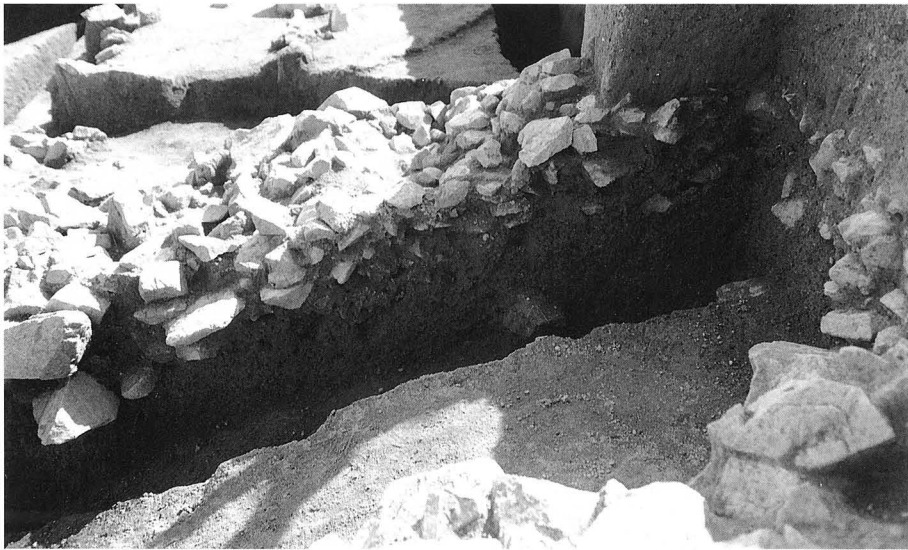
1. A区礫石密集部検出状況（北より）



2. A区礫石密集部掘削状況（東より）



1. A区礫石密集部断面
(東より)



2. A区礫石密集部断面
(北東より)



3. A区礫石密集部遺物
出土状況(東より)



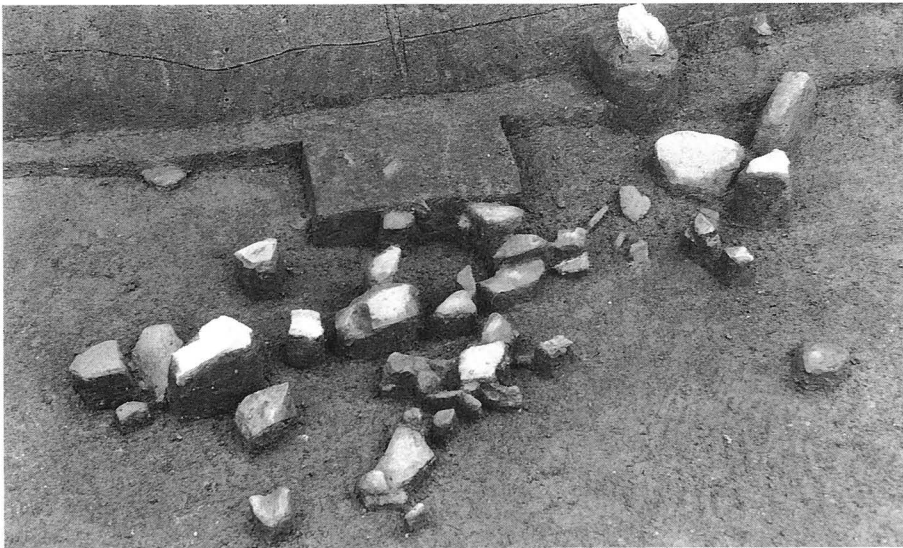
1. B区完掘状況（東より）



2. B区SD1（北より）



1. B区SK1 (北より)



2. B区SK1 遺物出土
状況 (北東より)



3. B区SK1 遺物出土
状況 (北より)



1. C区全景（北西より）



2. C区北部完掘状況（西より）



1. C区南部完掘状況（北東より）



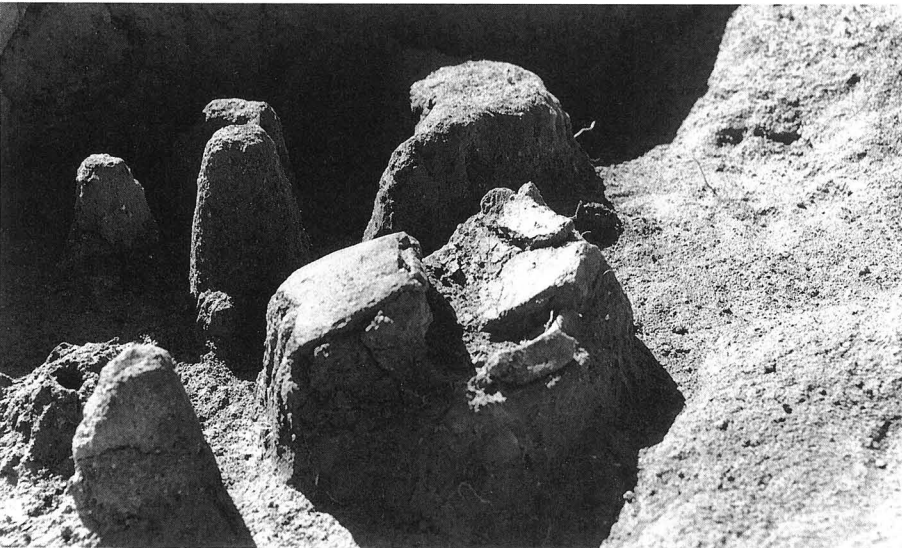
2. C区土層（北東より）



1. C区SK1 (東より)



2. C区SK1土層
(北東より)



3. C区SK1遺物出土
状況 (東より)



1. C区SK2 (北東より)



2. C区SK2土層 (南東より)



1. C区SK 2 遺物出土
状況（北東より）



2. C区SK 2 遺物出土
状況（北東より）



3. C区SK 2 遺物出土
状況（南東より）



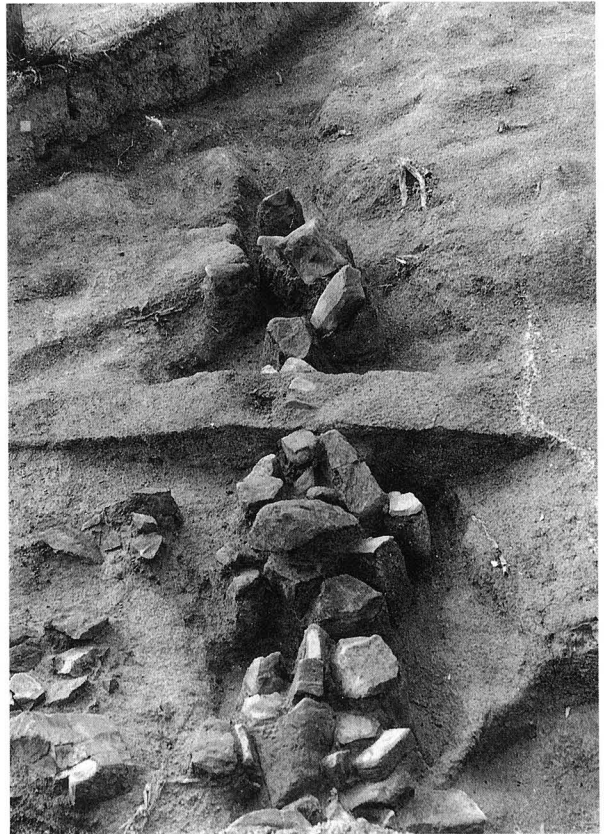
1. C区SD 1 (南東より)



2. C区SD 1土層 (北東より)



3. C区SD 2 (北東より)



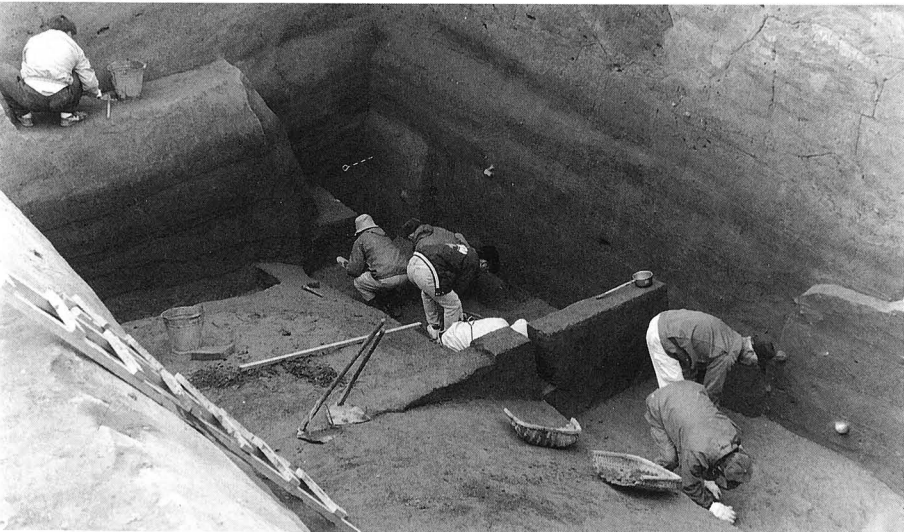
4. C区SD 2 礫石出土状況 (北東より)



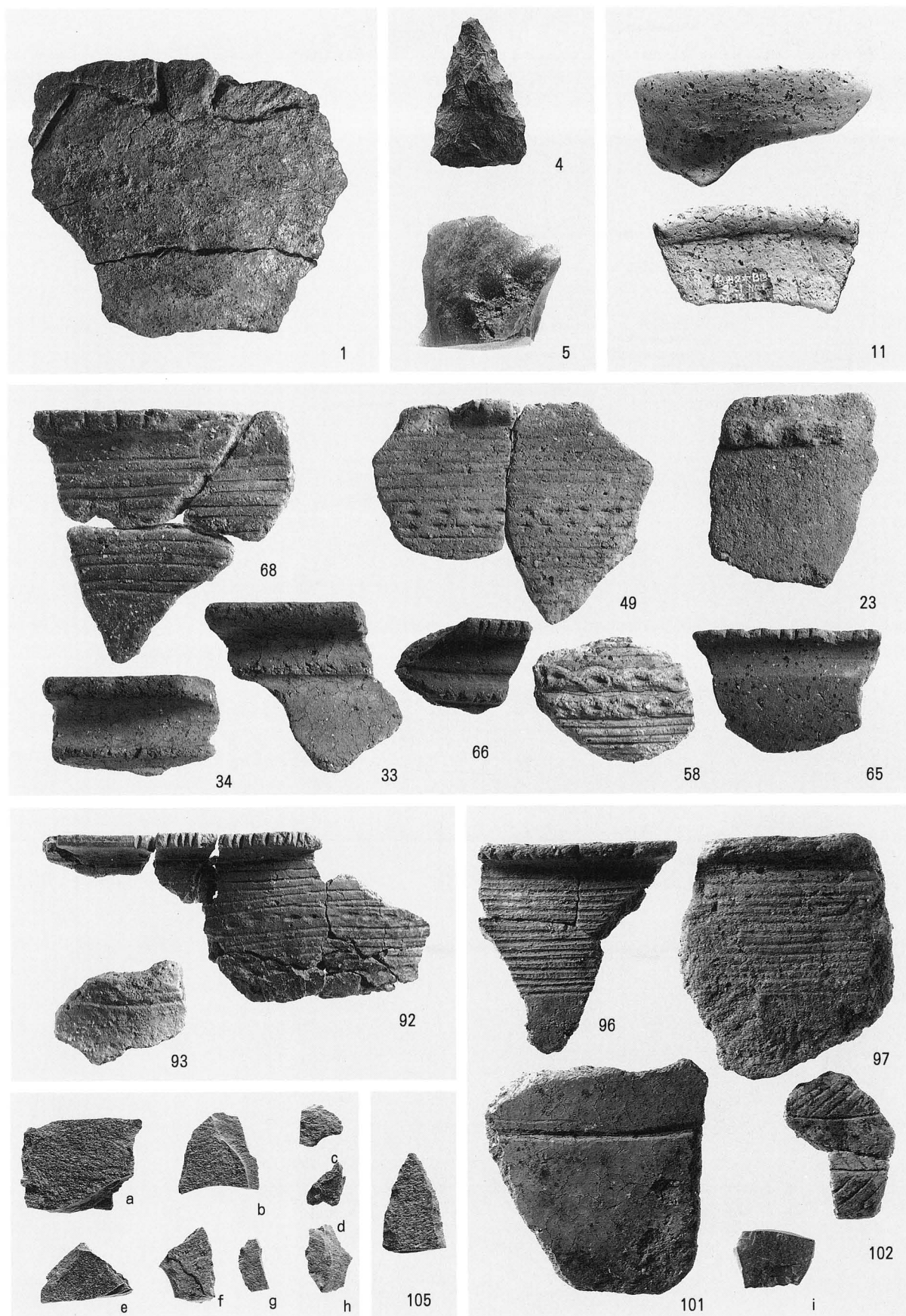
1. C区SD3 (東より)



2. C区SD3土層
(東より)



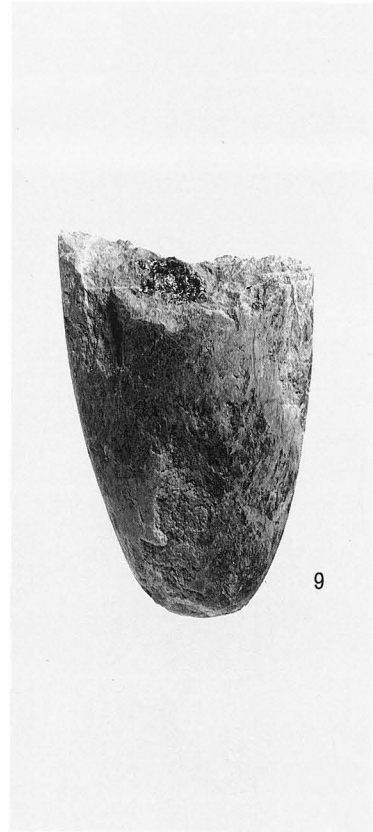
3. 作業風景B区にて
(北西より)



1. A区出土遺物(1)、B区3①層出土遺物(4、5)、B区SK1出土遺物(11)、B区4①層出土遺物(23)、B区4②層出土遺物(33、34、49、58)、B区4③層出土遺物(65)、B区4④層出土遺物(66、68)、C区SK1出土遺物(92、93、a~h)、C区SK2出土遺物(96、97、101、102、i)、C区SD1出土遺物(105)



1. A区遠景（北より）



3. B区包含層出土遺物



2. B区完掘状況（西より）



4. 表採遺物（T10付近）



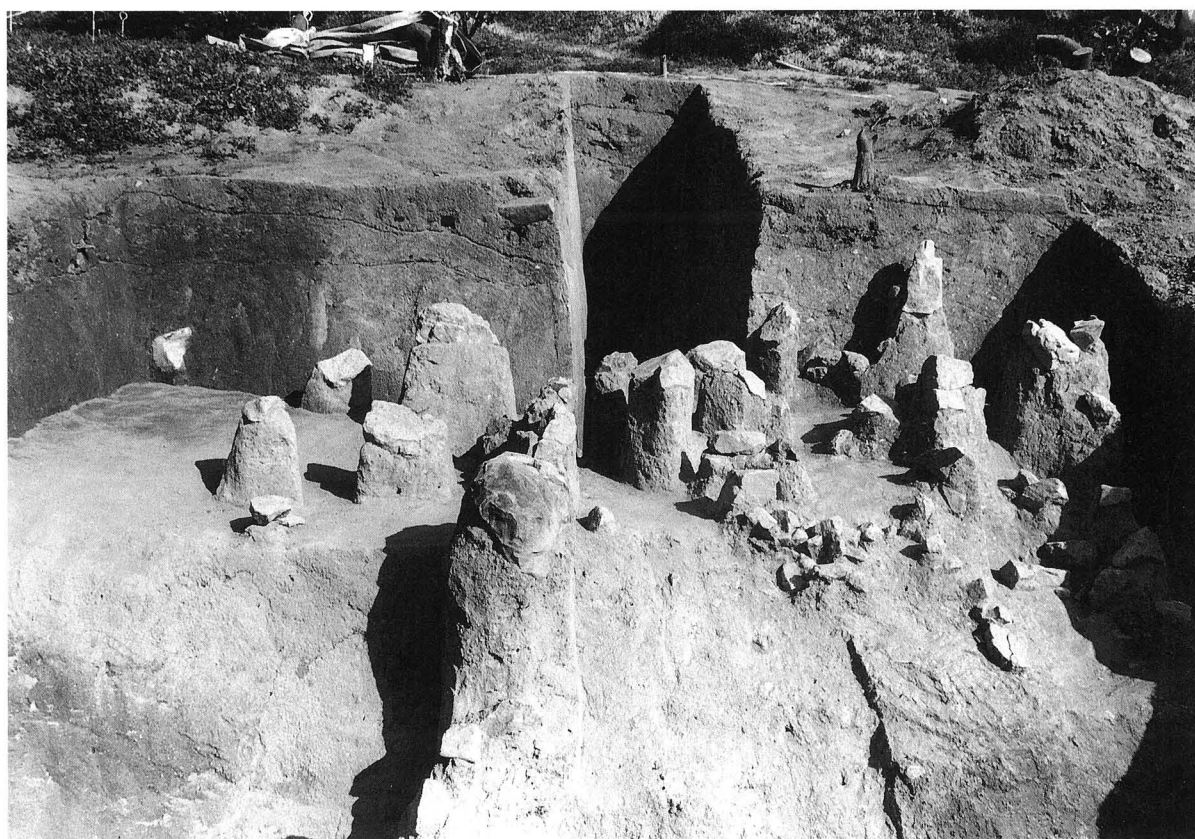
1. 調査前全景（南より）



2. A区石列出土状況（西より）



1. C区集石出土状況（北西より）



2. D区集石出土状況（南より）